

565-210



\*1200800027816\*



565  
210

口  
複  
写



2,8.17

北浦千太郎著

マルキシズムの變革

— 福本イヅム —

東京同人社



北浦千太郎著

ル  
キ  
シ  
ズ  
ム  
の  
變  
革

— 福本イズム —



東京同人社

## 序

現在我國に於ける無産階級陣営内は主として、最右翼としての、社會民衆黨、日本農民黨と、『左翼』としての勞農黨と、この何れにも屬さない『正道派』と稱する日本勞農黨に分解されてゐる。

此の無産階級陣営内に於ける分解作用の發展は、支配階級をして『單一無産政黨』の惡夢を消失せしめた許りか、更に彼をしてこの分解せる無産政黨との『懸引』を容易ならしめ、一方に於て勞働組合法案、耕作權問題を握り潰すと同時に、他方に於ては憲本の提携による政治の『安定』、日銀利子引下げ震手法案、金解禁への準備進行等々と、政治、經濟の『安定』の計畫の遂行を容易に實行せしめるに至つた。

この支配階級の勢力増大は、遂に無産階級の凡ゆる會合、集會を『秩序』の名の下に蹴散らす力を附與した許りか、昨年一昨年も遂行し得た無産階級の大衆的『對議會』示威運動は本年は一つも遂行し得なかつた。

更に支配階級は此の勢ひに乗じて、勞働組合法案、耕作權問題を葬むると同時に、攻勢に出で、勞働組合、農民組合そのものをも粉碎せんとイキこんでゐる。

支配階級並に資本の勢力の増大のペースベクトルと、今日の諸傾向の下に於ては必ず進むであらう所の無産階級運動の勢力減退―分解作用とは、マルクス主義に關心を持つ者をして、無産階級運動

内の諸傾向を批判せしめずには措かない。

而して今日の無産階級の諸傾向とは何ぞや？

曰く中間派をさへ除名してブルジョア陣営内に公然の提携者を見出さんとして、一層右傾せる總同盟首領の傾向と、この傾向に基く總同盟大衆の左傾（だが、左翼と自らを呼ぶまでに今尚ほ成熟してゐない所の）と及び「左翼」を「右翼」よりも嫌ふ所のその首領の傾向と、最後に過去に於いて資本及びその手先との闘争のために無産階級の統一を主唱せるものを「折衷主義」と罵倒しての左翼陣営内の分解作用（日本農民組合の分裂、評議會の分裂）を助成してゐる所謂「左翼」の傾向とが存在してゐる。この傾向は何れも明白に非マルクス主義的である。

總同盟の場合は論ずる餘地なしとしても、日本労働黨が自己の團體を目して之を「眞實」のマルクス主義的のものと呼び、労働黨また自己を目して唯一の無産階級のものと呼ぶ。だが彼等は何れも「言葉」の上のマルクス主義的、無産階級の行動を探るものであつて、行動は明かに非無産階級の非マルクス主義的である。

何故斯く呼ぶか？著者は徒らに批評せんが爲に斯く批評するに非ずして、彼等が「言葉」の上でなく行動の上に無産階級の行動を探られんことを願ふ爲に外ならない。例へば彼等は何れも「単一政黨」を欲求し、「無産階級の行動」を大衆に誓言する。然るにその行動は、大衆への申の譯し爲の「懸引」の協同動作の提議か、排他的行動に過ぎない。

此の無産階級陣営内の闘争の尖鋭化を助成するものは、明かに大衆から背馳するものであると同時に、無産階級の勢力を益々分散疲弊せしめるものであり、明かに支配階級の手操られる結果を生み支配階級をして漁夫の利を占めしめるものである。

然らば今日の勞資勢力の對立關係に於て何を爲すべきか？夫は嘗て著者が「無産者新聞」第五十九號の社説及び第一面に掲げたやうに、資本とブルジョア政黨及びその手先黨とに對抗して、無産階級の利益を擁護する爲に、労働黨と日本労働黨、左翼と中間派の即時無條件合同である。

だが、今日の無産階級内の尖鋭化する對立關係に於て、之が可能なりやといふことが直ちに質問として提出され得る。けれども全ての社會現象は人間の意志、行動の外に生じるものではなくして、それを通じて生ずるものであるから（勿論之は自然的、社會的條件から人間の意志、行動が自由であるといふことではない）この思想が大衆を把握すれば、夫は可能事である。

だが、この思想が、現在の社會的状態、社會的條件の反映として、著者の人間的頭腦に乗り換へ、そこで變形された社會的状態、社會的條件なる物質であることには變りはない。而して一切の現象は法則を持ち、この法則の把握は次に現はるべき現象の豫言をなし得るものである。この實證は、著者が「無産者新聞」を引退する時、現在日本労働黨及び労働黨の關係の尖鋭化に努力してゐる編輯者諸君に向つて、若し諸君の如き態度で、労働黨大衆に兩黨の對立激成を宣傳されるならば、日本農民組合は分裂し、延ては日本労働組合評議會も分裂すると警戒した。而も社會生活はこの警戒を裏書きした。

この故に、今日マルクス主義、無産階級運動に關心を持つ人々の任務は、この夫々の間違へる傾向を批判し、無産階級運動を、資本との對立闘争の爲に、強力にする爲に、質的向上と同時に量的擴大に全力を傾注し、日本労働黨と労働黨、評議會と日本労働組合同盟、日本農民組合と全日本農民組合の無條件合同の實現に『誠心誠意』努力し、『懸引』を絶対に排撃すべきことにある。

此の任務の一端をと思つて、著者は一と先づ無産階級の左翼内に横行する『反動的神秘主義』たる『福本イズム』を解剖して、讀者に訴へるために此の一書を公刊する次第である。

一九二七年三月十九日

著 者

目 次

福本氏對山川氏論戰の批判 ..... 三  
 ——折衷主義の没落？ 唯心論の横行？ ——  
 アンチ福本イズム ..... 一一  
 ——『辯證法』の美衣を纏へる神秘主義の最後の避難所——  
 二つの理論闘争 ..... 五二  
 ——エンゲルスと福本氏——  
 地價政策の批判 ..... 六二  
 地價政策批判の辯護 ..... 七〇  
 地價政策批判問題再論 ..... 八五  
 神は微笑ませ給ふ ..... 一一五  
 ——マルクス主義のブルジョアの變革——

マルキシズムの變革

—アンチ・福本イズム—

目次

第一章 福本イズムの變革  
第二章 福本イズムの變革  
第三章 福本イズムの變革  
第四章 福本イズムの變革  
第五章 福本イズムの變革  
第六章 福本イズムの變革  
第七章 福本イズムの變革  
第八章 福本イズムの變革  
第九章 福本イズムの變革  
第十章 福本イズムの變革



## 福本對山川氏論戰の批判

折衷主義の没落？ 唯心論の横行？

### 世界第一のマルクス主義者

「こゝに擧げられたる諸々の意識形態は、單に例示的に示されたるものと解すべきであらう。従つて、  
經濟的意識形態を以て特に敢て例外せられてゐる物と解すべきではないと思ふ。精密にいふならば、  
經濟意識形態は必ずや茲に掲げらるべきものであつて、これを掲げてゐないのは、マルクスの不備（！）  
といはるべきだと考へる。云々」〔福本氏「唯物史觀と中間派史觀」〕



「しかるに、エンゲルスは、唯物史觀なるものは「そこに見出されたる思考材料即ち、唯物論及びヘ  
ーゲルの辯證法に「結びつく」ことによりて「發見」せらるゝものとし、經濟學の批判によつては、「餘剩  
價値の發見によつて資本家的生産の秘密が闡明せられた」のに過ぎざるものとみなしてゐるのである。  
……この點に關しては、エンゲルスは却つて自ら既に、後の俗學的マルキシストの陥るべき道を準備  
したる譏を免れないであらう」〔同上「一五頁」〕

「否ひとりジノヴィエフに止らない、さきに指摘したるブーリンしかり、タールハイマー亦しかりだ……彼等はいづれも……其の思考に於て充分に唯物辯證法的ではないから」(同上二四八—二四九頁)以上の引用によつて明かなるが如く、今や日本にマルクス以上のマルクス主義者が出現した。その名は福本和夫氏!

この歴史的偉人は我が國の無産階級に向つて

「諸主義(經濟主義、折衷主義——筆者)との鬭争は當分理論鬭争に局限する」と號令され、從來の折衷主義的運動から分離して「理論鬭争」に鬭争を局限する所の方向轉換を絶叫される。

而して氏の所謂理論鬭争は最近山川氏に挑まれつゝあつたが雑誌『マルクス主義』一月號に於て氏は別名北條一雄の匿名の下に「所謂折衷主義の没落」の一文を發表された。

同文は第一段と第二段から構成され、第一段は山川氏の「無産階級政治戦線の混亂」(改造一月號)を批評したものであり、氏はいはれる。

「今や愈々我々は、我々の新に學びとるべき何ものをも、もはや氏に於て見出しえざるにいたつたことを、遺憾ながらこゝに、見出さざるをえなくなつたがためである」

「すなはち、氏は、到る處に其の本質の分析追跡に失敗しつゝついに、我々と異なり、其の根柢に於てこゝに先づ「無産階級政黨運動の混亂」を見ることによつて、氏の頭腦を極度に混亂せしめ、そして、問題の解決をば結局ひとへにたゞ指導者の聰明と努力、並に大衆の階級意識の自然生長に求めらるゝ

に止まつてゐるからである」

「なんとすばらしい「事實論破」……「事實克服」の具體的なることよ!

だが此の點に立入つた論評は、この小論に於ては、暫く、之を其の範圍外におくを適當と考へる」

即ち以上に於て福本氏は山川氏に「無産階級陣營内に存在の價値なし」と判決を下しつゝ、だが其の『理由書』は被告山川に聞かせることを暫く見合せるを適當と考へると言ひ渡されてゐる。福本氏の言を藉りれば之れこそ「何んとすばらしい「判決文」であらう。」

「ついで第二に——福本氏は云ふ——我々はこゝに、氏が愈々我々に向つての意識的な挑戰の開始を宣言せらるゝにいつたのを見るがためである。」

「かくして、嘗て我々の鬭争に無關心に止まり、乃至は無理解に止まりし所謂折衷主義の理論家も、今や、其の無關心、無理解の一定階段への累積と共に、必然に、自らを意識し結成しはじめた。かくして今や、所謂左翼大衆の、折衷主義よりの、離脱前進と共に、折衷主義理論家の後退——没落——の決意と宣言とが始まる!」

「其の具體的な方向は何か?」

「かの新たに自らを意識し自らを展開し始めた所謂追隨主義的組合主義の運動——所謂「正義派」の運動——への屈服的合流の方向これである。我々は敢てさう理解する。そしてかゝる運命をもつて意識化せる折衷主義必然の道行と考へる」

即ち福本氏は山川氏に、すばらしい判決文を言ひ渡すと同時に、親切にも山川氏が麻生氏一派に屈服されんことを奨めらる。そして福本氏は「我々は敢へてさう理解する」と強調される。

ところで我々は、マルクスの用語の不備を叱り、エンゲルスを俗學的マルクス主義の開祖と譏り、ジノヴィエフ、ブハーリン、タールハイマーの徒を「唯物辯證法的」でないと罵つた歴史の偉人なる福本氏が、嘗ては河上博士、河野密氏を葬り、今また折衷主義者山川氏を葬り去つた世界的歴史の痛快事を見遁してはならない。

唯だ一人福本氏によつて批判されないのはレーニンだが、このレーニンは其の著「唯物主義と經驗批判論」に於て斯う述べてゐる。

「我々は、マルクスは一八四五年に、エンゲルスは一八八八年と一八九一年に唯物主義的認識論の根底に實踐の規準を置いてゐるのを見る。實踐を外にして「客觀的眞理に人間的思考が該當してゐるか」といふ問題を提出するのはスコラ哲學である——とフォイエルバッハに關するテーゼ第二に於てマルクスは云つてゐる。カント、ヒューマスの不可知論其他すべての哲學的虚妄の最善の駁撃者は實踐である——とエンゲルスは繰返してゐる」(レーニン全集第十卷一一〇頁)

即ち山川氏と福本氏の認識の何れが眞に辯證法的唯物主義であるかの裁判官は、福本氏ではなく、實踐であることを我々はレーニンから學ぶ。従つて兩氏の最近の認識を裁くには實踐を招待しなければ

ばならない。而して我々は福本氏の判決の忌避から始めて、最後に兩者最近の論文を比較検討し、改めて「判決文」を實踐に讀み上げさせることにしよう。

### 労働組合の分裂に對する見解

「革新同盟が分裂防止のために凡らゆる努力と犠牲を拂つたにもかゝらず、革新同盟所屬組合の除名により總同盟の分裂は最早や救ふべからざる事實となつた……」と日本労働組合評議會の創立大會はその宣言のうちに述べてゐる。即ち日本労働組合は分裂防止に凡らゆる努力と犠牲を拂つたのである。

然るに福本氏は斯う謂はれる。

「労働團體の分裂！ 理論闘争の開展！ しかも單一無産政黨への方向轉換の途上に於ける労働團體の分裂！ 理論的闘争の開展！」

(しかも、それは我國當時の客觀的諸條件の下に於ては、まことに必然的な開展であつた。だが)人は、この「矛盾」の現實の進行に當面して、其の頭腦を混亂し其無能を曝露してしまつた。こゝに一派の論者は「労働團體は大衆團體たるが故にその本質上絶対に分裂すべきものにあらず」といふ理論拘泥論に逃れようとした。(福本氏「理論闘争」一六四—一六五頁)

即ち福本氏に據れば總同盟の分裂は必然的な開展であつて「分裂防止」に凡らゆる努力と犠牲を拂つ

た後成立した評議會の創立大會は頭腦を混亂させ其の無能を曝露したものである。

だが日本労働組合評議會の創立大會を罵倒される福本氏は、少しく事實を拵げてゐられるようだ。氏に據れば當時の總同盟の分裂は單一政黨樹立への方向轉換の途上に於ける労働團體の分裂となつてゐるが、事實は、

「革新同盟の運動は、舊總同盟を彼等(墮落幹部)の官僚主義から救ひ出し、官僚幹部の總同盟を、再び組合員全體の總同盟、労働階級全體のための總同盟たらしめんとする運動であつた……。

當年の革新運動は、評議會創立大會の宣言が自ら説明してゐる如く、主として労働總同盟の内政上の問題から出發したものであつた。……内政上の問題は、密接に組合政策の問題と關聯し、従つて内政上の問題から出發したものであつた」(山川氏「労働總同盟の崩解作用と無産政黨の問題」その一)

即ち總同盟の前の分裂は、組合内政上の問題が原因であり、夫は「舊總同盟を救はんとする運動」の結果であり、決して「單一無産政黨樹立への方向轉換の途上に於ける労働團體の分裂」ではなかつた。事實單一無産政黨樹立運動は分裂後數ヶ月を経て「日本農民組合」の提唱の下に積極的になつたものである。之は「一八二一年五月五日にナポレオンは死んだ」(エンゲルス「アンチ、ヂューリング」)といふ絶對的眞理と同様な絶對的眞理である。

然るに何故か福本氏にはこの絶對的眞理が「單一無産政黨樹立への方向轉換の途上に於ける労働團

體の分裂」といふ現象に見えるらしい。「現象」と「本質」を媒介性に於て把握せらるゝ筈の福本氏が、「水中に入れた鉛筆が歪んで見える」ことを其儘認識されてゐることは何うしたことだらう。我々は茲に福本氏の所謂媒介性——即ち辯證法が唯心論的であることの一證左を見る。

だが、更に突つ込んで進まう。福本氏に據れば

「労働團體の分裂！ 理論的闘争の開展！ それは、我國當時の客觀的諸條件の下に於ては、まことに必然的な開展であつた」

即ち總同盟の分裂は理論闘争を開展したと氏は謂ふ。

だが、「我々は日本労働組合労働評議會の創立を機として、舊總同盟の内部に於ける官僚主義に對する闘争を終結し、資本の攻勢に對抗する積極的の闘争に推移したことを宣言する」と評議會の創立大會は宣言する。

故に福本氏の認識は、相對的眞理ともかけ離れてゐる。評議會の創立大會宣言が單に「資本の攻勢に對抗する積極的闘争に推移した」と宣言して、外部からも墮落幹部と積極的に闘争することを言ひ落したとしても、夫は認識の不完全に歸すべきで、辯證法的唯物主義的な相對的眞理の把握はしてゐる。即ちレーニンの三つの重要な認識論的結論たる

「一、物體は我々の認識から獨立して、我々の感覺から獨立して、我々の外に實在する。何となれば昨日コールドールにアリザリン(染料のこと——筆者)が實在してゐたことは疑ひのないことであり、

昨日我々がその實在に就て何にも知らず、このアリザリンから何等の感覺を受けなかつたことも矢張疑ひのないことである。

二、現象と物體との間には絶対に何等の原則的相異もなく、またあり得ない。相異は單に認識されたものと未だ認識されないものとの間の相異である。之とあれとの間の特別の境界に就ての哲學的思索は、物體それ自身は現象の「向ふ側」にあると考へるのが(カント)で、未だ一部或は他の部分が認識されないが、我々の外に實在する世界に就ての問題から或種の哲學的垣根でカキを廻らさねばならずまた廻らし得ると考へるのが(ヒューム)である。——之等は全て空虚な微塵であり、Schdulle. 作り事であり、虚構である。

三、他の全ての分野に於ける科學の如く、認識論に於ても辯證法的に論究しなければならぬ。即ち我々の認識を出來上つた不變のものと豫想せず、如何なる形で無知識から知識が出現し、如何なる形で不完全な、不的確な知識が一層完全となり、一層的確となるかを研究しなければならぬ』(ニン全集第十卷七九頁)

「斯くして、自然に就ての人間思考は自己の能力を以て我々に、相對的眞理の集積から成る所の絶対的眞理を與へるし、與へるであらう』(同上10八頁)

『……辯證法的唯物主義にとつては相對的と絶対的眞理の間に越え得ざる溝は存在しない』(同上10九頁)

等によつても、評議會の創立大會の宣言が、相對的眞理を把握したものであることは明かで「外部からも積極的に墮落幹部と闘争する」といふことを否定してゐない以上、そして労働組合の根本的任務は資本との闘争である以上、評議會の創立宣言は相對的眞理であることには間違ひない。

然るに福本氏は評議會の「資本との闘争」の宣言を認識し得ずして、労働組合の分裂は理論闘争を開展したと宣言される。色盲患者の眼に映する現象は「白」が「灰色」の現象として見える。福本氏の認識は色盲患者の夫の如く、評議會が、資本の攻勢と墮落幹部の右傾化とに猛烈に闘争し出したことが、『理論闘争』の開展であつたのである。然し之は福本氏の認識から獨立して、氏の感覺から獨立して、氏の外に實在した無産階級とは、別個に、福本氏の頭の中に描き出された幻影であつた。

### 科學的豫言

「しかしながら官僚幹部の手に残つた舊總同盟の殘骸のうちにも、なほ多くの健全分子の存することを忘れてはならぬ。……彼等(ダラ幹)は最早や何者にも累らはせられないで、思ふがまゝに資本家官憲と取引し、思ふがまゝに妥協と協調とに進み得ると考へてゐる。彼等は近き將來に、必ずやその脚下から第二第三の革新同盟の生れることを悟らない。彼等の政策が労働大衆の利害を裏切つてゐる限りは、労働大衆は彼等の指導を裏切るに相違ない」

「今その時が來た」(山川氏上掲論文のその一)

即ち「分裂防止」に大なる努力と犠牲を拂ひ「資本の攻勢に對抗する積極的の闘争に推移した」評議會は十九ヶ月前に「第二第三の革新同盟の生れることを」豫言したのである。そして此の豫言は「彼等（墮落幹部）の政策が労働大衆の利害を裏切つてゐる限りは、労働大衆は彼等の指導を裏切るに相違ない」といふ原因的現象の説明に因る科學的の豫言であつた。

然るに「單一政黨樹立の途」に於ける労働組合の分裂」と見「労働組合の分裂は理論闘争を開展した」と認識せられた福本氏には十九ヶ月前のことを科學的に豫言する能力がなかつた。また「氏の認識と感覺から獨立して氏の外に實在する」無産階級運動を色盲的に認識せられる氏にありては、夫はまことに當然のことでもあつた。

### 無産政黨問題

「我々は、我が無産階級の方向轉換を以て、組合主義的闘争より社會主義的闘争への轉換でなければならず、また、であらうと解する」（福本氏「理論闘争」四〇頁）

然らばその交錯點は何か？ 氏は「當分闘争を理論闘争に局限することだといふ。山川氏は、『……組合運動と經濟運動とに閉ぢこめられてゐた意識と運動とは、今や全階級に向つて開け放たれブルジョアジーの全勢力との闘争を意味する政治運動に發展したのである。今日は即ちこの開展ないしは轉換の時機であつて、従つて無産階級の一切の問題は、政治闘争の問題——なにかんづく無産階級が獨立した一政治勢力に結成しようとする政黨問題——を廻つて廻轉してゐるのである』（山川氏上掲論文その二）と述べられる。

即ち福本氏にありては、日本の無産階級は宛かも社會主義的闘争に轉換したとある。だが氏は何れの『プラクチス』『エクスベリメント』を以て社會主義的闘争を實證されるのだらうか。

現在我が國の無産階級が遂行してゐる主なる政治運動は「議會解散請願運動」「耕作權確立」「團結權罷業權の確立」「言論結社の自由」といふ「議會」との妥協を抜きにして考へられない政治運動を遂行してゐる。勿論この妥協は發意的のものではなく、現在の如き「平穩」な「灰色」な時期に於ける強制的な妥協で、必要な運動であることは事實である。そして「議會」との妥協を發意的にするか、餘儀なくされ勇敢に積極的にやるかによつて、前者は改良主義であり、後者は左翼的であることも事實である。だが、之は政治的ではあるが、例へば昨年の英國總罷業の場合のやうに「全權を總評議會へ」といふ程、社會主義的闘争ではない。勿論我々はこの闘争を組合主義的政治闘争即ちブルの與黨と野黨の間を泳いで、僅かな餌を與へられることを目的とする發意的な「議會」への妥協的な政治運動とは曲解しない。だが、夫だからとて社會主義的政治闘争とは受取れない。それは實に、

「組合運動と經濟闘争に閉込められてゐた意識と運動とが、今や全階級に向つて開け放たれ、ブルジョアジーの全勢力と無産階級の全勢力との闘争を意味する政治運動に發展した」のである。

この政治運動に發展した無産階級を右翼に導くか、左翼に導くか、問題であり、そして夫は左右兩

翼の戦術によつて決定せらるゝ問題である。然して「戦術は諸階級間の勢力の嚴格に、客観的な評價の上に樹てられるべきである」

然るに我が無産階級が一足飛びに「組合主義的闘争から社會主義的闘争」に轉換したと認識される福本氏にありては、戦術は唯心論的な形を採る。

### 中間派に對する態度

福本氏に據れば「中間派左翼の結成……の提唱は粉碎されなければならぬ」(同氏「理論闘争」二二三頁)

故に「當年の革新運動、純然たる内政上の闘争から組合政策と指導精神の闘争に推移しつゝあつた當時、總同盟の内部には、いはゆる「墮落幹部」の官僚主義をあきたらずとする點に於ては革新運動とある程度の共鳴をもつにもかゝはらず、嚴密に内政問題の範圍内に踏み止まり、従つて革新同盟と行動を共にするに至らなかつた分子があつた。これが大體において、當年のいはゆる「正義派」の立場であつた。今日の革新運動——總同盟に關する限りにおいての日本勞農黨組織の運動——の中堅となつてゐるのは、當年の正義派であることを考へたなら云々」(山川氏前掲論文その三)

は、「かの新たに自らを意識し自らを展開し始めた所謂追隨的組合主義の運動——麻生氏一派——への屈服的合流の方向これである」。(福本氏「マルクス主義」二月號)

即ち福本氏は社會民衆黨の組織に勇敢に叛逆したが、「日本勞農黨」を支持する所謂正義派と、農民組合を分裂せしめんとした三宅氏一派——而も現在では、一方に於て勞農黨を切崩しつゝ、他方に於て「分裂反對」を唱へてゐる三宅氏一派——とを同一視してゐる。

故に福本氏にありては其の傾向など問題ではなく中間派團體は總て「粉碎しなければならぬ」のである。

この點は、福本氏は赤松氏と完全に一致する。

だが福本氏の勇敢なる中間派粉碎にも拘はらず「中間派左翼」として日本勞農黨は形成せられた。

即ち福本氏にありては「日本勞農黨」の客観的實在は、氏の唯心的な「辯證法的」認識論の爲に「水中の鉛筆」の如く認識されてゐる。換言すれば「日本勞農黨」は氏にありてはブルジョア政黨の手先黨である。蓋し追隨的組合主義はブルジョア思想であるから。

だが「日本勞農黨は「無産階級的立場を嚴守する」ことを大衆の前に宣言した」(山川氏前掲論文その四)「哲學的虛妄の最善の排撃者は實踐である」

この宣言が虚妄であるか否かは實踐が證明する。而して「總ての實在を觀察する辯證法的方法、辯證法的手段は總ての現象を第一にその切離せない連絡に於て、第二にその運動に於て見ることを要求する」(ブハーリン「史的唯物主義の理論」六七頁)から、日本勞農黨(現象)の結成から日本勞農黨の好かれ悪かれ、實踐は始まつたものと見るべきである。斯かる時期に於て「無産階級的立場を嚴守する」と大

衆の前に宣言した日本勞農黨を、ブルジョアの手先黨の如く攻撃して、勞農黨自ら越ゆるべからざる溝を作ることには愚であり、中間派團體は粉碎されねばならぬと主張するが如きは、明かに斯かる溝を作るのである。

故に山川氏は斯う述べられる。

『日本勞農黨は「無産階級的立場を嚴守す」ることを大勢の前に宣言した。無産階級的立場を嚴守する爲には、日本勞農黨はブルジョア政治勢力と徹底的に闘ふと同時に、無産階級運動の内部に結成しつゝある、ブルジョアジの協力者たる意識的右翼と——従つてまたその政黨と——徹底的に闘はねばならぬ。

無産階級的立場を嚴守する日本勞農黨は、必然にまた、階級的單一政黨主義の支持者でなければならぬ。何故ならば之が唯一の無産階級的立場だからである』(山川氏前掲論文その四)

即ち日本勞農黨に對して、山川氏は其の宣言の實踐を督促されたのである。而して若しこの宣言を日本勞農黨の指導者が實踐に於て裏切るならば『彼等の政策が勞働大衆の利害を裏切つてゐる限りは、勞働大衆は彼等の指導を裏切るに相違ない』と評議會創立大會が總同盟に與へた科學的豫言が彼等にも亦與へられるであらう。

之に反し、斯かる重大なる無産階級内の勢力再編成の轉換期(昨年十二月)に際して福本氏は一つの論文をも發表してゐない。『理論闘争』の編輯、マルクス以上の世界的唯物辯證法論者たる福本氏は、沈黙してゐたのである。

### 左翼の目的意識性

大きな運動の轉換に際して、理論家が沈黙をすることは、決して左翼の目的意識を辯證法的唯物主義的に把握したとは云へない。蓋し目的意識とは一定の目標を定めて、一定の轉換期に於ける運動を自覺的に、その目標に向つて進めることである。然るに總同盟の分裂——日本勞農黨の出現によつて無産階級の政治的勢力の結成體が如何なる途に進まんと動搖してゐる時、理論家が沈黙をすることは、殊に世界的に最高のマルクス主義者福本氏が沈黙をすることは、明かに運動に追隨した行爲であり、日和見主義的である。

之に反し山川氏は

『一、ブルジョアジの協力者たる意識的右翼と徹底的に闘ふ唯一の方法は、無産階級運動を「左翼」と「中間」との二つの戦線に分割することであらうか？ それは斷じて、意識的右翼に對する一切の反對勢力によつて、單一な大左翼を形勢することではなければならぬ。

二、ブルジョア政黨とその左翼たる日本農民黨(社會民衆黨)と徹底的に闘ふ唯一の方法は、左翼黨と中間左翼黨との對立ではなくしてたゞ一つの強大な階級黨の結成でなければならぬ。

三、無産階級の政治運動は、ブルジョアの全政治勢力に對抗して、無産階級の一切の要素を、たゞ



一つの階級的的政治勢力に結成することを意味してゐる。階級的單一政黨の標語のみが、無産階級の現實の必要に答へてゐる標語であり、また唯一の無産階級的の標語である。〔前掲同氏の論文その五〕

更に、労働農民黨を左翼小兒病と攻撃し、夫を口實に「中間派左翼」が、狭い垣根を廻らすことを山川氏は批難され、日本労働農民黨の組織運動が「階級的立場の嚴守」と意識的右翼に對する徹底的な闘争を目標として發展するとしたならば、労働農民黨と日本労働農民黨との關係が如何なる形において發展しなければならぬかといふことも、自づから明かである。何故ならばそこにはたゞ一つの道しかないからであると述べられ、労働總同盟の自己の崩解を招致した意識的右翼と日本農民組合の意識的右翼（三宅氏等のことではない）との相違を論じられ「日本の無産階級運動はブルジョアとその協力者たる意識的右翼に對抗するたゞ一つの階級的政黨以外に、さらに右翼と同時に左翼と戦ふための、いはゆる『中間派』を結成する代價として、日本農民組合の分裂といふ高い代金を支拂はねばならぬであらうか？（その結果は、資本家と地主を喜ばせ、全日本農民組合同盟と日本労働農民黨との反動主義の運動を助けるに過ぎぬ）労働農民黨と日本労働農民黨とが一つになるか、日本農民組合が二つになるか、これが恐らく現在の瞬間に於て日本の無産階級がその一つを選ぶことを迫られてゐる事柄なのである。

日本農民組合の分裂を防止せよ！ 階級的單一政黨へ！

——十二月五日——

と明確に方向を指示された。然るに福本氏は斯かる重大なる時期に沈黙してゐながら、何等の意見も吐かれず、運動が一定の方向を辿つた今日——好かれ悪かれ運動が一定の方向に進んだ今日、突然

狂者染みた調子で山川氏に喰つて懸り、

『今や愈々我々は、我々の新たに學びとるべき何ものをも、もはや氏に於て見出しえざるにいたつたことを、遺憾ながらこゝに見出さざるをえなくなつた』

『我々はこゝに、氏が愈々我々に向つて意識的な挑戦の開始を宣言せらるゝにいたつたのを見る』

『かの新たに自らを意識し自らを展開し始めた所謂追隨的組合主義の運動——所謂「正義派」の運動——への屈服的合流の方向これである。そしてかゝる運命をもつて意識化せる折衷主義必然の道行と考へる』

とすばらしい朗讀を始められた。だが氣の毒なことには、日本の無産階級運動が重大な轉換期に立つてから三ヶ月を経過した今日尙ほ、世界一のマルクス主義者福本氏には、一つの具體的な目的意識的な政策をも示し得ない。そしてたゞその事の代りに、すばらしい朗讀である。

『折衷主義の没落！』といふ詩の。

斯かる氏の空虚なる詩の朗讀は、全て氏の唯心論的認識の然らしめる所であることを我々は、僅かではあつたが、だが根本的な點に於て解剖した。だから、

『氏のこゝに我々に向けられたる非難そのものが、いかに我々に對するたわいない誤解に立脚するものであり、結局、虚構と漫罵に過ぎざるものである』

との言葉は山川氏から福本氏にノシを付けて返上しても好ささうだ。そして我々は學生層と一部の

無産階級陣營内に密輸入された唯心論を徹底的に夕、き出さねばならない。山川氏の示された方向の實現は、斯かる唯心論の絶滅によつて容易となる。——一九二七年一月三十一日——

## アンチ福本イズム

### 「辯證法」の美衣を纏へる 神祕主義の最後の避難所

#### 史的唯物主義の建設者

「……唯物史觀は其の創設者により、完成さるべくして、しかも完成されずに終つたのである」と福本氏は其の著『唯物史觀と中間派史觀』の一九頁で述べ、更に其の二一頁で

「私は以上で、唯物史觀を眞實に理解することは、同時に唯物史觀を建設（！）展開（！）すること——マルクスによつて基礎づけられたる方法に従ひて——でなければならぬ……」と力説してをられる。そして氏獨特の交互作用と下向上向と四つの唯物辯證法的方法が建設展開され、マルクスによつて完成さるべくして、完成されなかつた唯物史觀が、日本に於て福本氏によりて完成されたのである。だが斯かる偉大なる人物は日本だけではなかつた。

『バクダノフはその論文「社會及び自然に於ける生命の發達」に於て「偉大なる社會學者」即ちマルク

スの「Zur Kritik」の序文の史的唯物主義の根據を分析した有名な個所を引用してゐる。マルクスの言葉を拉致し來つてバクダノフは「史的モニズムの古い公式は、未だに其の根柢に於て正しいには違ひないが、既に我々を十分に満足させはしない」故に著者（バクダノフ）は、其の理論の根據から出發して、理論を訂正し或ひは展開させやうと欲してゐる（『レーニン全集第十卷二七二頁』）

即ちバクダノフも福本氏と同じくマルクス主義を建設、展開させやうとしたのである。そしてエンゲルスを攻撃してゐることも亦東西其驥を一にしてゐる。即ちバクダノフはエンゲルスの著「アンチ・ヂューリング」の中に絶對的眞理と相對的眞理を二つとも認めてゐることを指して彼を折衷主義者と罵り、福本氏はエンゲルスが「これら双方の偉大な發見——唯物史觀並に、餘剩價値の發見によつての資本家的生産の秘密の闡明——それらを我々はマルクスに負ふ。この双方の發見と共に社會主義は一の科學となつた」と同じ著書で結んでゐることを指して「この點に關しては、エンゲルスは却つて自ら既に、後の俗學的マルキシストの陥るべき道を準備したと譏つてゐる。

## 福本氏の認識論

だがバクダノフ、福本氏によりて建設展開されたる「史的唯物主義」の根柢をなす認識論は、一體唯物主義であらうか、將亦唯心論であらうか。

バクダノフは曰ふ。

「……人間は自己の生存鬭争のために、自覺の助けを藉りることが出来ない。自覺なしには交際はない。だから社會生活はその全ての表示に於て自覺的心理的である。……社會性は自覺性と不可分割である。社會的生存と社會的自覺は、確な意味に於いて同一である（『レーニン全集第十卷二七二頁』）

福本氏は曰ふ。

『第一、事物を媒介性に於て觀察し得べく、またしないではゐられない。第二、事物を生成に於て第三、全體性に於て觀察し得べく、またしないではゐられない。故にこの階級にとつては、其の自己認識は、同時に全社會の客觀的認識たりうるし、またたねばならない。第四に、かゝる認識に對して、この階級は、認識の主體たると同時に客體たるべく、またたらずにはゐられない』即ち福本氏にありては、認識の主體は同時に客體であるとなつてゐる。換言すれば「我」は同時に「非我」となつてゐる。更に進んで氏は曰ふ。

『かくして「社會の構成」並に變革の過程』の全體的考察——かくして私達のもちうる「一つの單純化した見とほしのつく」社會形象——「一定に限られた」社會形象——私は之を自然科學に於ける所謂「世界形象の統一」に對して「社會形象の統一」と呼びたいと思ひます』

即ち「我」と「非我」は「一つの單純化した見通しのつく」社會形象となつてゐる。

「我」でもなく「非我」でもなく、一つの單純化した見通しのつく社會形象とは、事物と自覺が不可分離

に結びついてゐることであり、「我」と物體との不分離の統一である。

『世界は自分の感覺である。「非我」は「我」によつて作られるのではない。事物と自覺とは不分離に結合してゐる。「我」と物體の不分離な統一は經驗批判主義の原則的統一である。——之等全ては廢物に少し化粧し又は化粧レツテルを貼つた同じ定義である』(レーニン全集第十卷五一頁)

即ち福本氏の認識はバクダノフと同じ經驗批判主義である。だからバクダノフの

『社會的生存と社會的自覺は的確な意味に於て同一である』といふ定義と

『認識の主體たると同時に客體たり得る』との福本氏の定義とは同一のものとなる。

そして之等に對する答へは

『社會的生存と社會的自覺は同一でない——全ての生存が全ての自覺と同一でないやうに。人間が實際するに、自覺物としてそれをなすことは、些かも社會的自覺は社會的生存と同一であつたといふことにはならない。少しでも複雑な全ての社會形態——殊に資本主義的社會形態——に於ては人々は實際を開始するや、この點に如何なる社會的關係が置かれてあるか、それは如何なる法則で發達するか等々を自覺しない。……例へば農民が麥を賣ることによつて、世界的市場に於て世界中の麥生産者と「交際」してゐるのであるが、彼はそれを知らないし、交換は如何なる社會的關係に置かれてあるかを知らない。社會的自覺は社會的生存を反映する——マルクスの學問はこれから成つてゐる。反映は正しく接近してをり、反映されるものゝ寫本ではあり得る。だが之を同一と言ふことは愚である。自

覺は全て生存を反映する——之が全ての唯物主義の一般的定義である。之を史的唯物主義の定義「社會的自覺は社會的生存を反映する」と直接に不分離に結び付けて見ないことは不可能である』(レーニン全集第十卷二七三頁)

若し社會的自覺は社會的生存を反映するものとしたならば、福本氏の如く「無産者階級の認識は、主體たると同時に客體たり得る」といふ定義は、明かに史的唯物主義を改變したものである。

『些細な形で「マルクスの根本精神に於て」マルクスを訂正し、展開させやうとしたバクダノフの試みは——この唯物主義的根柢を明白に唯心論的精神で改變したものである』(同上)

即ちバクダノフと同じく、マルクスを建設展開せんとした福本氏の試みは、明白に唯心論的精神で唯物主義の根柢を改變してゐるのである。

『蓋し社會的生存と社會的自覺は同一であるといふ此の理論は徹頭徹尾馬鹿げたものであり、無條件に反動的理論である。』(同上二七四頁)

斯くして我々は福本氏の認識論が全然反動的な唯心論であることを見極めたから、氏の唯物辯證法的方法の検討に移らう。

### 辯證法的方法

福本氏の唯物辯證法的方法は

アンチ福本イズム

- 第一——事物を媒介性に於て視察する
- 第二——事物を生成に於て
- 第三——全體性に於て

の三つである。そして常に氏によりて用ひらるゝ方法は第一と第三である。

ブハーリンは其の著「史的唯物主義の理論」に於て

「全ての實在を観察する辯證的方法、辯證法的手段は、全ての現象を、第一にその不分離の連絡に於て、第二にその運動に於て見ることを要求する」と述べてゐる。

此の點に於てマルクスは斯う書いてゐる。

「自分の辯證法的方法はその根本に於てヘーゲルのそれと相違してゐる許りでなく、更にそれは全然兩極端である。ヘーゲルによつてアイデアの名稱の下に夫は獨立の主體とさへ變化された思考過程は、ヘーゲルにとつては單に其の外面的表示である所の具體性の創造者である。夫と反對に自分にとつては、觀念は物質を人間の頭腦で翻譯し、再勞作したものに外ならない。『ヘーゲルでは辯證法は頭で突立つてゐる。神秘的おほひの下にある合理的種子を見出す爲に、辯證法を地に足づけさせることが必要である』(マルクス「資本」第一巻序文) マルクスにとつて辯證法は、鬭争に於ての發達は、最つ先に「生存」の法則であり、物質活動の法則であり、自然及び社會に於ける運動の法則であつた。思考過程はその表現である。故に思考の辯證法的方法、辯證法的手段は、それが自然の辯證法を把握し得ることによつて是非必要なのである」(ブハーリン「史的唯物主義の理論」七六頁)

即ち此の定義がマルクス主義である。然るに福本氏の「唯物辯證法的方法」はその認識論に於て反動的唯心論であるが爲に、ヘーゲルの辯證法が地に足を付け得ないである。換言すれば思考の辯證法的方法は、自然の辯證法の反映であることを福本氏は、全然自覺することが出来ない。故に氏にありては、

「その自己認識は同時に全社會の客覺的認識たり得」(即ち我々の例に採られた農民が麥を賣るや、之によつて世界市場に於て世界中の麥生産者と「交際」してゐることを世界中の麥生産者と共に認識してをり)「かゝる認識に對して、この階級は、認識の主體、たると同時に客體たり得」(即ち社會的自覺は社會的生存と同一である)

といふ風に辯證法は、氏の經驗批判主義の爲に依然として唯心論の域を脱してゐない。故に氏の無産者運動の批判に於て、往々夫が唯心論的であり、「水中に入れた鉛筆」を實在として認識されるのは、全て此の唯心論的辯證法から來るのである。

之と如何に鬭争すべきかに就て我々はブハーリンの「史的唯物主義の理論」から學ぶことが出来る。「今日まで——そして發展しつゝある段階に於て——意識過程を物質過程から分離する試みがなされつゝある——具體的に何等該當しない所の二三の方法によつて、辯證法を特に思考構成にのみ變化させやうとする試みがなされつゝある。此の點に於て表象的なのはマックス・アドラアを首領とする

「オースタリー、マルクス主義」である。此のマルクス主義の曲解——明白に反唯物主義的曲解に對して如何に戦ふことが必要であるか？ それは餘りにも明白で、辯證法の物質的根據を解剖することが必要である。即ち活動する物質の形態の中に、ヘーゲルの辯證法的公式に該當するものを把握することである。（同著附録）

## 認識論は辯證法的でなければならぬ

更に進んで我々は福本氏の科學的説明に就て論じよう。

「もはや我が無産階級の「方向轉換」——「戦線の擴大」は單に機械的な「轉換」「擴大」ではあり得ない」  
阿氏「社會の構成」並に變革の過程（二頁）

「かくして——斯かる手續をへまして——私達は、そこに所謂媒介性における有産者社會の生活過程——其の全内的連絡、全内的發展を嚴密に跡づけたる一の統一的な社會形像——「單純化された見とほしのつく」一つの社會成構」並に變革の過程の形像——を獲得し得る」（同上三四頁）

即ち福本氏の科學的説明は常に「有機的」「内的」といふ言葉によつて表現されてゐるが、之が如何に非科學的説明であるが、解剖して見やう。

レーニンはその著「唯物主義と經驗批判主義」の八〇頁で、三つの重要な認識論的結論を擧げてゐるが、その第三は

「他の全ての分野に於ける科學の如く、認識論に於ても辯證法的に論究しなければならない。即ち我々の認識を出來上つた不變のものと豫想せずに、如何なる形で無知識から知識が出現し、如何なる形で不完全な不確な知識が一層完全となり、一層的確となるかを研究しなければならない」と述べてゐるが、此の「有機的」と「機械的」の對立「内的」と「外的」の對立はそれ自身辯證法的に變化したのである。即ち現在の原子に對する認識は古い見解を放棄し、絶對に分離しそして無質の原子は存在しなくなり、エレメントの連絡、相互繋依、新生質の發生等々は全ての法則に確立されたので、「機械的」と「有機的」の對立は全然無意義になつて仕舞つた。

他方ブルジョア科學及び哲學における唯心論の發達は「有機的」「神秘主義」となり、「生命」（即ち有機）の理解はベルグソン、ドルシ一派によつて神秘主義にされた。

此の二つの重要な因子——マルクスの、死後勃發した物質に就ての認識の革命は、辯證法的に認識することを要求する。故に福本氏の如く全然物質に就ての認識の革命に無智であることは、氏をして未だに、其内容に於て既にブルジョア的になつた「有機的」「内的」を使用せしめるのである。此の氏の未だに把持される反動的認識は、明白にベルグソン、ドルシ一派への降服である。此の點に於ても福本氏の科學的説明は、反動的非科學的説明と言はれる。

然らば現在に於ける唯一の科學的説明は何か？ ブハーリンはいふ。

「我々が何等かの現象または社會生活の現象を説明せんとするならば、我々は是非とも原因に就ての

問題にブツ附かるのである。凡ゆる宿命的解説の試みは事實上宗教的信仰の反映であり、また何もをも解説しないのである。斯くて社會及び自然の現象の法則は如何に、我々が前者と後者を視察して何れが正しいとするかの根本問題に對して答辯は斯う叫ぶ『自然及び社會には現象の原因的法則が客觀的に存在する』と。

原因法則とは何か？ 夫は必然的な、絶えずそして何處でも見られる現象の聯絡である。例へば寒暖計が上騰すると、その容積が膨脹し、液體を充分に熱すると、蒸汽に變化し、紙幣は其の需要を超過して大量に發行すると紙幣が無價値となり、資本主義が存在すると常に戦争が発生し、小企業が大企業と並立して國內に存在すると結局大企業が勝利を得、プロレタリアートが資本に攻撃を開始すると資本は凡ゆる手段で防禦し……人間が一定量の毒藥を服すると毒殺される等々といふのを指して原因的法則といふのである。約言すれば凡ゆる原因的聯絡は状態(形態)に於て表現し得ると云ひ得る。即ち若し何等かの現象が現在あるとすると、夫に該當した他の現象が必ず起るといふことである。その原因を把握して何等かの現象を説明することは、そこから因つてもつて來た所の他の現象を掴むことである。即ち現象の原因的聯絡を明白にすることである。此の聯絡が見極められない間は現象は説明されないのである。この聯絡を把握し、發見し、實證され、此の聯絡が事實永續のものであつた時、我々は科學的説明をなし得たのである。この説明が自然及社會の現象に對する唯一の科學的説明である『ブハーリン』史的唯物主義の理論「社會科學の原因と目的」

### 全てを解説する終局的原因としての生産力の問題

意識過程と經濟過程とを交互作用で結び、下向上で前段的批判過程と基本的批判過程とを回轉させ、その方法は「唯物辯證法的方法」で行はれた福本氏が、いみじくも、マルクスにより、完成さるべく、完成されなかつた史的唯物主義を建設展開された我が福本氏は、然らば

「史的唯物主義の理論にとつて根本的問題たる、何故生産力が全てを解説する終局的原因となるかといふ問題」

を如何に解決されたか？ 此の點に關し福本氏は

「唯物辯證法論者は、この作用——關係(諸要素間の作用——筆者註)をば「生産を終局的決定要素過程とする所の、諸要素間の交互作用」を認むるのであります」(同氏「社會の構成」並に變革の過程」一七四頁)と述べられてゐるが、何故生産力が全てを解説する終局的原因であるかといふことに就ては少しも理解してゐない。我々は此の無理解が如何なる意義を持つてゐるかを再びブハーリンによつて知らう。『史的唯物主義の理論にとつて根本的問題となるのは、何故生産力が全てを解説する終局的原因となるかといふ問題である。之に就てマルクス主義者の陣営内にも可成り根強い混亂が支配してゐる。……屢々役に立たない「要素の理論」が行はれをり、之に據ると生産力は生産的關係(經濟的要素)に置き換へられてゐる。……」

之は社會學の中心問題である。之に若し唯物主義的方法論の見解から回答を與へ得ないならば、獨逸のブルジョア學者エ・ブランデンベルガが正しく公平に指摘してゐるやうに、それは「單に經濟的と精神的の作用評價に際して量的相違に就て」論じてゐることになるのである。そして夫れは第一に何物をも説明し得ない所の理論となり第二に夫れは何んとでもなり得る所の（但しマルクス主義ではない所の）ものである。

ブランデンベルガは斯かるマルクス主義に滿腔の敬意を表してゐるが、歴史の眞のマルクス主義的理解に就て同じ學者は「夫は人々の共同生活の全運動を生産力の分野に置き換へるべく導かうとするものである。だが夫は何故後者が夫自身常に變化し、何故社會主義の方向に向かねばならない必要にあるかを少しも説明してゐない」

この學者の斯かる公式によつて、社會學の中心問題の解決に際し我々個有の方法論を最も鋭く尖鋭化して呉れてゐる。

この問題の答へ——僕が唯一の正しい答へと考へるのは「生産力は一定の具體的な複雑な容積としての社會と、その物體との相對性を表現してゐるからである。……そして物體と體系との相對性は結局何れの體系の運動をも決定する容積であるからである。之は活動しつゝある形態の辯證法の一般的法則の一つである。之はその内部に於て力の分子的轉換が發生し、協同と衝突の無數の連絡點が結ばれたり解けたりしてゐる限界である。生産力を「上層建築」と「下層建築」の作用で變化するものだと試

みるものには試みさせて置くが好い。之等の作用の定義は微塵も根本的事實（社會と自然の相對性、それによつて社會は生存し、また、夫は社會生活過稚を如何やうにでも化成する所の物質的エネルギーの量は、凡ゆる場合決定的容積である）を變化させはしない。

斯くの如く、また斯くしてこそ、史的唯物主義の理論の根本問題は解決し得るのである（「ブハーリン「史的唯物主義の理論」附録）

即ちこの根本問題の福本氏による無理解はブルジョア學者の賞讃を博する價值のあることが之によつて明かである。

### 生産關係とは空間と時間の中における人間の勞働的編成である

社會學の中心問題を解決し得なかつた福本氏は、更に生産關係をも正當に理解することが出来ない。生産關係はマルクスに據れば社會の物質的基礎である。然るに此の物質的基礎は河上博士によつて「生、き、ん、と、す、る、衝、動、又、は、ヨ、リ、よ、く、生、き、ん、と、す、る、衝、動」なる精神的基礎によつて置き換へられ、高田博士によつて「人と人の關係」「社會そのもの」なる精神的作用に置き換へられてゐる。

だが福本氏は之に對して

『河上博士によれば、所謂終局的決定因はかの生産力を更に決定する所の、人間の意志欲望であるとす。』



唯物史觀は、固より、生産力がこれらの要因によつて決定されることを否定するものではない。だが、進んで、これらの要因が終局的にはまた生産力によつて決定せられてゐるものであることを認めるのだ(同氏「唯物史觀と中間派史觀」一〇六頁)

即ち生産力を生産關係(經濟的要素)に置き換へてゐる福本氏は、鶏は卵を生み、卵は鶏となるといふこと以外に、此のマルクス主義の唯心論的曲解者に對して、何等戦ふ武器を持たれない。斯かる堂々廻りは、敵を打ち倒すには全然無力である。

だが夫は福本氏の「生産力」と「生産關係」の混同、誤解が斯かるお伽噺を作り上げたのである。如何に氏が之を混同、誤解してゐるか、例へば「生産(下層建築)(見よ! 福本氏は生産を下層建築と呼ぶ)を終局的決定要素とし、歴史に於ける終局的な決定要素は生産……である」(同氏「社會の構成」並に變革の過程「一七四頁」といひ他の著書では「だがこれらの要因が終局的にはまた生産力によつて決定せられる」といふ風に生産と生産力とが何等の斷りなしに氣儘に使用されてゐる。そして生産は氏によりて下層建築とされてゐるから、生産力と生産關係が混同されてゐることも明かである。エンゲルスをこき下した福本氏が斯かる醜態を演じられるのは、眞に同情に堪へない。だが見過せないのは氏が「生産(下層建築)は終局的な決定要素である。」と定義してそれ以上はマルクスも亦私(福本氏)も嘗て主張したことはないと言ふことである。マルクスは「マルクスに従へば生産關係は社會の物質的基礎である」(ブハーリン)と言つてゐるから、福本氏はマルクス主義を歪めたのである。

斯かる曲解、混同は當然に「物質的基礎」を「精神的基礎」にすり換へた河上博士を克服し得ないのは、充分に理解し得る。そして我々が上に知つたやうに、福本氏はその哲學的黨派に於て唯心論者であるから、それは眞に必然のことである。生産關係の物質性を如何に説くべきか?

「僕の知る所では此の問題の明確な答へはマルクス主義文献中に與へられてはゐない。

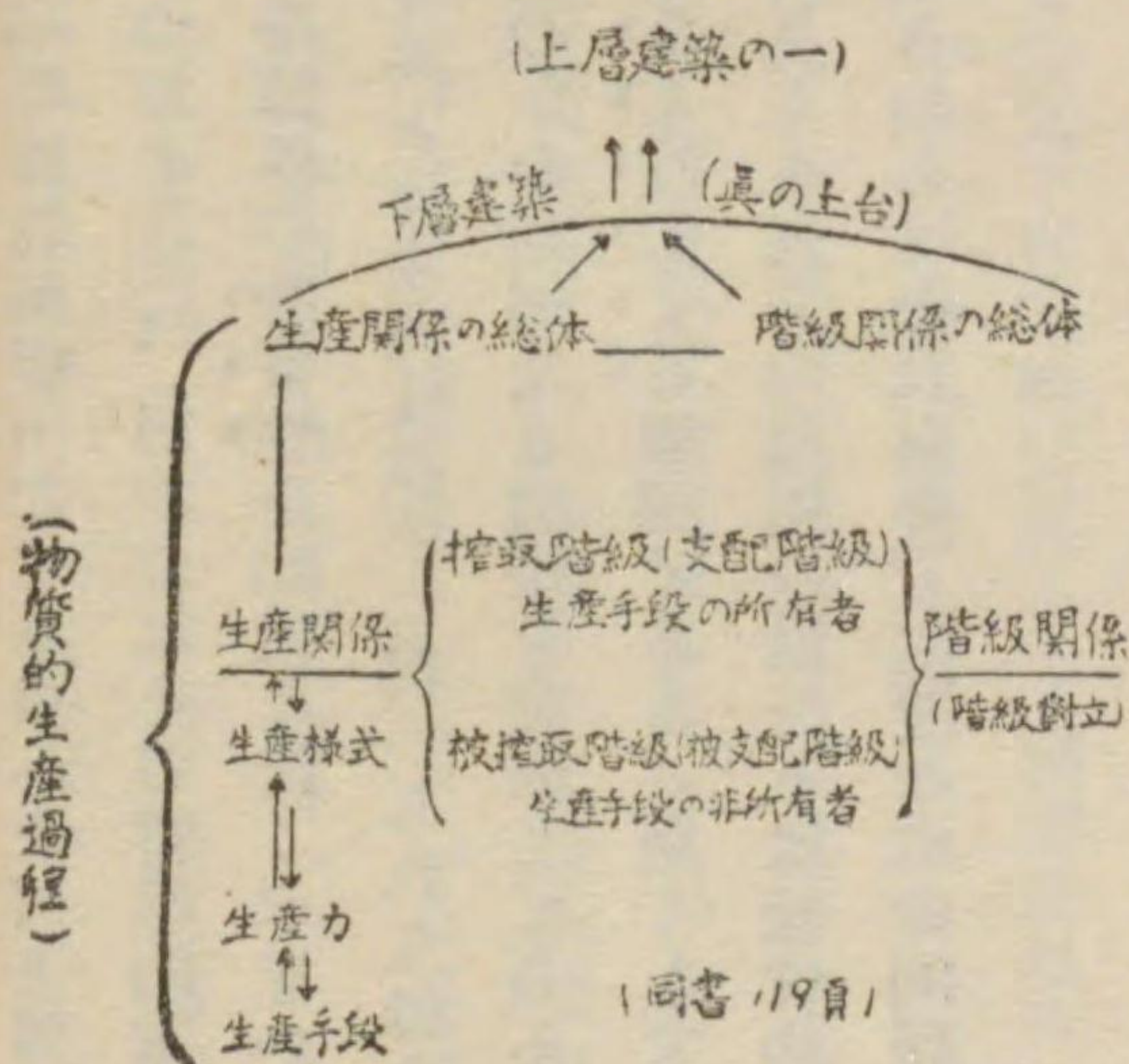
如何に此の任務を解決すべきか? 敵は幾つかの適切なる論證を發表してゐる。最も重要な論證は、人間の關係はその精神的交互作用であると假定する解釋である。斯くして勞働的連絡は精神的勞働的連絡となる。建設の過程と、そして同じくこれらの關係の維持とは社會的範圍に於て客觀化された精神的行爲から成る所の精神的過程となるから、それ自身「基礎」の社會的精神的性質を確立することになることは何等疑ひのない所である。

僕は、我々の間では、此の論證に反對してアンチ論證を發表してはゐないと斷言する。この故に僕はマルクスの解決の方向に向ふ所の問題の新らしい唯物主義的解決を提出する。その解決は斯うである——生産關係とは空間と時間の中における人間(生きた機械)と見たてた)の勞働的編成である。…そして媒介的機曾(モイメント)が精神的要素であるとしても、我々の論證の組立てを少しも壞さない。媒介的機曾(或は要素)は社會生活及び夫々の上部構造の複雑な容積としての再生産過程に役立つものである。斯かる解決を僕は唯一の正しい唯一の唯物主義的解決と考へる。これ無しに、そして之を外にしてはアドラー一派に解答することは出来ない(ブハーリン「史的唯物主義の理論」附録)

福本氏の「下層建築」

生産力と生産關係の問題を眞に唯物主義的に把握することの出来なかつた福本氏は「下層建築」の説  
 明に於ても、混亂が繰り返されてゐる。即ち氏は  
 「生産關係即ち階級關係である」と云つてゐるが、此の「即ち」が甚だ曖昧で正當に理解することが困  
 難であるから、我々は氏の圖表を證據に論を進めるより仕方がない。即ち氏によれば、「下層建築」は  
 次表のやうに表現されてゐる。 「下層建築」(物質的生產過程)——「社會の經濟的構造」

○「下層建築」の表式



此の圖表で見ると「生産關係即ち階級關係である」の中に生産様式、生産力、生産手段が何の會釋も  
 なく入り組んでゐる。而も「即ち」が別居し、別々に外に向つてゐる。

而も此の學者的兒戲を以て、福本氏はブハーリンを攻撃し

「かく考へてまゐりますと、彼(ブハーリン)にもなほまだ多少かの唯物史觀公式化論者の謬見——  
 「階級闘争説」は「經濟學批判」の序文に見えてゐる唯物史觀の公式では、ずつと後の方に隠れてゐる」  
 といふ謬見がこびり付いてゐるのではないでせうか?

私が嘗てブハーリンの「史的唯物主義の理論」に嚴密な辯證法的展開の缺如がありはしまいかといつ  
 たのは、此の點をも指してゐるのであります(同氏「社會の構成」並に變革の過程「八六頁」)

と云つてゐるが、福本氏の「生産關係即ち階級關係である」といふ定義は間違つてゐる。

「我々は労働器具の組合せ、社會的技術、それ自身が人間の關係即ち社會的經濟の組合せを決定するも  
 のであるといふ結論に到達した。だが然し之等全ては單に生産關係の一面、一部分を構成するもので  
 ある。さて我々はもう一つの非常に重大且つ根本的な問題、即ち社會的階級の問題に立ち止まらなけ  
 ればならない。……「階級的關係——生産關係の最も重要な部分——は矢張り生産力の變化と關聯し  
 て變化する」(ブハーリン「史的唯物主義の理論」第六章三十七節)

だから生産關係は、福本氏の如く「即ち階級關係である」といふことは明白に間違つてゐるし、圖表  
 の如く生産關係と階級關係が別居並立してゐる場合は更に大きな間違であり、夫は全然マルクス主義

でなくなる。

『エンゲルスはロンドンの新聞「ナロード」(一八五九年八月その六號から二十號)に於てマルクスの著書に就て應答しながら、「經濟學の批評に與ふ」の中で斯う書いてゐる。「經濟學は物質に就て語つてゐるのではなく、人間の關係に就て、その最後の段階たる階級間の關係に就て語つてゐるのである。これらの關係は常に物質と結び付き、物質の如く表現される」

之は何を意味するのであるか？ 矢張例を以て解説しやう。資本主義社會に於ける最も普通の階級の關係である資本家と労働者の關係を採らう。彼等は如何なる「物質」と結び付いてゐるか？ 即ち資本家の手に握られてゐる生産手段と結び付いて居り、生産手段は資本家の支配下にあり、労働者は生産手段を絶對に持たない。この生産手段は資本家にとつて利潤吸收の手段となり、労働階級搾取の手段となる。之は單なる物質ではなく、特別な社會的意義を持つた物質である。何んな？ それは單に生産手段である許りでなく雇傭労働の搾取手段であるといふことにおいて。……」(同上)

即ち「物質」に於て階級間の關係が言ひ現はされてをり、エンゲルスの言ふ如く階級間のこれらの關係は物質と結び付いてゐるのである。資本家と労働者の場合では夫は資本である。

だから、生産關係と階級關係を別居、並立させることは、『資本』に表現される生産手段と搾取手段を分離させることになる。そして夫は反無産階級的、反動的理論となる。

以上に於て我々は史的唯物主義を建設展開された福本氏が、史的唯物主義の根本問題たる生産力の問題に於ても、社會の物質的基礎たる生産關係の問題に於ても全然、非マルクス主義的混亂に陥られてゐるのを見た。

### 福本氏の「上層建築」

土臺がグラ／＼であつて上層建築がシツカリしてゐる譯がない。

『生産過程——生産關係は同時に階級過程——階級關係であります。

既に階級の分裂、對立がありますから、そこに一つの生活過程——支配階級がよつてもつて被支配階級を支配し統制するところの生活過程——所謂政治過程又は國家過程と名づけらるべき生活過程——が必然に生ぜずにはゐられない』(福本氏「社會の構成Ⅱ並に變革過程」二二〇頁)

だが此の福本氏の説明は社會的政治的上部構造の説明としては甚だ不充分である。

『全ての實在を觀察する辯證法的方法は、全ての現象を第一にその不可分離の連絡に於て第二にその運動に於て見ることを要求する』

だが福本氏の如く生産——階級——國家と必然の糸で連らね、之を交互作用で運動させても、少しも『基礎』と『上部構造』の本質を明かにすることが出来ない。夫どころか夫は單なる氏の所謂「現象の羅列」ではないか、

『社會的政治的上部構造は相互に連絡した異なつた要素からなる複雑な事物である。一般的には夫は

社會の階級的構造によつて決定される——この構造はそれ自身生産力即ち社會的技術に制肘されてゐる。……これら全ての要素は、直接又は間接に、社會的生産力の發達に制肘されてゐる」(ブハーリン「史的唯物主義の理論」一六九頁)

斯かる説明によつてのみ、『基礎』と『上部構造』との現象を第一にその不可分離の連絡に於て、第二にその運動に於て見ることが出来たと云ひ得るのである。

茲でも、福本氏の「辯證法」が唯物主義でないことを今一度實證してゐる。即ち氏が「辯證法」を思考構成にのみ局限してゐる結果、氏の思考は、氏の感覺から獨立し、氏の外に實在する實在の反映であることを認識することが出来ない。即ち、氏にありては全ての實在は、氏の所謂「辯證法」によりて並列されてゐるが爲め、氏の思考から出發して全ての實在が認識される爲め、全ての實在を正しく反映することが出来ないのである。従つて「生産關係とは空間と時間の中に於ける人間の勞動的編成である」(媒介的機会<sup>モメント</sup>又は要素)は社會生活及び夫々の上部構造の複雑な容積として再生産過程に役立つものである」ことを少しも認識、理解することが出来ないのである。

斯くして福本氏の所謂「下層建築」も「上層建築」もマルクス主義の建設展開ではなく、マルクス主義の假面に隠れて、反動的唯心論を打ち建てるものであることを曝露し得たから、次に氏の所謂「並に變革の過程」を分析して見やう。

### 小ブルジョアの革命主義

福本氏によれば、社會變革過程が次の如く示されてゐる。

階級闘争過程——一、純經濟過程 二、意識過程 三、純經濟過程 四、政治過程 五、國際過程  
階級闘争過程(革命點)——一、政治過程 二、純經濟過程 三、意識過程 四、國際過程 五、世界過程

だが此の理論が正しいか何うか、實際生活を持つて來れば直ちに判明する。氏は現在を指して政治過程と稱してゐるが、然らば現在經濟的闘争を全然抛棄すべきかといふと氏は然り！と即時に答へる。だが、實踐に於て我々は我が無産階級は氏の所謂五つの過程を同時に持つてゐることを知る。蓋し生産關係の矛盾が存在してゐるし、之を意識する者と意識しない者とがあり、經濟闘争もやれば、政治闘争もやり、國際的協同戦線も弱いながら張つてゐる。故に氏の變革の過程は哲學的虚妄であり虚構である。

「マルクスは一八四五年に、エンゲルスは一八八八年と、一八九一年にマルクス主義の認識論の基礎に實踐の規準を置いてゐるのを我々は見た。實踐を外にして「客觀的眞理が人間的思考に相當してゐるか」といふ問題を提出するのはスコラ哲學である——とマルクスはフォイエルバッハに就てのテーゼ第二で云つてゐる。他の全ての哲學的虚構と同様に、カント、ヒュームの不可知論を最も好く論駁し得

るのは實踐である——エンゲルスは繰返してゐる。「我々の行爲の成功は攝取される客觀的自然的物事に我々の攝取が相當してゐることを實證する」——不可知論者にエンゲルスは抗議してゐる」(『レーニン』唯物主義と經驗批判論「二〇—二一頁」)

だが我々は茲に止まつてはならない。

福本氏に據れば

『生産力と生産關係との矛盾の發展は、必然にまた階級對立の發展從つて革命的階級の發展となる。而してこの革命的階級、之が社會變革の支持者であり、主體たるのであります』(同氏「社會の構成」並に變革の過程「二〇一頁」)

『かくして、社會變革の過程は必然に(階級對立社會に於ては)階級形成の過程であり、階級闘争の過程である』(同上「二一〇頁」)

社會の物質的基礎たる生産關係を正しく認識されない福本氏は生産關係の重要な部分たる階級關係に對しても殆んど混亂に陥つてゐる。即ち氏にありては、生産力と生産關係の矛盾の發展が「建設展開」されてゐるが、我々は既に生産力が社會の發展を決定するのは「生産力は一定の具體的な體系としての社會と、その自然との相對性を表現してゐるからである」ことを知り「生産關係とは空間と時間の中における人間の勞働的編成である」ことを知り「階級的關係——生産關係の最も重要な部分——は矢張生産力の變化と關聯して變化する」ことを知つてゐるから、氏の「建設展開」が單に哲學的虛構で

あることを直ちに看破することが出来る。

だが之を親切に生産關係の矛盾の發展と解しても、生産關係の矛盾の發展は「必然に革命階級の發展」となりはしない。

「階級的精神並びに階級的思想、階級によるその目前の利益ばかりではなく、その永續的な一般的利益の自覺は生産に於ける階級の狀態から發生する。だが之は、生産に於ける狀態が直ちに自己の一般的根本的な利益を階級として理解するといふことではない。事實は反對で、斯かることは殆んど何時だつて無いのである。何故ならば實際の生活は

第一に、生産過程自身色々の異つたその發展の段階を通過するのであり、經濟的構成に於ける矛盾は單にかなり後の發展の歩みに於て明るみに出されるのである。

第二に、階級は出來上つた姿で天から降つてくるのではなく、云はゞ自然成長的に社會の他の違つた分派(過渡的、中間的または他の階級、層、社會的分派)から狩り集められるのである。

第三に、階級が自身の闘争の體驗に於て自分を特別な、彼にのみ特有な利益と、希望と憧憬と社會的「アイデア」とをもち、その社會の他の階級と決定的に對立した階級として自覺する前には相當の時間を経過する。

第四に、國家機關を掌握する支配階級が常に一方では被壓迫階級の階級的自覺の芽ばえを摘み切ること、他方では支配階級の思想を凡ゆる手段で植ゑ付けやうとし或ひはこの思想の影響を種々な方法

で施さうとし、傳染させやうとする計畫的な精神的、思想的の働きかけを忘れてはならない。これら全ての状態は、階級が既に生産過程に於て、一定の役割を演じつゝある人間の複雑な容積として實在しつゝはあるが、それは未だ自分を自覚した階級として存在しないといふ状態を現はすのである。階級は既に實在する。だが、彼は未だ「無自覚」である。

階級發達過程のこの相異状態を指摘する爲に、マルクスは二つの表現を用ひてゐる。一は階級「それ自身」二は「自己の爲の」階級。前者は自分を未だ階級として自覚しない階級を指し、後者は既に自己の社會的役割を自覺してゐる階級を指すのである（アハーン「史的唯物主義の理論」三三六—三三四頁）故に福本氏が、「マルクスの基礎づけた」史的唯物主義を新に「建設展開」された結果は、斯くして單に哲學的虚構と混亂を齎らすに過ぎなかつた。マルクスの階級「それ自身」と「自己の爲の」階級との相異を區別し得なかつた福本氏は、生産力と生産關係を混同したやうに、更に階級の問題をも混同してゐる。即ち氏にありては「生産力と生産關係の矛盾の發展は必然に革命階級の發展」となり、「社會變革の過程は階級形成の過程」であるとなつてゐるが、階級形成の過程即ち階級「それ自身」の發達過程と、革命階級の發展としての變革の過程即ち「自己の爲の」階級の發達過程とは全然相異してゐることを知らなければならぬ。

之に對する福本氏の無理解、無認識——即ち階級「それ自身」と「自己の爲の」階級との相異の無理解無認識は、哲學的に見て「物體それ自身」と「我々の爲の物體」との相異を認識し得ない實證哲學、經驗

批判主義従つて反動的唯心論である。

### 經濟的闘争と政治闘争の分離

斯くして福本氏の理論従つて福本イズムは唯心論の本質を曝露したが、最後に福本イズムが最も得意とする所の經濟的闘争と政治的闘争の分離、理論と闘争の分離に就て論じる必要がある。

然し此の問題を克服することは我々にとつて差して困難なことではない。我等は福本イズムが生産關係と階級關係を別居並立（時には同居）させてゐることを知つてゐる。この福本イズムによる生産關係と階級關係の別居並立は、「資本」に言ひ現されてゐる生産手段と搾取手段の別居並立——資本は恰かも生産手段で搾取手段でないかの如き結論は——やがて彼の福本イズムの有名なる經濟闘争と政治闘争の分離となり、純經濟闘争時代、純政治闘争時代といふものが「建設展開」されるのである。

だが「資本」は生産手段であるとともに搾取手段である。之を分離させた「純經濟闘争」「純政治闘争」は、前者は生産手段の闘争（大企業と小企業の闘争は明かに生産手段の闘争である）であり、後者は生産手段の闘争の上に立つた「純政治闘争」である。故に此の場合「政權」の争奪は、ブルジョア政黨と小ブルジョア政黨の「政權」の争奪でしかあり得ない。

故に福本イズムの理論は最初は大企業との「經濟闘争」を行ひ、之に破れた後「政治闘争」に移つて行く小ブルジョアの反動的理論である。

## 理論と闘争の分離

階級「それ自身」と「自己の爲の」階級との相異を認識し得ない福本イズムは、更に進んで理論と闘争とを分離させてゐる。之はブルジョア學者の用ふる手段で、「純科學」は地上の醜い事實には無關係であるといふのと少しも變りはない。假へば氏が

「生産力と生産關係との矛盾が發展すれば革命的階級が發展する」

「階級形成の過程は階級闘争の過程である」

と認識されることは、階級「それ自身」と「自己の爲の」階級を混同、誤解してゐることであることは我々の既に知つてゐる所であるが、斯かる唯心論的認識は、必然に「理論」と「闘争」の分離なる理論を生み出すのである。何故ならば氏にありては理論は、頭から捻り出されるものか又は全ての實在と折り合せるものであるから、充分に闘争を認識しなくても存在の價值があるのである。換言すれば氏の頭で作り上げた辯證法は自然の辯證法と同一であり、折合はせることが出来るものである。

だが我々は之が明に非マルクス主義的「建設展開」であることを知り、それが如何に「氏の思考から獨立して、私の感覺から獨立して、氏の外に實在する事物」を少しも反映してをらず、歪めてゐるものであるかを知つてゐる。それと同様に理論と闘争に關しても充分に同様の事が言ひ得る。氏によれば無産者階級は

「經濟主義、日和見主義との闘争は當分理論闘争に局限する」底の「方向轉換」をしなければならぬのだが、だが實踐は

「諸主義との闘争は理論闘争に局限」されてをらず、ヨリ多く實際闘争に於ても行はれてゐることを示してゐる。斯くて氏の所謂「理論と闘争の分離」も氏の哲學的虛構であることは容易に看破し得る。

## マルクスの「建設展開」の完全なる失敗

以上に於て福本イズムによるマルクス主義の「建設展開」が完全に失敗し、夫は遂に反動的唯心論に降服してゐることを知り得たが、福本イズムを綜合すると次のやうになる。

第一に——マルクスの「建設展開」に名を藉つて、其の哲學的な根本問題たる唯物主義を唯心論に置きかへてゐる。

第二に——「唯物辯證法」の名の下に、マルクス主義の、思考範疇の辯證法は自然における法則、物質の運動の反映即ち自然における辯證法の反映であることを、歪めて「辯證法」を特に思考構成にのみ追ひ込めてゐる。全然唯心論的なものとしてゐる。

第三に——「有機」と「無機」「辯證法」と「機械學」を對立させてゐることによつて、認識論を辯證法的に把握してゐないことを曝露し、夫はまたベルグソン、ドルシ一派の「有機的」神秘主義に降服してゐる。

第四に——史的唯物主義の理論にとつて根本問題たる何故生産力が全てを解説する終局的原因となるかの問題に對して、生産力と生産關係の混同によつて、この根本問題を解決し得ず、混亂せしめてゐる。

第五に——生産關係と階級關係の曖昧なるスコラ哲學の爲に、社會の物質的基礎たる生産關係を正當に把持し得ず、哲學的虚構を以て此の混同無理解を蔽つてゐる。

第六に——階級「それ自身」と「自己の爲の」階級との相異を認識し得ないが爲に、その所謂「Ⅱ並に變革の過程」はスコラ哲學となつてゐる。

### エンゲルスの俗學性

斯くしてエンゲルスの

「マルクスはフランスの社會主義及び經濟學を既に社會主義的世界觀から研究するに至つた。そして彼の描いた目的は、彼の發生的價値を「保證」する爲に此の世界觀に「理論的基礎」を與へることであつた。マルクスはリカードから價格の法則を把握した。だが……フランス社會主義者のリカードからの結論には彼の……世界觀が満足することが出来なかつた。蓋し此の結論は既に「労働者盜掠への公憤」其他の形で彼の發生的價値の一部を構成してゐたからである。結論は「經濟的に不正確な形式」として排撃された。蓋しそれは單に「經濟學への道德の適用」であつたからである」だが形式的經濟的意味に於て不正確なものでも、世界的歴史の意味に於て正確なものである。若し或る經濟的事實に對して大衆が道德的自覺を以つて夫を不公平と發表したことは、それは此の事實が自分自身を終熄した事、他の經濟的事實が現はれてその勢力でこの事實が耐へ切れなくなり、維持し難くなつたことを實證するものである。この故に形式的經濟的不正確の後方に眞實の經濟的内容が隠れてゐる」(エンゲルス「哲學の貧困」の序文)

といふ個所を全然認識せずして福本氏が

「かくの如きは、私を見る所によれば、唯物史觀の構成過程のうちその前段的過程の説明に全注意を奪はれて、其の基本的、決定的構成過程たる、經濟學批判過程の意義を——換言せば、經濟學の批判が、唯物史觀の構成に對して有する重大なる關係を——没却し去つたものといはなければならぬ。この點に關しては、エンゲルスは却つて自ら既に、後の俗學的マルキシストの陥るべき道を準備したるの譏を免れないであらう」(同氏「唯物史觀と中間派史觀」一五頁)

「以上の理由により、唯物史觀は其の創設者により、完成さるべく、しかも完成されずに終つてしまつたのである。しかし私達は、此の點に就て、マルクス自身がいかなる計畫をもつてゐたかに關しては、マルクス、エンゲルスの著述を通しては何等知ることができない。(同上一九頁)と斷言し、

「私は以上で、唯物史觀を眞實に理解することは、同時に唯物史觀を建設展開すること——マルクス



によつて基礎づけられた方法に従ひて——でなければならぬ……』と結ばれて、唯心論をマルクス主義の上に打ち建てられた功績は、ブルジョア階級とブルジョア學者が滿腔の敬意を表する所であらう。だが福本氏の建設展開を俟たずして、マルクスはリカードの經濟學を社會主義的世界觀から研究したことは、エンゲルスの上述の序文に於て見ることが出来る。之をも否定し去る福本氏は明かに狂者である。

## 結 論

福本イズムは今「流行」の最中である。此の流行は多くの損害を無産階級に與へつゝある。それを自覺し得ないのは「福本宗」の信者のみである。だが信仰は科學ではない。無産階級の科學は信仰から生れない。故に筆者はかかる損害が何に原因するかを見極めやうとして、福本氏の著者を漁つた。而して其處に氏の理論の基礎をなす「方法論」と、マルクス主義の「建設展開」を見た。

だが此の「方法論」と「建設展開」が果して無産階級の利益になるか何うかを筆者は先づ検討した。そして其處に「辯證法」の美服を纏へる「ブルジョア思想」「反動的唯心論」を發見し、マルクス「建設展開」に名を藉るマルクス主義の否定を見出した。

だが夫は無産階級に看破されないやうに左翼的修辭が用ひられてある。かかる左翼的な修辭に唯心論が隠れてゐるだけ無産階級にとつて損害が多きい。かかる企ては、堂々と玄關から乗り込む反動よりは恐ろしい。それは彼のコカイン又は阿片の密輸入の如く恐ろしきものである。筆者の任務は此の「左翼」の翼を折り、「辯證法」のウスモノを剥ぎ取り、其の「唯心論」の本體を曝露して、その最後の避難所たる「辯證法」から唯心論を追ひ出すことにあつた。

## 二つの理論闘争

## エンゲルスと福本氏

『我々は闘争を當分理論闘争に局限する』(北條氏「無産階級の方角轉換」)

『我々は今や理論闘争に政治的曝露を重ね始めなければならない』(福本氏「理論闘争」)

之は最新流行の福本イズムの合言葉である。之が正統派マルクス主義、レーニン主義と誤解してゐる読者が多いやうだが、之は決して正統派マルクス主義でも、レーニン主義でも何でも無い。

我々はレーニンの著「何を爲すべきか?」の「エンゲルスと理論闘争の意義」の論文中に左の文字を見る。

『我々は、一八七四年になされたエンゲルスの社會民主主義運動に於ける理論の意義に就ての問題の指示を引用しやう。エンゲルスは社會民主主義の偉大なる闘争の形態を二つでなく(政治的、經濟的)——我々の處ではさうして置く方が愉快であるが——三つであると認めて、それらと並べて理論闘争を置き据ゑてゐる』

またその少し先でレーニンが引用してゐるエンゲルスの „Der deutsche Bauernkrieg” の序文に

は

『獨逸の労働者が稀に見る巧みさを以て、自分の地位の便宜を利用してゐることを公平に認めなければならぬ。労働運動が存在したそも／＼の始めから、闘争は計畫的に、闘争の三つの方面の凡てを相互に結び合せ、相應し合せて遂行された(理論的に、政治的に、實際的經濟的に)——資本家に對抗して。云はゞこの集中的襲撃の中に獨逸の運動の勢力と必然性が存在する』とある。

故に福本イズムが闘争を『理論』に局限したり、理論闘争に『政治的曝露』を重ねたりすることは明かに哲學的虚構であり、マルクス主義とは似ても似つかぬものである。

而して福本イズムの所謂『理論闘争』が、レーニン主義のレッテルを貼つたにした所が、それは偽物であり、贋物である。我々は夫を之から曝露する。

## 理論闘争の意義

レーニンが經濟主義者に與へた抗議は、ゴータ綱領に就ての手紙の中でマルクスが『實際運動の一步々々は一ダースの綱領より重要だ』と云つてゐる言葉を經濟主義者達が曲解して理論の意義を弱めたに對する攻撃であつた。即ち我々はレーニンの前掲論文の同じパラグラフで

『この故に「ラボーチエ・ヂエロ」が勝ち誇つたやうにマルクスの格言「實際運動の一步々々は一ダース

の綱領よりも重要だ」を掲揚することは、如何にそれが機智の缺乏を示すものであるかといふことが出来る。この言葉を理論的混亂の時代に繰返すとは、恰も葬列に向つて「葬つては不可ない」と喚くやうなものである。事實、引用されたマルクスの言葉のあるゴータ綱領に就ての手紙の中で、彼は鋭く、原則の具象に際して用ひられた折衷主義を叱責してゐる。「若し既に合同することが必要であるならば——マルクスは黨の指導者に書き送つてゐる——それなら運動の實際的目的を満足させる爲に條約を結び給へ、だが原則の取引を許しては不可ないし、理論的『讓歩』をしてはならない」之がマルクスの考へであつた。だが我々の所では彼の名に於て理論の意義を弱めやうと努力する人々がある」

『XX的理論なしにXX的運動はあり得ない』(レーニン全集第五卷一三四—一三五頁)

といふ文字を見ることが出来る。

だが之は闘争を理論闘争に「局限」するといふことではない。闘争を理論闘争に局限するといふことは、政治的闘争、經濟的闘争の意義を無視することである。即ち福本イズムはマルクスの名に於て、マルクスの「實際運動の一步々々は一ダースの綱領よりも重要である」といふ意義を弱めやうとするものである。換言すれば經濟主義者は「右から」福本イズムは「極左から」マルクスの理論の意義を曲解したものである。

右翼と極左が常に相通することは國際運動の實踐が規準する所である。勞農ロシアに「革命」(即ち反革命)を起さんとするコルシガ、カウツキーと同じ容貌を持つ如く、經濟主義者と福本イズムは共に、マルクスの理論の意義を曲解した非マルクス主義、従つて反動主義者である。

更に福本イズムの「我々は今や理論闘争に政治的曝露を重ね始めなければならない」に至つては、マルクス主義従つてレーニン主義を空虚な文字の組合せに終らせるものである。

「エンゲルスは社會民主黨の偉大なる闘争の形態を二つでなく、……三つであると認めて、それら(政治的、經濟的闘争——筆者)と並べて理論闘争を置き据ゑてゐる」

『獨逸の労働者が稀に見る巧みさを以て……労働運動が存在したそも／＼の始めから闘争は計畫的に闘争の三つの方向(理論的、政治的、實際的經濟的)の全てを相互に結び合せ、相應し合せて遂行された』

と引用してゐるレーニンに據れば、社會民主主義は何時だつて政治的、經濟的、理論的闘争を巧みに相互に結び合せ、相應し合せて闘争したのである。之は假へば

「一、社會民主主義は常に經濟闘争をプロレタリアの階級闘争の一構成部分と承認してゐる。二、經濟闘争を目的とした労働階級の最も好適な組織は、資本主義諸國の經驗が示すやうに、廣汎な労働組合である。……四、經濟闘争が労働大衆の強固なる地位の改善を齎らし、そしてその眞に階級的團體を強固にし得るのは、經濟闘争をプロレタリア政治闘争と正しく結び合せるといふ條件の下に於てのみ可能である」(P. C. I. D. P. 合同大會の戰術的プラットフォーム、一九〇六年二月)

に於ても實證することが出来る。だからレーニンにありては、常に此の三つは結び付いて居り、夫

を如何に巧みに相互に結び付け、相應し得たかにレーニンの××の『職人』としての面目があつたのである。

だから理論闘争に闘争を局限したり、理論闘争に『政治的曝露』を重ねたりすることはマルクス主義でも、またレーニン主義でも何でもない、反動的な福本イズムである。

更にイスクラ第一號に書かれたレーニンの次の定義を見る。

『社會民主主義は、あらかじめ頭から捻り出された何等か一つのプラン或ひは政治闘争にのみ自己の活動を狭めたり、手を束ねたりしはしない。——彼女(社會民主主義)はそれが黨の現有の勢力に相當する限りは、凡ゆる闘争手段を承認する』云々。

### 労働階級の覇權

福本イズムは誇らげに宣言する。

「我々の見る所によれば、労働階級が、其の参加によつてもつて、始めて眞實の全無産階級的意識を汲みとりうる所の、かの××的知識階級の意識は、其の許されたる、より廣汎なる生活過程——(しかり、それは、より廣汎なる生活過程である。蓋し労働階級が、本來主として許されたる生活過程は、所謂物質的生産の過程なるに反し、此の階級は、所謂政治過程、意識過程を廣汎に生活する。たゞにそのみならず、一定條件の下には、物質的生産過程に接近して——直接にはいり込むのではないが

——之をも批判するの生活要求を持ちうるのであるから、その批判の領域は全生活過程に及ぶといへやう」(福本氏「理論闘争」一四二—一四三頁)

斯くて福本イズムは『民主主義の爲の前衛闘士としての労働階級』を、『民主主義の爲の前衛闘士としての××知識階級』に置き換へてゐる。

そして彼等は勝ち誇つたかの如く

「我々は労働者には社會民主主義的自覺はあり得ないと言つた。それは外からのみ持ち込まれ得るのである。各國の歴史は、労働階級は只管自己個有の力のみには労働組合主義的自覺を作り上げ得るのみ力しかないことを實證してゐる。即ち組合に團結する必要を悟り、主人と闘争を遂行し、政府から労働者に必要な色々の法律を發布させること等々位しか出來得ない。社會主義の學問は教養ある有産階級の代表者、インテリゲンチヤが作り上げた所の哲學的、歴史的、經濟的理論から成長したものであるではないか。現代の科學的社會主義の建設者たるマルクス、エンゲルス自身その社會的地位はブルジョア、インテリゲンチヤに屬してゐた」(レーニン「何を爲すべきか?」の自然成長的向上の開始)

を引用して、そのレーニン主義的定義であらうとする。だが労働階級が本來主として許されたる生活過程は所謂物質的生産の過程だけではない。階級「それ自身」としての労働階級は第一に經濟的に搾取され第二に、政治的に壓迫され、第三に貧困にして、第四に生産し、第五に私有財産に制肘されてゐず第六に生産に於て團結的で労働は共同である。此の條件があつてこそ労働階級が、『自己の爲の』

階級として立つた時に「デモクラシーの前衛闘士としての労働階級」たり得るのである。

然るに福本イズムの如く、労働階級の生活を物質生産過程にのみ追ひ込める時は、労働階級と手工業者と農民との區別を付けることが無意味になつて来る。何となれば手工業者も、農民も其物質的生産をするから、そこには何も労働階級を垣根で圍ふ必要がなくなつて来る。史的唯物主義は

- 一、各個々の社會の形態はその社會の特質を理解し研究する。
- 二、各々の形態はその内部的變化過程に於て研究する。
- 三、各社會の形態はその發生とその必然の消滅即ち他の形態との連絡に於て研究することが必要である。

から、手工業者と農民と労働階級の間は何等の特質と特徴をも認識し得ない福本イズムは明白に反マルクス主義である。

更に新たに「××知識階級」なる階級を樹立した福本イズムは、この階級の特質として「此の階級は、所謂政治過程、意識過程を廣汎に生活する。たゞにそのみならず、一定條件の下には、物質的生産過程に接近して……之をも批判するの生活要求を持ちうるのであるから、その批判の領域は全生活過程に及ぶ」を擧げてゐるが、我々は未だ嘗てマルクス主義の文献中に「全生活過程」「全生活意識」を持つた××的知識階級なるものを發見したことがない。

而も此の新階級は、労働階級を狭隘な物質生産過程に押し込めて、労働階級の覇權の意義を低落さ

せ、それに代つて、覇權を掌握する。だが、

「プロレタリアートが或ひは直接に特別な階級として、或ひは自由の爲の闘争に於ける全ての××的勢力の前衛として交渉を持つ所の社會的又は政治的生活の全ての現象、全ての事件は、政治的宣傳とアチテーションの場合に役立たなければならぬ」「二つの大會」一七頁、圍點はレーニン（之は「ラボーチエ、ヂエロ」が云つてゐるのだ——筆者）全くその通り、それは甚だ正しくそして甚だ立派な言葉である。我々は若し「ラボーチエ、ヂエロ」が夫を理解し、彼がこの言葉と並べて、夫と分裂する所のことを言はなかつたならば、我々は全然満足することが出来たのである。「レーニン」何を爲すべきか？「民主主義の爲の前衛闘士としての労働階級」

とあるから、レーニンは決して「何を爲すべきか？」の中で労働階級の覇權の意義を弱め又は低落させてはゐない。

「労働者に階級的政治的自覺を齎らし得るのは外からのみである。即ち經濟闘争の外から、労働者と主人の關係の範圍の外からである」(同上)

とレーニンが言つてゐるのは、階級「それ自身」として全ての××的勢力の前衛としての歴史的任務を持つ労働階級を、「自己の爲の」階級とならしめ、此の歴史的任務を自覺し遂行せしめる爲に、社會民主主義者が外から階級的政治的自覺を齎らすことを言つてゐるのである。

だから之を曲解して労働階級を「本來主として許されたる生活過程は、所謂物質生産の過程である」

と定義し、「労働者階級が、其の参加によつてもつて、始めて眞實の全無産階級的意識を汲みとりうる所の、かの××的知識階級」云々は、明かに反レーニン主義である。

事實我々が最後に引用したレーニンの言葉の先は斯う書いてある。

『その分野に於てのみこの知識を汲みとり得るのは、全ての階級と層の國家と政府に對する關係の分野、全ての階級間に於ける相互關係の分野である。だから「労働者に政治的知識を齎らす爲には、何を爲すべきか？」の問題に、多くの場合實際家(經濟主義に傾いてゐる實際家は云はずもがな)が與へるタ、一つの答へたる「労働者に行け」と答へることは不可である。労働者に政治的知識を齎らす爲には、社會民主主義者は住民の全ての階級の中へ行かなければならない。自己の軍隊の全ての部隊を諸所に派遣しなければならぬ』(同上)

故にこれは福本イズムが語る如く全社會生活を批判し得る××的知識階級が労働者階級に参加することでないと共に、夫は社會民主主義者が労働者に政治的知識を齎らす爲に全ての階級と層の國家と政府に對する關係の分野、全ての階級間に於ける相互關係の分野に於て、住民の全ての階級の中へ行かねばならぬとレーニンが述べてゐるのであつて、決して××的知識階級が全ての生活過程を許され且つ之を批判する意識を持つこととは何等の關係はないのである。この點をモウ一層明白にする爲に我々はレーニンの「住民の全ての階級」に行くことが何であるかを調べよう。

「我々が『全ての住民の中へ行く』のは、理論家の資格に於て、宣傳者の資格に於て、アジテーターの資格に於て、組織者の資格に於てななければならない。……肝腎なことは全ての民衆の層に宣傳とアジテーションを行ふことである。……蓋し實行に於て『×××××は全ての××運動を支持する』といふことを忘却する者は社會民主主義者ではない』(同上)

故に福本イズムが「労働者階級が、其の参加によつてもつて、始めて眞實の全無産階級的意識を汲みとり得る所の、かの××的知識階級の意識は、其の許されたる、より廣汎なる生活過程」云々は、單に労働階級の覇權を蹴飛ばし、××的知識階級を禮讃する以外の何者でもないのであつて、それはレーニンの「何を爲すべきか？」の「我々は労働者には社會民主主義的自覺はあり得ないと言つた。それは外からのみ持ち込まれ得るのである」といふレッテルを貼つて、労働階級の覇權を否定する許るか、知識階級を禮讃することによつて、労働者に政治的知識を齎す爲に、何を爲すべきかの根本思想を歪めて仕舞つたものである。

斯くして經濟主義者が階級「それ自身」を過重評價して、『自己の爲の』階級への努力を忘却又は輕蔑したやうに、福本イズムは××的知識階級を運動の玉座に据ゑることによつて労働階級の覇權を否定し引き下げた。即ち福本イズムは、經濟主義者と同様な容貌を茲でも曝露したのである。だが、夫は決して偶然でも不思議な暗號でも何でもない。我々は既に福本イズムが、階級「それ自身」と『自己の爲の』階級とを區別し得ないことを彼の著書「社會の構成」並に變革の過程」に就て知つてゐる。(拙稿

「アンチ福本イズム」参照)

## 地價政策の批判

## 小作爭議と地價の下落

日本農民組合千葉縣南總支部で發表した『水田一反歩當收支計算表』に據ると水田一反歩につき總支出百十三圓三十五錢三厘に對し之が收穫高は合計僅かに七十三圓五十二錢八厘で差引三十八圓六十二錢の缺損となつてゐる。最も此の支出の中には勞働賃銀五十八圓五十錢（一日十時間食料持ち一圓五十錢で三十九日弱）が計上してあるが、此の賃銀を控除すれば小作人の一日の勞働に對する収入は僅かに四十六錢五厘強にしかならない。而して夫婦二人で一町歩を耕作してもその年收は僅かに二百十六圓を出る譯である。然し此の計算表は非常に樂觀的で、大體に於て非常に優秀な地方にのみ可能な收支決算であつて、同じ千葉縣でも他地方では小作人の一日の勞働に對する報酬は僅かに二十幾錢である。然し大體に於てこの收支計算表でも明かなる如く小作人は一日五十九錢近くの生活費で一家を支持しなければならぬ状態であり、農業勞働者が一日辨當持で一圓五十錢をとると比較するとお話にならぬ程悪い生活をしてゐる譯である。現在大爭議をやつてゐる新潟縣では小作人は、縣農會の調査でさへ一日一人の生活費は二十二錢五厘といふ悪い生活をしてゐる。實際耕作に従事する小作

人が斯うした悪い生活をしてゐるに拘はらず、地主は收穫高の五割（全田平均率）を小作料として徴收し、甚だしきは七割、八割を土地所有に對する報酬として徴收してゐる。而して此の重い小作料は小作人の生活を極度に壓迫し、小作人は年々平均四百五十圓の喰ひ込みを生じ、娘を女郎に賣つたり、副業をしたり何かして破産を免かれて來たが、漸次小作人の自覺に伴ひ、小作人は苦しい生活から救はれる爲に小作料の減額を要求するに至つた。之が近時旺んな小作爭議であるが、小作爭議の影響で小作料が減免されるやうになつて來たので、地價は漸次下落して來た。之は當然の歸結であつて、元來地價なるものは小作料の額を、この國の平均利子で除したるものであるから、小作料が減すれば、地價が下落するのは當然である。即ち假に小作料を一反四十圓とし、平均利子を五歩とすれば、地價は

$$\text{小作料}40\text{圓} \div \frac{5}{100} = 800\text{圓}$$

一反八百圓となるのである。この故に小作料が一反三十圓に減すれば一反の地價は六百圓に下落する譯である。此の地價下落に最も痛痒を感じるのは地主と農工銀行で、地主は速かに土地を賣つて其の資金を他の産業に投資せんとし、土地を抵當に農工銀行から資金を借出すので、農工銀行は抵當にとつた土地を抱へて四苦八苦の態である。こゝに於て彼等は地價下落の救済策として『自作農創定』を考案したのである。政府は勿論直に此の案を採用した。

## 地價鈞上げ策としての自作農創定

然し政府は此の自作農創定を考案した眞意が地價下落の救済策であることを、小作人が看破することを恐れ、『農業經營の安固、農村の健全なる發達、小作爭議の緩和(農相訓示)』といふ麗々しい看板を立てた。だが此の美しい看板にも拘はらず、實際は地主の土地賣逃げを助成し、地價を騰貴させるものであることは、小作調査委員會に於ける杉山日本農民組合長の答辯に見ても明かである。即ち『自作農創定は自作農それ自身が没落しつゝある今日、實際不可能であり、それが地主の土地賣り退きを助けるものであることは、金利を三步に見積つて自作農の經營は損が行くのに、三步五厘の利子で土地を買つたら、尙やつて行けないことは明かである。更に秋田の如きは自作農創定の爲に地價が二分八厘方騰貴してゐる云々』といふ杉山氏の答辯は、政府が簡易保險(それ自身無産者の懷中から出た)の三百萬圓を以て案出した自作農創定が、實際は小作人の利益にはならず却つて地價を騰貴せしめて、地主及び農工銀行を救済するものであることを明かにしてゐる。それに小作人が政府から資金を借りて自作農になれば、償還期限の二十四年間は其の土地を抵當に入れることも、手離すことも出来ないから、金利三步でさへ引合はない經營を、三步五厘で二十四年間苦しい經營を續けて二進も三進も行かなくなる許りである。然し小作人の無自覺な分子は、土地に對する愛着と、『自作農』といふ幻影とに惑はされて、斯うした苦痛をも甘受するものがあるといふことは否定することが出来ない。現に北

日本農民組合長の須貝快天の如きは、自作農創定に賛成してゐる。之は彼自身『女郎屋』の亭主であり、小作人が高率な利子で二十四年間苦しむことは、小作人の娘を女郎に賣飛ばす機會を多分に作るからであるもあるが、然し彼の指導下にある小作人が『自作農』といふ幻影に捉はれて彼を支持してゐることは否めない事實である。この小作人の無自覺分子を覺醒する爲には、政府の眞意を廣く小作人大衆に知らしめ、之を曝露しなければならぬ。然しこの曝露の方法は飽まで事實を以てしなければ、無自覺分子には容易に會得が出来ないことは豫め承知して置く必要がある。

## 政府の小作法並びに小作組合法の正體

下落して行く地價鈞上げ策として自作農創定を企てた政府は更に廣汎な範圍でそして更に有效な地價鈞上げ策としての小作法及び小作組合法を作ること企圖した。然し政府が地主及び農工銀行を擁護して、地價鈞上げ策を講ずるものであることを、小作人に自覺させない爲に、先づ政府は小作人の味方であると小作人に思はせる必要があつた。此の小作人欺瞞の爲に設けられたのが小作調査會である。小作調査會は現在小作人を最も苦しめてゐる地主の土地引上げに關して『地主が變つても直ちに小作權が消滅せぬやうな法案』を作るのだと發表した。そして事實農林省案は、賃借權と永小作權とを同一の範疇に入れた小作權なるものを認め、この小作權に對しては地主が變つてもその對抗力は消滅しないといふ小作權を認めたものであつた。然し小作調停法が、地主の裁判費用を節約する爲に設



けられたものであることを體驗した農民の自覺分子は、此の餌に引つ懸らなかつた。即ち八月三十一日大阪に開催された『全國小作立法對策協議會』に於て當日參加した日本農民組合、中部農民組合、島根小作聯合會、廣島神田農民同盟の代表者等は、政府の小作法及び小作組合法に對して批判的根拠を以て政府案に對して行くことを決議してゐる。斯うした小作人側の空氣は當然であつて、小作人欺瞞が思はしくゆかないのを見てとつた政府はこの『全國小作立法對策協議會』前に急遽對策を變更し、小作人連動の指導者を攻撃することに方向を轉換してゐる。即ち八月十九日司法、内務、農林の次官以下關係省官吏並びに内閣書記官長等が集まつて、曝露された自作農創定及小作法並びに小作組合法を糊塗する爲に協議會を開き、種々惡辣な噓言を吐き農民運動の指導者を攻撃してゐる。それが如何にバカげた噓言であるか、例へば組合を脱會せんとするに當つては違約金の名目を以て數十圓乃至數百圓を追徴すると言つてゐるに見ても明かである。更に那教育會長としての地主眞島の小作人壓迫の教育に對する抗議としての小學生徒の同盟休校を目して義務教育の根本觀念を破壊すると云ひ、町村會で横暴を働らく地主に對する抗議としての公課不納同盟を目して地方財政を亂し合せて國民的思想の惡化を計るといふ風に、只管地主の擁護に努め、農民の蒙を啓かんとする農民運動の指導者の攻撃に専念してゐるのである。政府の斯うした態度を見た農民組合が、政府案の小作法並びに小作組合法に對して批制的反對の態度に出たことは當然である。然し政府は之でも未だあきらめがつかず九月八、九兩日農相官邸に地主と小作人の代表を招致し、試験でもするやうな態度で小作人代表に諮問した。

諮問の内容は政府側が政府の自作農創定、調停法及小作法並びに小作組合法を小作側代表に承諾させやうとするものであつたので、小作側代表はその全てに批制的反對の態度で之に承認を與へなかつた。政府案を以て小作人を欺瞞し損ねた政府は、愈々其の正體を曝露し二ヶ月以前に與へた空手形を廢棄して新たに煽動政治を採用した。即ち「小作權については日本農民組合等の主張する耕作權確立説は採用せず。然し善良勤勉な小作人は安心して耕作に従事する様地主が變つても小作契約は存續し、小作年限も法定しないが善意の小作人は絶対に耕地返還を要求されることのなきやう實質的に物權と同一にする。但し惡意の小作人が故意に小作料の納附を肯んじない時は從來の如く地主は小作人に對し耕地の立入禁止、立毛差押へを行ふ事が出来る」と小作調査會で決定してゐる。こゝにいふ惡意、善意とは地主的偏見の尺度で計つた惡意、善意であつて、小作米を地主の要求通り出すのが善良な小作人で、小作米減額を要求するのが邪惡な小作人である。小作人が小作米を地主の要求通り五割乃至七、八割も出して居れば自然地價も騰貴し、該土地に對する資本の流動も著るしく可能となり、現在地主及び農工銀行が陥つてゐる行き詰りから抜け去ることが出来るのであるから、斯うした小作人は地主並びに地工銀行に取つては最も必要であり、且つ彼等にとつては善良な小作人であるのである。然し小作人の現在の生活状態は此の稿の始めに引用したやうに一日の生活費僅かに二十二錢といふ状態であるから、そして年々負債がかさなつて行き、果ては娘を女郎に賣る有様であるから、此の窮境から救はれる爲には何うしても小作米減額要求の途を辿るより外仕方がないのである。そして小作米減額

を地主に要求すれば、地主は土地立入禁止、立毛差押へ等をやつて小作人を何時迄も窮境に縛りつけやうとするからこそ、この地主偏重の制度を改善する爲に耕作權の確立を要求するのである。然るに政府及其の代辯者である小作調査會は斯うした小作人の窮狀に何等同情する所なく小作權さへ承認することを拒絶し、煽動政治を行ふて、善意の小作人にのみ絶対に土地返還を要求されないやう保護すると詭辯を弄し出した。だがこの地主的偏見の尺度による善良な小作人は小作米減額を要求しない者であるから、斯うした小作人から地主が土地の返還を要求する筈はなし、また地主にそんな馬鹿はないので、善良な小作人に對して土地返還を人情的に保證するといふのは全然無意味であり、無自覺な小作人を飽まで愚弄した話である。而して斯くの如き政府の態度は、小作米減額を防止し、地價を釣上げ、無自覺な農民を煽動して、地主及び農工銀行の行き詰りを救ふ以外の何者でもないのである。そして其の爲には無自覺な小作人を「善良」と煽動する一方、自覺した小作人を「悪徒」と批難して、惡徒だから土地立入禁止、立毛差押へ等を行つて苦しめるのは正當であると、從來の地主偏重の制度を合法化し、更に小作調停委員會に一層の權力を附與し「小作委員會は調停を強制し得、争議中の小作料はすべて農業倉庫米券倉庫その他に供託し得る」といふ風に「惡意」の小作人が地主と鬭争し得た最後の武器までも剝奪しやうとしてゐる。斯うした自覺分子に對する壓迫も、それが小作米の減額を防止し、地價を騰貴せしめる一方法であるといふことは否定することが出来ない。

## 結 論

我々は以上に於て近時小作人の生活人の窮迫は必然に農民運動を旺ならしめ、その結果として小作料の減額に伴ふ地價下落に對して、政府、地主、銀行等が如何なる對策を講じつゝあるかを見た。そして政府は始め、小作人を全體として欺瞞せんとしたが。遂にその成らざるを見て、今度は露骨に小作人運動の壓迫をやる法案を作らんとしつゝあるを見た。それと同時に二ヶ月前には「地主が變つても小作權が消滅せぬやうな法案」を作らうとした政府が二ヶ月後の今日には、小作權を法律化せず單なる煽動政治を行ひ、一層小作人の運動を壓迫する法案を作らうとするのを見る。之は非常に教訓的な事實で政府が徹頭徹尾地主擁護をやり、その一時的な美しい空手形は單に小作人を幻影に酔はしめる欺瞞であることを知つた。ブルジョア内閣が與へる華かな約束は全て斯くの如く空手形であり、實行の伴はないもので唯だ無産者を欺瞞することであることを知つた。自覺した勞働者、農民の任務は此のブルジョア政黨の空手形を速に民衆の間に不信用ならしめ、不渡りにすることである。その正體を曝露することである。資本家地主を擁護するブルジョア政黨の本質を廣く大衆に曝露することである。

## 地價政策批判の辯護

## フルジヨアの代辯

和田氏は雜誌『マルクス主義』大正十五年十一月號に於て僕の『地價政策の批判』を批判されてゐるが、之に駁論する必要を痛感するので此の一文を草する。

氏に據れば、僕の『地價政策の批判』は徹頭徹尾氏等によつて克服されたる組合主義者の見地たる經濟的曝露の範圍を一步も出てゐない。故に僕は『組合主義者』『經濟主義者』従つてまた改良主義者であるといふのである。而して其の論證として掲げられてゐる所は僕の問題把握の態度が組合主義的であり、政府の自作農制定は地價鈞上げ策ではなく、政府の『經濟的讓歩』であり、地價下落の原因は單に小作爭議のみにあるのではなく、中小地主の没落並びに地主の債券所有者その他の資本家への轉化による賣地供給の過多が寧ろ主要な原因である。而して没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には地主と農工銀行との經濟的擁護の如きは、決して農民問題に關する第一の關心事であり得ないのであらうと述べられてゐる。

こゝに問題となるのは僕が下落し行く地價の鈞上策として、政府が自作農制定を思ひ付き、小作法

小作爭議調停法、小作組合法を實施しまた實施せんとしてゐることを曝露したことが果して經濟主義日和見主義であるか何うかといふ點である。

それに就て先づ第一に擧ぐべきは、現在の資本階級及び地主が民衆を支配し得るのは、その政治的欺瞞と同時に經濟的搾取であるといふことを常に失念してはならないことである。

第二には地主と資本階級は現在政治的に完全に提携して労働者及び小作人に對抗してゐるといふことである。その尤も具體的な現はれは治安維持法である。之はまた資本階級の地主に對する經濟的讓歩をも齎らしてゐる。穀物關稅の値上はその一例である。

第三には地主と資本階級とは經濟的にも融合してゐることである。之は即ち地主が土地を抵當に農工銀行から金を借り出し、土地が銀行の抵當に入つてゐるといふことによつて證據立てられる。故に經濟的にも資本階級と地主とは共通の利害に立つてゐるのである。

第四には『我國の資本主義』は『後進』ではあるが、今や資本主義の没落期に合流しつつある』にはあるが、爲替の安定、資本の攻勢、労働者、農民の貧困化に依つて一時的『安定』を保ちつつあることも事實である。

第五には日本の労働階級及び農民の小數者が漸く労働黨の組織に着手した許りで、大多數の民衆は『經濟的曝露』にすら充分に熱情を喚起されてないことも事實である。之は札幌の市議戰の場合に、評議員がストライキに夢中になつてゐて、本部の指令があるまで市議戰の方を全然手を付けないで無

關心でゐたといふ事實、組合に組織された労働者、農民が甚だ少數であるといふ事實に據つても、我國の労働階級及農民の政治的水準が如何に低いか且つ又「經濟的曝露」にすら充分の熱情を喚起されてゐないかと實證出来る。

第六に日本の労働階級及び農民は政治的闘争の傳統と經驗が殆ど皆無であり、漸く之から政治的闘争の門出をしやうといふ所であることも事實である。

「斯かる情勢の下に於て民衆を（こゝでは特に農民を）如何にして全階級的任務の遂行者にまで引上げて來るかといふことが重要な問題になつて來るのである。和田氏は簡單に「政治的曝露」と言下に答へられてゐる。而して氏の政治的曝露とは没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農工銀行の經濟的擁護の如きは農民問題に關する第一の關心事であり得ないのであらうと簡單に片付けて仕舞ふことである。然し前述の如き情勢の下にある日本の農民に對して和田氏が「この自作農創定、小作爭議調停法、小作法、小作組合法は支配階級が諸君を政治的に欺瞞せんとして諸君に贈られた經濟的讓歩である」と宣傳して歩いたとしたら如何なる結果を生むであらう。夫は和田氏の如き唯物辯證法的把握の域にまで到達してゐない農民の大多數に向つて政府の有難さを知らせ、和田氏自身政府の而して支配階級の提灯を持つことに至る矛盾を生じるではないか。支配階級が唯物辯證法の把握者によつて自己の提携者を見出すといふ悲劇を生じるではないか。何となれば農民は一厘二厘の損得で支配階級にも行けば、また無産階級の味方にもなることを考へれば、農民に向つて和田氏が、支

配階級は諸君に向つて政治的に僞瞞する代價として金三百萬圓を提供し、小作法其他を作るのであると看破し大音聲に呼ばはれば、農民は決して和田氏の味方にはならず、却て支配階級の方に向つて走り去つて仕舞ふ。之は確かに悲劇には違ひない。之を實證するものとして僕は斯ういふ事實を和田氏にお知らせする。三重縣の農民組合で肥料を買つた白髮の老組合員の田がその肥料の影響で稻が非常に好く實つたものである。するとその部落の小作人のみならず自作農さへもが、農民組合に入る衝動に驅られた。而してその主旨は支配階級の指導する信用組合から肥料を買うと一錢の利子を取られるが、農民組合なら八厘の利子で買へるといふ點であつた。之は一體何を意味するだらうか。僅か二厘の差で自作農さへもが無産階級の味方になることではないのか。斯うした農民に向つて和田氏が政府は諸君に「經濟的讓歩」をするものであると唯物辯證法で説明することは、唯物辯證法を農民大衆から分離せしめ、唯物辯證法は農民を獲得することが出來ないではないか。之は唯物辯證法の把握ではなく、鵜呑みであつて、呑み込むものが餘りに大きい爲め却つて四苦八苦目を白黒させて譯の判らぬタワ言をいふのと何等變りがない。

若し唯物辯證法の見地から農民を全階級的任務の遂行者にまで引上げて來んとすれば、既述のやうな情勢の下に於ては現在では、單一無産政黨の組織、議會解散請願運動、耕作權の確立、立毛差押へ立入り禁止、團結權の確立、小作料の減額等々の日常生活に於て農民が持つ熾烈な要求を捉へて農民を組合に組織し、政黨に組織し、闘争團體の結成と政治的アヂテーションを行なはなければならぬ。

のである。然るに農民が咽喉から手が出さうな問題である土地（自作農創定）耕作權（小作法）等に對して之は政府が諸君等を政治的に欺瞞する代償として政府が送る經濟的讓歩であると政治的アヂテーションを和田氏が農民に向つて行はるゝとすれば、夫は農民を組合に組織することもなく、政治的に組織することもなく、また夫は全階級的任務を遂行する闘争團體を結成し、全無産階級的任務の政治的アヂテーションを行ふことでもない。夫は却つて反對の結果を齎らし、所謂「左翼小兒病」患者となつて、支配階級の無意識的協力者になるのである。

此の故に當面の問題として自作農創定、小作爭議調停法、小作法、小作組合法等の正體を曝露する方法は、和田氏の如く之等全ては政府の政治的欺瞞の爲の「經濟的讓歩」であると宣傳することではなくして、之等全ては地主が小作人を一層搾取することを擁護する政府の地主擁護策であると曝露する方が、農民には判り好いし農民の利益を擁護することにもなり、且つ之を政府の「經濟的讓歩」と農民を欺瞞する結果に立至らないのである。和田氏は農民に之等全ての政府の政策を「經濟的讓歩」と宣傳されるが、僕は斯ういふ「之は地主を擁護する政府の經濟的搾取の政策である」と、之は事實僕が正しくとも和田氏は決して正しくないものである。然して斯かる曝露をすることによつて政府に欺瞞されんとする農民を救ひ、其の政治的視野を擴めることにもなるのである。そして夫は次に農民の政治的闘争への發展を刺戟する動因にもなり得るのである。何となれば農民は政府が地主を擁護して農民の搾取を増加させんとすることを自覺することによつてブルジョア政黨に失望し、新興の單一無

産政黨へ引き付けられるからである。この故に「地主を擁護する政府」の正體を曝露することは、農民を全無産階級的任務を遂行する政黨として生れた單一無産政黨へ引き付ける有力なる鍵である。この鍵を忘れて和田氏の如く「農民に經濟的讓歩をする政府」を曝露することは、反對に農民をブルジョア政黨へ引渡し、ブルジョア政黨の有難さを暗示することである。そして農民は和田氏に云ふであらう「どうも有難う、貴君が唯物辯證法で御證明下さつた所に間違ひがなければ、私は喜んで政府の經濟的讓歩をお受け致します」と。何となれば農民は無産政黨でもブルジョア政黨でも何ちらでも自分の利益の方に附くからである。ブルジョア政黨が反動であらうと、無産政黨が進歩的であらうと、利益のある方へ農民は附くのである。之は外國の例を採るまでもなく、次の一事は之を實證するであらう。盛岡は原敬崇拜の土地で有名であるが、此處の小作人が小作爭議をやつた結果、政友會を脱黨して勞農黨に入黨したといふ事實は僕の斷言を裏書きする有力なる材料であらう。此の故に和田氏の如く現在に於て政府の「經濟的讓歩」を農民に宣傳することは農民を政治的に覺醒することではなく政治的に欺瞞することであり、「地主を擁護する政府」を曝露することが眞の政治的曝露であり、農民に政治的アヂテーションをやり、全階級的任務を遂行する闘争團體への結成を促すことになるのである。茲に於て和田氏の北浦氏「地價政策の批判」の批判は完全に其のブルジョアの本質と左翼小兒病偏見を曝露したから、和田氏の批評の駁論に移らう。

## 地價算定方法

僕が地價の算定方法をブルジョア的見解たる需給關係に立たず階級的對立から之をなしたるを以て和田氏はその亂暴さと大膽さに驚ろいて居らるゝが、之は農民には餘りに知れ渡つた事實なので餘り説明も加へなかつた譯である。即ち價地を

小作料 + 土地利子 = 地價

と斷定したる所以は、現在は資本主義制度であるが故に、資本は何れの方面にも自由に流動することが出る結果、工業に投下する資本も、商業に投下する資本も、農業に投下する資本も、全て同額の利子を要求する。夫は例へば農業に投下した資本の利子が減少し、工業の利子が割好くなれば、その資本は農業から工業に移動するので、農業は縮小し農産物が減少して騰貴するから、農業へ投下した資本の利子が再び増加し、其の反對に農産物の騰貴は賃銀の騰貴を齎らして工業の利子は減少するので茲に再び多かれ少かれ資本の移動が行はれ、再び農業と工業の利子は平均するに至るのである。此の結果はその國の政治的、經濟的、歴史的條件に應じて各國夫々の平均利子を有するに至つたのである之は事實である。だから一反から四十圓の小作料が取れるとなれば、此の四十圓を取るには幾何の資本があれば好いかといふことになる。百圓に就き平均利子が五圓とすれば、四十圓の利子を取るには八百圓必要となる譯である。だから土地を手離す者は今迄通りの利子を受取る爲には八百圓を必要

とするのである。茲に於て四十圓の小作料の取れる土地の價格は平均利子五歩の場合には八百圓となる譯である。然らば何故小作料を地價の因數にしたかといふに現在の階級對立の社會に於ては資本が勞働力を搾取して剩餘價値を作り出すのであり、且つ資本とは勞働力から剩餘價値を搾取するものを指すのであるから、土地が價格を持ち土地が資本の役割を演ずる以上、小作料の高低は資本化した土地の價格(資本としての)の高低になることは必然である。そして小作料が減少することは従つて(土地の價格としての)資本の勢力が減少し、延ひては資本夫れ自身の減少となるのである。何故ならば小作料とは資本階級が地主に對して私有財産尊重の見地から與へた剩餘價値の分配讓歩であるから、現在の主要勢力としての資本階級は株主に利子を配當するやうに地主に利子としての小作料を配當してゐるのである。この故に利子としての小作料の配當を受けてゐる地主所有の土地の價格を小作料で算定するのは最も正しい算定方法である。之は株券の價格が利子の増減によつて高低するのと同であるから、小作料としての利子の増減は従つて土地の價格の増減になるのである。此の階級對立の上になつた地價の算定方法を亂暴な大膽な斷定とされる和田氏は、然らば如何なる算定方法を探られるかといふに、地價下落は賣地供給の過多が主要な原因であるといふ全然ブルジョア的な地價の算定方法を探られてゐる。地價が若し賣買によつて決定されるなら、然らばその賣買は果して何を基礎としてなされるのであるか。資本は利潤を要求する。而して現制度に於ける土地の賣買は資本の受渡してある。小作料を基礎とせずして誰が土地を賣買するものか。誰が小作料を基礎とせずして資本の受渡

しをするものか。この故に地價を需給の關係で決定せられる和田氏は、俗惡なブルジョア的見解で農村の階級的對立を見られてゐることになる。そして實際は農村の階級的對立を隠蔽せんとしてをられる結果となつてゐる。我々は斯かる唯物辯證法の把持者から唯物辯證法を奪還することなしには正しい農村の階級對立の闘争の解決はなし得ないのである。

### 經濟的曝露必ずしも經濟主義ならず

次に和田氏は僕の所論の一部分である「地價釣上策としての自作農創定」を他より抽象して斷頭臺上にのせ、「經濟主義者」の宣告を與へてゐられるが、僕の首くゞり人である和田氏の論綱は餘りに貧弱である。和田氏は『氏の（北浦）の論究は、かくして、餘りにも明白に、吾々によつて已に、克服せられたる、かの組合主義者の見地——經濟的曝露の範圍——を一步たりとも出てゐないではないか』と威張つてをられるが、氏によると經濟的曝露即ち組合主義、而して經濟主義、日和見主義と斷定されてゐるが、氏は經濟主義の本質を知らないやうだ。而して「經濟主義者」とは「一圓に一錢」の増額運動の爲に全階級的任務の遂行を拒絶する者を指していふのであつて、經濟的曝露をする者、必ずしも經濟主義者ではないのである。レーニンは「何から始むべきか」（一九〇一年五月『イスクラ』第四號）の中で全階級的全國的政治新聞の必要を説いてゐる中で「我々は第一步を踏み出した、我々は勞働階級に『經濟的』（何と恐ろしき言葉ではないか——譯者）工場的曝露の熱情を湧き起させた、我々

々は更に進まなければならぬ。民衆の何程でも自覺した程の層の全てを政治的曝露の熱情に湧き起させなければならぬ」と述べてゐる。レーニンは茲では政治的曝露の必要を強調してゐるのであるが、それにも拘はらず「經濟的」工場的曝露を第一步の運動として之を是認し、之を「經濟主義」とは難詰してゐない。事實レーニン自身一八九五年十一月に書いた「トルントン工場の勞働者及勞働婦人に檄す」ピラの中で工場的曝露をやつてゐる。而して無自覺な大多數の勞働者及び農民を獲得するには第二步から始むべきでなく、第一步から始めざるべからざることを知らなければならぬ。而して和田氏の如く「經濟的曝露」をする者を捉まへて斷頭臺にのせ、『日和見主義』の宣告を與へられることは、第一步の運動を輕蔑し果ては第一步の運動を拋棄するといふ、彼の獨逸のルーテ・フィンヤ一派の如き左翼小兒病的ブルジョアの協力者となることであり、組合に於ける活動を拋棄するものである斯かる組合に於ける活動を拒絶する唯物辯證法の把握者は眞の唯物辯證法の把握者でなく、夫は徹頭徹尾排撃しなければならぬ『左翼小兒病患者』である。和田氏の所論、和田氏の問題の把握の仕方とは斯くて「一圓に一錢」の増額運動の爲に全階級的任務の遂行を拒絶する「經濟主義者」と、第二步の前提たる第一步の經濟的曝露とを區別し得ない。甚だ非辯證法的な問題の把握の仕方となり、果ては農村の階級對立を認めない『地價を需給關係に立つ』といふブルジョア的見解への降服とまで發展してゐる。

### 自作農創定、小作法並びに小作組合法の論破は 立派に政治的曝露である

然し和田氏が僕の「地價釣上げ策としての自作農創定」を「經濟主義者」の見地として難詰されてゐることは當つてゐない。政府が自作農創定を考案した眞意が何であるかを曝露することは少なくとも政治的曝露である。何となれば政府は自作農創定を「農業經營の安固、農村の健全なる發達、小作爭議の緩和（農相訓示）」と宣傳してゐる時、此の政府の政治的欺瞞を、夫は地主を擁護するに過ぎないものであると曝露することは、「一圓に一錢の」増額運動の爲に全階級的任務の遂行を拒絶することではなくして、「地主を擁護する政府」を農民の前に曝露することであり、夫は同時に農民が政府に失望を感じることである。この故に之は立派に政治的曝露の役割を演じ得るのである。然るに和田氏の如く「農民に經濟的讓歩をする政府」を農民の前に曝露することは農民を政治的に欺瞞することになるのである。即ち和田氏の如く政府は自作農創定を地主の搾取を多くする爲に考案したのではなく、農民を政治的に欺瞞せん爲に農民に經濟的讓歩をしたのであると斷定することは、「農業經營の安固、農村の健全なる發達、小作爭議の緩和」といふ農相の訓示を無産階級陣營内で演繹し支持してゐることになる。然し實際は自作農創定は經濟的讓歩ではなく、搾取の増大の手段であることは既に十月號で僕が論破した所である。茲に和田氏の杜撰なる論綱が曝露される。即ち和田氏は全然搾取なしの支

配階級の政治的欺瞞のみ想像されてゐる。然し支配階級が政治的欺瞞を行ふのは經濟的讓歩の爲ではなく、搾取を維持し發展させる爲である。此の故に和田氏は現在の社會の階級對立は搾取の上に立つといふ原則を失念してをられるのである。搾取を除外し、又は糊塗せんと努力する者は俗悪なブルジョア學者である和田氏は斯くして「唯物辯證法」の皮を被りたるブルジョアの代辯者と同等の水準に立つてをられる。

### シグザグの没落過程

最後に我々は和田氏の所謂「經濟的讓歩」の根據を衝かなければならない。和田氏が斯くも誤れる道に進まれたには現在の一般情勢に對する觀察の誤りが其の根據である。氏に據れば

一、我が資本主義は、「後進」ではあるが今や、世界資本主義の没落期に合流しつつある。  
一、没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農行銀行の經濟的擁護の如きは、決して農民問題に關する第一の關心事ではない。

一、この一般的情勢のために支配階級は農民に「經濟的讓歩」をするといふのである。  
然し氏は斯ういふことを忘れてをられる。没落期に合流しつつある世界資本主義が一時的に「安定」したことを、従つて我が資本主義も其の影響で一時的の「安定」を得てゐることを。即ち大正十三年十二月に三十八弗まで低落した爲替相場が最近は四十九弗臺まで回復し、來年の出超期には金解禁にま



で到達する状態であり、十二年の九月地震の時から十三年の末までに七億五千萬圓の輸入超過であつた外國貿易が十四年には二億八千九百萬圓の入超で輸出は十六億二千六百萬圓から二十億九千七百萬圓と二十八%の増加である。本年の入超は昨年より四五千萬減少との豫想さへある。而して大正九年の恐慌時代の入超三億八千七百萬と比較すると遙かに一億圓の入超減少であり、大正十一年の震災前に比較すると三千七百萬圓の増加である。而して貿易外收支概算は大正九年の三億一千七百萬圓の收入超過が、大正十二年には一億一千二百萬圓と激減したが震災の爲め此の點に大きな打撃があつたので貿易外收支概算は十三年には發表されなかつたら判らないが、十五年度の豫想では貿易外收入超過は二億七千萬圓見當であるから、現在の國債貸借は大正九年の恐慌以來の一時的安定を得るに至つたと見て差支なし。

工業もまた我國主要工業の紡績、食料品、金屬工業は恐慌前の最高潮時の生産高を凌駕し、化學工業は最高潮時の九四%まで回復して居る、交通運輸また最高潮時より發展してゐる。唯だ不況にあるのは鑛業と機械器具で鑛業は最高潮時の四五%、機械器具は五〇%である。斯くの如き工業の回復と國際貸借の退歩的「安定」とは、和田氏に據つて證明せらるゝ

一、我が資本主義は「後進」ではあるが今や、世界資本主義の没落期に合流しつゝある。

一、没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農行銀行の經濟的擁護の如きは、決して農民問題に關する第一關心事ではない

而して政府は「經濟的讓歩」として自作農創定を目論んだといふことゝは甚だ縁遠きものであることを思はしめる。勿論此の「安定」は労働階級の生活低下、農村の貧困、×××の搾取等によつてなされたことは論がない。だが少なくとも切迫せる形勢といふものは現在存在しない。意識的右翼による單一無産政黨の破壊、労働階級及び農民の政治的自覺の幼稚さ及び尨大な未組織大衆——と對立せる資本主義の一時的「安定」は、決して切迫せる形勢と稱さるべきものでなくして「平穩」な「灰色」な時期と稱さるべきものである。而して斯かる時期に於ては支配階級は何等の「經濟的讓歩」をもなす必要と事情に迫られてゐず、事實は反對にますゝ經濟的搾取をほしむゝにするのである。この故に和田氏の想像せらるゝ「切迫せる形勢に當面せる支配階級」と「經濟讓歩」とは、單なる左翼的な修辭であつて現在の實狀には當て筈まらないのである。

然し僕はアメリカ資本を除く世界資本主義が没落期に合流しつゝあることを否定するものではない事實現在日本の資本主義の「安定」も一時的のことであつて、此の「安定」は例へば死に瀕せる病人が一時健康らしく見へるあの「安定」であるが、然し夫れにも拘はらず現在の段階は一時的安定であることを否定することは出来ない。

## 結 論

斯かる時期に於ける運動は困難な忍耐強き意志を要する運動であり、左翼的な修辭學を弄する運動

であつてはならない。而して大衆を政治的に教育し、訓練し、闘争團體に組織する爲に全力を傾倒すべき時期である。和田氏の北油氏『地價政策の批判』の批判を駁論したのも要は左翼的な修辭學に心酔せず、勞農大衆を如何にすれば政治的にアヂテートし、訓練し、闘争團體に組織し得るかを考慮せられんことを促す爲である。我々にとつて必要なことは政治的闘争團體に大衆を組織する爲に如何なる方法で政治的アヂをし、訓練をするかといふことを見出すことである。

## 地價政策批判問題再論

僕が雑誌「マルクス主義」大正十五年十月號で「憲政會内閣の地價下落に對する對策」を發表したら、福本イストである和田氏が、早速「經濟主義者」の烙印を僕に押し下すつたので、僕は之に對して「地價政策の批判の辯護」を發表して、和田氏の論文を「ブルジョアの代辯」「左翼小兒病的」「偏見の産物」と駁論したら、今度は和田氏と舟橋氏と二人懸りで、「マルクス主義」一月號で、再び僕を經濟主義者、日和見主義者と念を押し下すつたので、僕は再び之にお禮を返さうと思つて、茲に筆を執ります。先づ和田氏からお相手します。

### 唯心的戰術

問題を明かにする爲に、僕は和田氏の引用された僕の文章を時々其の前後の全文を再び繰返しますが、之は和田氏によつて歪められた僕の文章を正しくする爲でありますから、讀者は此の點を諒として頂きたい。

和田氏は僕の次の言葉を引用されてゐる。

『前述の如き情勢の下にある日本の農民に對して和田氏が「この自作農創定、小作爭議調停法、小作

法、小作組合法は支配階級が諸君を政治的に欺瞞せんとして諸君に贈られた經濟的讓歩である」と宣傳して歩いたとしたら如何なる結果を生むであらう。夫は和田氏の如き唯物辯證法の把握の域にまで到達してゐない農民の大多數に向つて政府の有難さを知らせ、和田氏自身政府の而して支配階級の提灯を持つことに至る矛盾を生じるではないか。支配階級が唯物辯證法の把握者によつて自己の提携者を見出すといふ悲劇を生じるではないか。何となれば農民は一厘二厘の損得で支配階級にも行けばまた無産階級の味方にもなることを考へれば、農民に向つて和田氏が、支配階級は諸君に向つて政治的に欺瞞する代償として金三百萬圓を提供し、小作法其他を作るのであると看破し大音聲に呼ばれれば、農民は決して和田氏の味方にはならず却つて支配階級に走り去つて仕舞ふ」(雜誌「マルクス主義」十二月號二九—三〇頁)

だが「斯かる情勢の下に」といふ言葉の前には、僕は斯かる情勢を解剖してゐるのである。

【第一、現在の資本階級及び地主が民衆を支配し得るのは、その政治的欺瞞と同時に經濟的擄取であること。

第二、地主と資本階級は現在政治的に完全に提携して労働者及び小作人に對抗してゐるといふことである。その尤も具體的な現はれば治安維持法である。之は(この提携は)また資本階級の地主に對する經濟的讓歩をも齎らしてゐる。穀物關稅の値上はその一例である。

第三、地主と資本階級とは經濟的にも融合してゐる。之は即ち地主が土地を抵當に農工銀行から金を借り出し、土地が銀行の抵當に入つてゐるといふことによつて證據立てられる。故に經濟的にも資本階級と地主とは共通の利害に立つてゐる。

第四、「我國の資本主義は「後進」ではあるが、今や國際資本主義の没落期に合流しつゝある」にはあるが、爲替の安定、資本の攻勢、労働者、農民の貧困化(更には生産力の發展、植民地、半植民地に於ける日本資本主義の勢力増大……之を新たに加へる)によつて一時的「安定」を保ちつゝあることも事實である。

第五、日本の労働階級及び農民の少數者が漸く勞農黨の組織に着手した許りで、大多數の民衆は「經濟的曝露」にすら充分に熱情を喚起されてないことも事實である。之は札幌の市議戰の場合に、評議員がストライキに夢中になつてゐて、本部の指令のあるまで市議戰の方を全然手を付けないで無關心でゐたといふ事實、組合に組織された労働者、農民が甚だ少數であるといふ事實に據つても、我國の労働階級及農民の政治的水準が如何に低いか且つ又「經濟的曝露」にすら充分の熱情を喚起されてゐないかと實證出来る。

第六、日本の労働階級及び農民は政治的鬭争の傳統と經驗が殆ど皆無であり、漸く之から政治的鬭争の門出をしようといふ所であることも事實である』

僕は更に新たに之に「第七、組織労働者農民の分解作用は無産階級の勢力を弱めてゐる」ことを加へる。斯かる情勢の下に於て民衆を(こゝでは特に農民を)如何にして全階級的任務の遂行者にまで引き

上げて来るかといふことが重要な問題になつて来る。和田氏は簡単に「政治的曝露」と言下に答へられるが、氏の「政治的曝露」とは没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農工銀行の經濟的擁護の如きは農民問題に關する第一、關心事ではあり得ない、政府は農民に「經濟的讓歩」をして政治的欺瞞をすることを第一、關心事としてゐると曝露することであるが、然し前述の如き情勢では、夫は明かに政府が宣傳する「農村經營の安固、農村の健全なる發達、小作爭議の緩和」(農相訓示)を、其の儘受け入れて「唯物辯證法」で肯定するやうなものであると、僕は駁論したのである。

然るに和田氏は、僕の情勢の解剖を駁撃する能力がなく、且つ斯かる情勢に於て提出された戰術を、情勢との不可分離の連絡に於て見ることが出來ず、上述の如く戰術だけを拉し來つて

「氏は雜誌「マルクス主義」を理論的闘争及び基本的政治的曝露の機關とは解しないでひとへに、「政治的水準の極めて低い且つ「經濟的曝露」にすら充分の熱情を喚起されてゐない我國の勞働階級及農民、しかも「尨大な未組織大衆」に對する初步的宣傳雜誌と心得てゐられるものゝ如くである」

「雜誌「マルクス主義」は、かくして、從來如何に屢々多く、ブルジョアの代辯を勤め來つたことよ！そしてまた極左翼小兒病患者であつたことよ！」

と取済まして居られるが、和田氏は社會的政治的情勢と戰術とが切り離せない連絡を持つことを理解されないやうだ。

「戰術は諸階級間の勢力の嚴格に客觀的な評價の上に樹てらるべきである(レーニン)の、氏は戰術

問題を駁するに「戰術」問題だけで事が足りると考へられて居られる。だがそれは唯心論者にとつては敢て奇とするに足りない所で、

「……社會變革の過程は必然に(階級對立の社會に於ては)階級形成の過程であり、階級闘争の過程である」(福本氏「社會の構成 並に變革の過程」二一〇頁)

「生産力と生産關係の矛盾の發展は、必然にまた階級對立の發展従つて革命的階級の發展となる而してこの革命的階級之が社會變革の支持者であり、主體たるのであります」(同上二〇一頁)

といふ風に、生産力と生産關係の矛盾が發展すれば、革命的階級が發展し、社會變革の過程は必然に階級形成の過程だとされる——即ちマルクスの「階級それ自身」と「自己の爲の階級」とを區別し得ない福本イストにあつては、氏等の思考から獨立して、氏等の感覺から獨立して、氏等の外に實在する「諸階級間の勢力」の嚴格に客觀的な評價といふことは問題ではあり得ず、「生産力と生産關係の矛盾の發展」革命的的發展」といふ幼稚な算術が全部であるから、従つて「戰術」の問題は、雜誌「マルクス主義」を「初步的な宣傳雜誌」でないと斷言することゝなるのである。

だが和田氏にはお氣の毒だが、戰術問題は雜誌「マルクス主義」を「初步的宣傳雜誌」でないと斷言することでは解決しはしないのである。戰術問題は之と切り離せない連絡を持つ社會的政治的情勢とを論じてこそ解決し得るのである。蓋し「全ての實在を觀察する辯證的方法、辯證法的手段は、全ての現象を第一にその不可分離の連絡に於て、第二にその運動に於て見ることを要求する」(マルクスにと

つては辯證法は(鬭争に於ての發達は)最つ先に「生存」の法則であり、物質活動の法則であり、自然及び社會に於ける運動の法則であつた。思考過程(福本イズムの所謂考察の手續——筆者)はその表現である。故に思考の辯證法的方法、辯證法的手段は、それが自然の辯證法を把握し得ることによつて是非必要なのである』(「ブハーリン」史的唯物主義の理論「七六頁」から)。

だが、和田氏には此のマルクス主義の基本たる唯物主義と、唯心論の區別が判らないやうだから序にお教へして置かう。

『事物から感覺と思考に行くのか？ 或ひは思考と感覺から事物に行くのか？ 第一、即ち唯物主義的方向はエンゲルスが把握した。第二、即ち唯心論的方向はマツハが把握した』(「レーニン」唯物主義と經驗批判主義「二七頁」)

例を以て示せば、感覺と思考たる「雜誌」から運動に行くのか？ 運動から感覺と思考たる「雜誌」に行くのか？ である。和田氏は感覺と思考たる「雜誌」から運動に行き、僕は運動から感覺と思考たる雜誌に行くのである。だから和田氏はマツハ主義者に従つて唯心論者であり、僕は唯物論者である。だから和田氏の如く、氏と僕との論争の「問題」を

先づ政府の自作農制定の眞意如何。

次に所謂經濟的曝露と政治的曝露との關係何、殊に政治的曝露とは抑も何ぞや。  
最後に、そしてお添物として、地價算定の方法如何。

と斷定されることは木を見て森を見ざる短見であることを免れない。

和田氏は若し之等の點に就て僕と論争せんと欲するならば、先づ社會的政治的狀勢に就て僕を駁し、然る後之と不可分離的の連絡にある戰術を論すべきである。

### 「ウエツヒ」主義

だが、氏は斯かる社會的政治的狀勢を論究する能力がなくてか、又は厭はれてか、僕が「最後に吾々は和田氏の所謂「經濟的讓歩」の根據を衝かなければならない。和田氏が斯くも誤れる道に進まれたには現在の一般的情勢に對する觀察の誤りが其の根據である」

といふ意味で述べてある個所だけを、即ち僕が最初に引用した社會的政治的情勢の解剖を認識せずして和田氏の誤謬に就て語つてゐる個所だけを拉し來つて

『氏は(北浦を指す)直接自作農制定の問題に關しては、氏の所論の最後の論據を提出されるために、新たに所謂經濟過程の分析にまで下向せられ

「没落期に合流しつゝある世界資本主義が一時的に「安定」したこと、従つて我が資本主義も其の影響で一時的の「安定」を得てゐること」

を發見せられ

『この安定は、政府は「經濟的讓歩」として自作農制定を目論んだと云ふことゝは甚だ縁遠きものであ

ることを思は』れかくしてかゝる段階に於ける階級對立關係を次の如く規定されてゐる。

『意識的右翼による單一政黨の破壊、労働階級及び農民の政治的自覺の幼稚さ及び尨大な未組織大衆——と對立せる資本主義の一次的「安定」は、決して切迫せる形勢と稱さるべきものではなくして「平穩な灰色な時期と稱さるべきものである。そして斯かる時期に於ては支配階級は何らの「經濟的讓歩」をもなす必要と事情に迫られてゐず、事實は反對にますます「經濟的搾取をほしむ」にするのである』かくて氏は、私の「農民を獲得せんとする遠大の政治的階級の理想から割出されたもの（小農に對する經濟的讓歩）であらう」となす推論を、消極的にはあるが、一應、駁し得たが如くである』（雜誌「マルクス主義」二月號一二頁）

とされてゐるが、之程無茶な論駁があるであらうか。即ち僕が和田氏が定義した

『一、我が資本主義は「後進」ではあるが今や世界資本主義の没落期に合流しつつある

一、没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農工銀行の經濟的擁護の如きは、決して農民問題に關する第一の關心事ではない。

一、この一般的情勢のためには支配階級は農民に「經濟的讓歩」をする』

といふことを駁して、自作農創定を「經濟的讓歩」と認識することの誤謬を指摘してゐる時突然「かゝる段階に於ける階級對立關係を規定」する問題を持ち出されることは、甚だしき暴言である讀者も知らるゝ通り、僕は社會的政治的狀勢に就ては、別に論じてゐるのである。そして和田氏が引用され

た個所では

『一、我が資本主義は「後進」ではあるが、今や世界資本主義の没落期に合流しつつある

一、没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農工銀行の經濟的擁護の如きは、決して農民問題に關する第一の關心事ではない』

といふ和田氏の定義を駁してゐるのであつて、茲では「階級對立關係」の規定は主要な問題になつてはゐないのである。

然るに和田氏は之を駁することに努力せずして突然「階級對立關係」の規定に問題を逸らせやうとすることは、明かに自己の無能を曝露したものである。

而して此の無能と不正直さは、直ちに氏自身によつて曝露されてゐる。

『なるほど「資本主義の一次的安定は決して切迫せる形勢と稱さるべきものではなく』これは正し』。（同上）

と和田氏は述べてゐるが、氏は「北浦氏「地價政策の批判」の批判」に於ては

『没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農工銀行の經濟的擁護の如きは、決して農民問題に關する第一の關心事であり得ないであらう』（雜誌「マルクス主義」十一月號一〇二頁）

と斷言してゐるのである。然るに自己の言葉に責任を持たれない和田氏は何喰はぬ顔をして『なるほど「資本主義の一次的安定は決して切迫せる形勢と稱さるべきものではなく』これは正し』と取濟

ましてをられるのである。斯かる不正直さが階級運動に於て許されるなれば、無産階級運動の道德もまた議會主義的の道德でしかあり得ないことになる。即ちブル政黨者流の如く、二枚舌も三枚舌も使ふことになる。斯かる不道德は排斥されなければならない。

斯かる不正直さを曝露せる和田氏は更に進んで、我國資本主義現段階の全過程の規定とやらをされてゐるが、之は問題を逸らした和田氏が讀者を愈々迷路に導き入れる所のものである。

「思ふに我國資本主義現段階の全過程の規定は、吾々の對立物……結成したる組合主義、折衷主義に對する吾々の最後の論據を形成すべきものである」この分析究明（全モメント……經驗的現實主義力説論者、追隨主義者、所謂左翼中間派、折衷主義者……の、しかも今や始めて自らを意識したる全モメントの抗争が赤熱しつゝある吾が無産者階級運動今日の發展段階を正確に分析究明すること）を通じてのみ、吾々はこゝに、今日以後發展するであらうところの、眞に複雑にして意識的な闘争の全戦線への、吾々の現實的全面的な進出の眞實の道を理解し、規定し、準備し得る」（北條一雄「勞農黨と所謂左翼進出」）であり、この對立闘争を通じてしむ戰闘的唯物論は戦ひとられ得るのだから。

即ち北條氏及び和田氏等にとりては、現段階の對立物は組合主義、折衷主義と對立した「戰闘的唯物論」である。そして之を分析究明することが、吾國資本主義現段階の全過程の規定となるのである。

之は福本氏が「諸主義との闘争を吾々は當分理論闘争に局限する」と定義されてゐることと相俟つて、問題を甚だしく明白にして呉れる。即ち福本イストにあつては、現在では「資本」と「勞働」との對

立は、全然認識の外に實在する所のものであり、氏等の認識は、組合主義、折衷主義と「闘争的唯物論」との對立から生ずる「理論闘争」が全部なのである。そして「資本」と「勞働」との闘争は、氏等の思考から獨立して、氏等の感覺から獨立して、氏等の外に實在する所のものである。而して氏等の思考から獨立して、氏等の感覺から獨立して、氏等の外に實在する「資本」と「勞働」又は「地主」と「小作人」の闘争は全て自然成長性であり、之を反映する者は全て組合主義者、折衷主義者である。而して氏等は誇らげて叫ばれる。

『吾々の見る所によれば、勞働者階級が、其の参加によつてもつて、始めて眞實の全無産階級の意識を汲みとりうる所の、かの××的智識階級の意識は、其の許されたる、より廣汎なる生活過程——（しかり、それは、より廣汎なる生活過程である。蓋し、勞働者階級が、本來、主として許されたる生活過程は、所謂物質的生産の過程なるに反し、此の階級は、所謂政治過程、意識過程を廣汎に生活する。たゞにそれのみならず、一定條件の下には、物質的生産過程に接近して——直接は入り込むのではないが——之をも批判するの生活要求を持ちうるのであるから、その批判の領域は全生活過程に及ぶと云へやう）……』（福本氏「理論闘争」二四二—二四三頁）

即ち勞働者階級は物質的生産の過程しか許されてゐないから、××的知識階級が之に参加して始めて、勞働階級は眞實の無産階級の意識を汲み得るのであるといふのである。

之は恰かもレーニンが「何を爲すべきか？」で述べた言葉と甚だ似てゐる。即ちレーニンは「吾々は

労働者には社會民主主義的自覺はあり得ないと言つた。それは外からのみ持ち込まれ得るのである。……社會主義の學説は教養ある有産階級の代表者、インテリゲンチヤが作り上げた所の哲學的、歴史的、經濟的理論から成長したものである。現代の科學的社會主義の建設者たるマルクス、エンゲルス自身その社會的地位はブルジョア、インテリゲンチヤに屬してゐた」と言つてゐる。

だが事實の根本を理解しないで、同じ言葉を繰返すことは許されない。この同じレーニンは一九一〇年十二月二十三日「星」第二號の紙上に於て

「斯くて過ぎ去つた三年のエボツクは一九〇七年の夏に終る所の偶然ではなく必然的にマルクス主義に於て戰術問題と名づけられた所の問題を先頭に掲げたのであつた。恰かも之等の問題から生じた論争と分離が「インテリゲンチヤ的」論争であり、「無自覺なプロレタリアートへの影響の爲の闘争」であり「インテリゲンチヤのプロレタリアートへの適應」の表現であると、全ての種類のウエツヒ主義者が考へる如く思惟すること位誤れるものはない。それは却つて此の階級（プロレタリア階級のことである——筆者）が事實成熟し、ロシアの全資本主義的發展の二つの違つた傾向の衝突に無關心であることが出来なくなり、此の階級の思想家が、これらの違つた傾向に相應した（直接的又は間接的、直射的又は反射的反映）理論的公式を與へずにはゐられなかつたからである」（レーニン「マルクス主義の歴史的發展の二三の特性に就て」）

と述べてゐる。故にレーニンの「何を爲すべきか？」を恰かも「インテリゲンチヤ的」論争であり、「無

自覺なプロレタリアートへの影響の爲の闘争」であり「インテリゲンチヤのプロレタリアートへの適應」であると、考へる福本氏は、ストルーベ、ブルガコフ、ベルヂヤエワ、イズゴエワ等の『ウエツヒ』主義者、従つて又反動的な神祕主義者と同様である。

だが「何を爲すべきか？」は、プロレタリア階級が事實成熟し、ロシアの全資本主義的發展の二つの違つた傾向の衝突に無關心であることが出来なくなつたことを、レーニンが直接的又は間接的直射的又は反射的に反映し、これらの違つた傾向に相應して理論的公式を與へたものである。

この故に福本氏等が「吾々は闘争を當分理論闘争に局限する」と言ひ

『山川氏は第一に——「經濟的闘争によつてはぐまらるゝ階級意識」が如何にして、眞實の無産階級政治意識、即ち社會主義的政治意識にまで轉化發展せしめらるゝか？ の轉化發展の過程にはいかなる中間關節を要するかの問題を把握せられないではないか？』（福本氏「理論闘争」四四—四五頁）

とて理論闘争のみ「氏等の思考から獨立して、氏等の感覺から獨立して、氏等の外に實在する」吾が國無産階級とは、何等の關係なしに高唱され「吾國資本主義の段階」に於て對立物は組合主義、折衷主義と「戰闘的唯物論」のみとされることは、明白にレーニンの攻撃した反動的な神祕主義でなくして何ぞやだ。



## 資本主義の解剖

レーニンの「何を爲すべきか」を、反動的神祕主義的に推論し、「戦術」を情勢と切り離して論じられた福本イストたる和田氏は、氏等の所謂「折衷主義者」「組合主義者」等の「吾國資本主義の解剖」に刺戟されて、此の研究を「組合主義、折衷主義對戰闘的唯物論」なる對立物との關係連絡に於て批判されてゐる。折衷主義「吾國資本主義の研究」對戰闘的唯物論「吾國資本主義の研究」の批判。之が福本イストの媒介性即ち辯證法である。

僕が「アンチ福本イズム」に於て、福本イズムは「意識過程を物質過程から分離し、何等具體性に該當しない所の二三の方法によつて、辯證法を特に思考構成にのみ變化させやうと試みる」ものだとしたのは、斯かることを指したのである。

和田氏が引用されてゐる淺野氏の『所謂「現段階」の分析について』に據れば、

『かゝる安定はなほ保たれてゐる』それは正しい。併し乍ら、問題は、寧ろ、かゝる安定が恢復しつゝあるのか、將又それが消滅しつゝあるのか、にある』

かゝる安定の「故に、資本の現實運動の諸形態は加速度的に發達しつゝある」のであらうか、否。安定の恢復と消滅の波動を通じてのみそれは常に愈々加速度的に發達——それ故に亦没落——しつゝあるのではないか。』

「かくて之等の數字は、所謂安定の存在よりも、より多く危機の可能を論證する」

「國家資本主義トラストへの成熟、農村に於ける階級分化過程の進行と、世界資本主義の強き没落過程」

次に無産者新聞の林二郎氏は云ふ

『私は以下、日本資本主義の最近に於ける諸展開が、如何に著しく右の國家資本トラストの方向に向つて進みつゝあるかを曝露するであらう。』

『ブルジョア諸組織體中の一組織體として閥族、官僚の經濟的搾取機關であつた傳統的國家資本は、今や、前述したカルテル、トラストの中心的王位に坐し、金融資本のシンヂケートを完全に抱合することによつて、國家資本主義トラストなる獨裁的資本寡頭政治を作り出したのである。それは第五十一議會に至つて、露骨なる保護關稅政策を採用するや遂に完全にその正體を吾等の前に曝露した』

果して然らば、吾國資本主義の現段階を、北浦氏の如く、ひとへに、所謂「一時的安定」を中心に「平穩」な「灰色」な時期と規定することは、過程的、全體的辯證法的考察に全然背馳するものでなければならぬ（雜誌「マルクス主義」一月號）

即ち福本イストに據れば、世界資本主義は強き没落過程を辿り、従つて國家資本主義の段階に到達した我國の資本主義は強烈なる消滅を過程しつゝあるから、農村に經濟的讓歩をなすことによつて、國家資本主義の忠實なる肉を農民大衆の間に製造せんとするものとして、自作農創定をなし「經濟的

讓歩』をなしたのである。然るに北浦は之を認識することが出来なかつたから、過程的、全體的辯證法的考察に背馳したといふのである。

だが、我々は和田氏の如く「マルクス主義」「無産者新聞」に書かれた文字を、實在の資本主義その者として、之を過程的、全體的辯證法的に考察することの代りに、「マルクス主義」「無産者新聞」に反映された實在の資本主義を観察するに、辯證法的方法を用ひて見やう。

で、我々は資本主義なる現象を、第一にその不可分の連絡に於て、第二にその運動に於て見やう。『以上に於て吾々は、資本主義安定に就ての舊來の「概括的な問題把握は不満足、または正しくは不十分であることを知る。現在の國際經濟は條件づきの意味に於ての具體的な單一である。若し戦前の時代に於て、國際經濟の異なる部分の連絡が、何れかの國內の個々の構成部分の連絡よりも弱かつたとするなれば、戦争の結果として戦後に於ては此の連絡は一層弱くなつた。この故に國際經濟全體に關する所謂「一般的法論」は矢張り戦前よりも一層條件づきなものである。例へばドイツの資本主義關係の發達の指數と、支那の資本主義關係没落の指數とを簡單に合計して、算術的平均を抽出することは、極く僅かのことしか語らず、之を基礎として鬭争的労働者黨の實行的結論を樹てることは何うしても不可である。この例は著しい程度に一般化することが出来る。斯くして結論は「現在では資本主義安定に就ての問題把握は、「概括的」ではなく分解的、でなければならぬ。……國際經濟の限界は、例へば各國を六つのグループに區別しなければならぬ。第一、資本主義經濟が何れよりも鋭く曲線的向

上を示してゐる國——北米合衆國。茲へ部分的には日本、英國自治領等々が加はる。

第二、資本主義的國際經濟の異分子、最も鋭く、決定的にそして正常的に反資本主義的傾向の發達を示しつゝある要因、社會主義の發達しつゝある國——ソヴェット聯邦。

第三、最も明確に舊資本主義世界の没落を表明してゐる國——英國。

第四、ドイツ、フランス、イタリア——幾分づゝ違つて最も有効に資本主義安定を試み、戦後の危機から——それは不強固ではあるが——脱出した國。

第五、乞食的水準、半腐敗、時には歸農によつて部分的「安定」をした國——チエツク・スロバキヤ、奧國、ポーランドその他。

第六、深刻な革命的動搖を有するか、直接に市民戦を有するか、従つて資本主義安定に就ては何人にも語ることはない支那、印度支那等々。

勿論、各グループに於ても矢張凡ゆる一般化と同様完全に同様な發達はあり得ないし、このグループ別の分割も、完全に具體的な發達の實相を表現してはゐない。それにも拘はらず斯かる問題の把握は、最小限度に於ても實相に我々を著るしく接近せしめるし、茲から資本主義安定問題に就ての評價はなされなければならない（「ブハーリン「資本主義安定とプロレタリア革命」五〇頁）

また同じ著者は所謂資本主義安定の條件づき、一時的、不強固に就て語り、此の安定は「ウリトラ、インペリアリズム」（帝國主義國の協調）に行くのではなく、××××××××××に行くのだと云つてはゐる

るが、一時的安定を否定することによつて、此の結論を得たのではなく、之を見極めることによつて斯かる結論を得たのである。而して一時的安定の斯かる道行の一つとして、現在の資本主義の危機は過小生産と過小需要にあることを述べ、現在のブルジョアの前には、大衆の貧困化による内地市場の狹隘の結果、海外市場の問題が尖鋭な形を帯びて横はることを述べ、

「決して大衆の需要の満足ではなく、利潤の見地からその經濟を遂行してゐる資本主義的ブルジョアジーは、その自己の本領として内地の市場を増大させる爲に自分の利潤の一部を労働階級の賃銀に變化させはしない。彼は全然反對の道——プロレタリア大衆の賃銀の低下の手段によつて彼は海外市場獲得の一層猛烈な闘争を遂行する」と言つてゐる。

然らば、福本イストの如く、世界資本主義の強き没落過程を見られ、その一環としての我國資本主義が農村に「經濟的讓歩」をしようと見られるのは餘りに、實在としての資本主義を歪めて認識して居られることになる。之は水中に差入れた鉛筆が『歪んで』見えるのを、その儘鉛筆の實在として認識されるのと少しも相違はなく、夫は明かに「感覺から事物に行く」マツハ主義従つて唯心論的認識である。

「理論がその正當さを欲求すればするだけ、その理論は最も好く實在に相當してゐなければならぬ」だが福本イストの一般、殊には和田氏にはそれが無い。氏は單なる一勞作に過ぎない林氏の「國家資本主義トラスト」を引用して來て、閥族、官僚の經濟的擄取機關であつた傳統的國家資本が、金融資本と融合し、カルテル、トラストの中心的王位に坐したから、國家資本主義トラストなる獨裁的資本寡頭政治を作り出したのであると述べられ、それを實證するものとして保護關稅策の採用を擧げられてゐる。

だが國家資本主義は權力によつて維持される全生産の集中と獨占、全分配の集中と獨占を全國的支配的範圍に於て行ふことを要求する。勿論その社會的關係は之を支配する階級に應じて變化するが、兎に角斯かる條件が必要である。

然るに和田氏の引用されたる我國の資本主義は

一、製鐵産業の完全合同への進行、製毛トラストの進行、製紙カルテル、製粉合同、——かくて金融資本の産業支配の深化

二、公益事業（鐵道、電氣、瓦斯等）各法の改正——改正による國家の統制（鐵道を除く他は國家に管理されてゐない——筆者）、電力事業國有計畫——國有と民營統一の對立。金融制度調査——特殊銀行による普通銀行の統制。既成政黨の一部に重要産業、土地等の國有  
といふ傾向を現はしてゐるだけである。

『既に百萬長者によつて獨占が植ゑつけられ、切廻されるならば、政治的構成または何等かの他の「私有財産」には制肘されず、それは絶對的の不可抗力を以て社會生活の全面を貫いて行く。獨逸の經濟雜誌はフランスの收賄或ひはアメリカの政治的腐敗に比べて常にプロシア官僚の正直さを自己的讚美してゐるが、事實は……「國家官僚の不買収は、彼等の秘かな願望たるベレンシトラツスの温かい椅

子に注がれてゐることにある」……ウイリエルム二世のバレスチン行は、そしてこの旅行の直接的結果は——バグダット鐵道の建設。……エツヴェゲは一九一二年「金力政治と官僚」を書き、例へば、獨逸の官僚フェリケルの場合を曝露してゐるが、彼はカルテル委員會の一員であり、自己の勢力を之に消耗してゐたが、或る期間の後最大カルテル——鋼鐵カルテルの收入豊富な椅子の所有者であつた。」(レーニン「資本主義新段階としての帝國主義」金融資本と金融寡頭政治)

(註) ベレンシトラスはベルリンの街で、獨逸銀行のある所である。

とレーニンが述べてゐる如く、金融資本は官僚、國會の中にも勢力を張つて行くものである。だから金融資本にとつては「露骨なる保護關稅政策」の採用でも、製鐵合同案でも、公益事業各法の改正でも電力事業國有計畫案でも、金融制度調査でも、土地の國有案でも何でも「絶對的不可抗力を以て社會生活の全面を貫いて行く」のである。蓋しブルジョア代議士木下謙太郎は憲政會内閣を「三菱内閣」「岩崎内閣」と第五十一議會で吼えたではないか。此の我が國資本主義の帝國主義的本質の最も大きな一面を理解せずして、和田氏等が、「閥族、官僚の經濟的搾取機關であつた傳統的國家資本は、今や、前述したカルテル、トラストの中心的王位に坐し、金融資本のシンヂケートを完全に抱合することによつて、國家資本主義トラストなる獨裁的資本寡頭政治を作り出した」と、恰かも國家資本を擁した官僚、閥族からカルテル、トラスト、金融資本シンヂケートへ貫いて行つたが如く表現され、獨裁的資本寡頭政治を作り出されるが、之は明かに木を見て森を見ざる無能振りである。モツと科學的に言

へば、「水中に入れた鉛筆」を實在として認識されるやうなものである。それが如何に唯心論的であるか。又氏等が如何に徹頭徹尾の唯心論者であるかを今一度示したものである。而も和田氏は斯かる唯心論的な見解を以て誇らげに叫ばれる。

『かくてまた氏(北浦)は、かゝる段階に於ける有産者政治支配の現實性を把握し得られない』(雜誌「マルクス主義」一月號一六頁)

だが、狂人は健康者を狂人と呼ぶから、それも好からう。更に和田氏等は云はれる『集合資本家としての國家資本主義トラストにとつては、農村に之れ位の經濟的讓歩をなすことは何でもないことだ』と。

だが「資本主義の新段階としての帝國主義」の著者は我々が引用した同じ章で云つてゐる。

『金融資本にとつて殊により利潤的な事業は、急速に發達する大都市附近の土地の投機である。茲では銀行の獨占は交通機關の獨占と合流する。蓋し土地價格の向上と土地の部分的賣却の便宜の可能等々は、都市中心地との交通機關の便利さに最も多く懸つてゐる。そして之等の交通機關は、同じ銀行の取締役の地位の參與と分配の體系によつて結びついてゐる大會社の手に握られてゐる。……都會附近の土地の目まぐるしき投機、建築會社の破産、例へば一億マルクを有したベルリンの「ポスバウ・エントクナウエル」會社が「強固で強大な」獨逸銀行に破産さゝれたが如き、それは「參與」の體系で即ち秘かに背後から行動してゐたが、全部で一千二百萬マルクの損失をして、手を引いたのに因る。

——そして、膨脹した會社と「公明正大」なベルリン警察と役所からとつた土地所有の譲り渡し記録書と、市會で許可した家屋建築等々からは何物も得なかつた小所有者及労働者の壊敗等々」

即ち金融資本は小所有者及労働者の壊敗におかまひなしに土地を金儲けの道具に使ふのである。此の例は都市近接地の場合であるが、「農工銀行が抵當にとつた土地を抱へて四苦八苦してゐる」時三百万圓を政府に投ぜしめて「秋田縣の如く自作農創定の爲に地價が二分八厘方騰貴してゐる」(共に僕の言葉)なら、金融資本が政府をして「最近自作農創定維持の資金を増額」(和田氏の引例)せしめたのは當然である。

之をしも、「經濟的讓歩」と和田氏等が唱へられることは明白に「農業經營の安固、農村の健全なる發達、小作爭議の緩和」(農相訓示)を其の儘承認されることになる。蓋し政府が「經濟的讓歩」をしたものならば、農相のこの訓示は明かに正しいことになり、夫は政治的欺瞞ではなくなる。此の簡單な平凡なことが氏等には何うしても理解出來ないと見える。

そして和田氏はいはれる。

『かくて氏の消極的論據は、たゞに完全に失敗してゐるばかりでなく、進んで氏は、到る所、その俗學主義、經濟主義、を露呈せられるの悲劇に終つてゐる。』と。

### ゆがんだ認識

和田氏は、僕が氏等によつて歪められた經濟闘争を訂正する爲に、「經濟的曝露必ずしも經濟主義ならずの」一文を挿入して、氏の歪める認識を正さんとしたことが、甚だしくお氣に觸れたと見えて、妙な言ひ懸りをつけられる。

『無自覺な大多數の労働者及び農民を獲得するには第二步から始むべきでなく、第一步から始めざるべからざるを知らねばならぬ。而して和田氏の如く「經濟的曝露」をする者を捉まへて斷頭臺にのせ「日和見主義者」の宣告を與へらるゝことは、第一步の運動を輕蔑し果ては第一步の運動を抛棄するといふ彼の獨逸のルーテ・フィッシャー一派の如き左翼小兒病的ブルジョアの協力者となることであり、組合に於ける活動を抛棄するものである。和田氏の所論、和田氏の問題の把握の仕方は斯くて「一圓に一錢」の増額運動の爲に全階級的任務の遂行を拒絶する「經濟主義者」と第二步の前提たる第一步の經濟的曝露とを區別し得ない」(十二月號三六一—三七頁)

『然し和田氏が僕の「地價釣上げ策としての自作農創定」を「經濟主義者」の見地と非難されてゐることは當つてゐない。政府が自作農創定を考案した眞意が何であるかを曝露することは少なくとも政治的曝露である」(同上三七頁)

と僕が述べてゐるにも拘はらず、僕が如何にしてかゝる論議をなすことを得たかとして、その個所とは不可分離の連絡にあるのでは無い所の、社會政治情勢に就て論じてゐる個所の一個所だけを拔萃して來て、恰かも此の個所と結び付けたり、戰術に就て論じてゐる個所から一ヶ所を拔萃して來て、之

に結び付け、勝手に「寄せ木細工」をして、何うだでも「お前は經濟主義者でないのか」と詰め寄られることは、仲々お手際の好い手品師で氏はあられる。而もレーニンを思はして「經濟闘争を以て大衆を政治運動へ導き入れる最上の方法であると吹聴するものは經濟主義者に外ならない」と言はれるが、此のレーニンの引用は「何を爲すべきか」時代の言葉であることを知つてゐるが、既に明かにしたやうに、之等の全ては「プロレタリア階級が事實成熟し、ロシアの全資本主義的發達の二つの違つた傾向の衝突に無關心でゐることが出来なくなり、此の階級の思想家が、これらの違つた傾向に相應した理論的公式を與へずにはゐられなかつたからであり」(この二つの傾向を經濟主義とレーニン主義と早合點しないやうに——筆者)それは先づ何よりも先に戰術の問題を論じてゐるのである。

然らば經濟的曝露と政治的曝露の差異を論じてゐる時、二つの違つた資本主義的發達の傾向の衝突に無關心でゐられなくなつたプロレタリア階級を「經濟闘争を以て大衆を政治運動へ導き入れる最上の方法」と吹聴する經濟主義者に對して、レーニンが駁撃してゐる言葉を持つて來ても當らない。そして此のレーニンの言葉から、レーニンは經濟的曝露、經濟闘争を否定したものと考へられる和田氏に、一九〇六年二月の社會民主労働黨合同大會の戰術的プラットフォームを御紹介させよう。

「一、社會民主主義は常に經濟闘争をプロレタリアの階級闘争の一構成部分と承認してゐる。

二、經濟闘争を目的とした労働階級の最も好適な組織は、資本主義諸國の經驗が示すやうに、廣泛な労働組合である。

四、經濟闘争が労働大衆の地位の強固なる改善を齎らし、そしてその眞に階級的團體を強固にし得るのは、經濟闘争をプロレタリア政治闘争と正しく結び合せるといふ條件の下に於てのみ可能である」然るに和田氏の如くレーニンが經濟的曝露、經濟的闘争を否定したかの如く歪めるのは、明かにレーニンの假面を藉りて組合の活動否定といふ「左翼小兒病裏切者」の行動を採ることではないか。以て法學士和田氏いかんとす。

### 經濟闘争と政治闘争

「經濟闘争が労働大衆の地位の強固なる改善を齎らし、そしてその眞に階級的團體を強固にし得るのは、經濟闘争をプロレタリア政治闘争と正しく結び合せるといふ條件の下に於てのみ可能である」

といふことを和田氏は何うしても理解出來ず、淺薄な小ブルジョアの皮肉で之を誤魔化し去らんとし、

「没落過程、切迫せる形勢に當面せる支配階級には、地主と農工銀行との經濟的擁護の如きは、決して農民問題に關する第一の關心事であり得ないであらう」

「經濟的讓歩は、それによつて労働大衆の信頼を得やうと望んでゐる政府にとつては、明かに最も要價、且つ最も有利なものである。まして三百萬圓は……三千萬圓となり、三億圓となり、三十億圓となつて吹聴される」

と十一月に叫んだ和田氏が、一月には

「因に私は、政府は政治的欺瞞のためには経済的讓歩をも辭せないと云つたのである」

と嘘を云つてゐる。而して斯かる嘘と、僕の論文から前述の如く彼處から一片、此處から一片を寄せ集めて「寄せ木細工」を作り上げ

「氏がこゝに展開せられたる混亂はさて置き、氏をしてかゝることを云はしむる氏の理論的根據が、かの経済優位論にあることは、も早や、明かだ」

と云はれるが、僕の何れの論文に経済的優位論が存在するのか知らないが、氏が引用された

「現在の資本階級及び地主が民衆を支配し得るのは、その政治的欺瞞と同時に経済的搾取であると云ふことを常に失念してはならない」

「和田氏は全然搾取なしの支配階級の政治的欺瞞のみ想像されてゐる。然し支配階級が政治的欺瞞を行ふのは、経済的讓歩の爲ではなく、搾取を維持し發展させる爲である。此の故に和田氏は現在の社會の階級對立は搾取の上に立つと云ふ原則を失念してをられるのである。搾取を除外し、又は糊塗せんと努力する者は俗惡なブルジョア學者である」

の何處が経済優位論なのであらうか。然も和田氏は斯く讀者に思ひ込ませやうとして、甚だ骨を折られ、「経済的搾取である」の言葉の間へ（による）といふ言葉を挿入され、「経済的讓歩の爲ではなく」の下へ（因に私は、政府は政治的欺瞞のためには経済的讓歩をも辭せないと云つたのである）と嘘言

を挿入して居られる。そして得意げに

「政治は経済の集中した表現である……政治の経済に對する優位は無條件の通則として認定されねばならぬ。これに異論を唱へることは、マルクス主義のABCを忘れてゐることを意味する」

「階級の本質的利益は根本的政治的變形によつてのみ充され得る所である」

と和田氏は定義されてゐるが、

「経済はそれに相應した政治を生み、政治は自身の側からそれと同じ精神で経済に作用する」(プーリン)

「社會の構成は人間を外にしてなく、人間を通じて變化する。……生産關係は——亞麻又は麻布の如く人間の行動と闘争の産物である」(マルクス)

「新しい階級は新しい社會的經濟的構造の旗手でなければならぬ」(プーリン)

だから、和田氏の如く政治と経済の優位を論じることによつて、経済闘争を否定し去らんとすることは、明かに「左翼」的修辭にウキ身をやつす「左翼小兒病裏切者」でなくして何ぞや。だが之は政治闘争をも又理論闘争をも否定することを意味しない。要は理論的、政治的、経済的闘争の三つの全てを計畫的に、相互に結び合せ、相應し合せて遂行しなければならぬことを主張し、和田氏等の如く、理論的に闘争を局限したり、政治の優位を論ずることによつて経済闘争を否定し去らんとし、現在の状態の要求する活動から、大衆から逃げ去らんとする「福本イスト」「左翼小兒病裏切者」の誤謬を正

す爲に、此の一文を挿入したのである。之は再び和田氏が「寄せ木細工」の勞を取られない爲に一言附け加へて置く。そして

「大衆を政治的に教育し、訓練し、闘争團體に組織するために全力を傾倒すべき」今日「個人主義的共產主義」理論、「福本イズム」に全力を傾倒して、組合の分裂を奨励し、時期の要求しない左翼理論を弄んで、大衆から逃げ去らんとし、天にでなく地上に打ち樹てなければならぬ理論を、唯心論に變形させやうとする事は「左翼小兒病裏切者」の行爲であり「左翼的な修辭を弄する運動」である。而して和田氏等には「無自覺な大多數の労働者及び農民を獲得するには第二步から始むべきでなく、第一歩から始めざるべからざることを」を知ることが何うしても出來ず、自作農創定を「經濟的讓歩」だと詭辯を弄さずにはゐられないのである。そして「何を爲すべきか」の根本を理解せずして、そこから一片、此處から一片の「寄せ木細工」で、自己の「個人主義的共產主義」理論、「左翼小兒病」裏切者であることを粉飾せんとするのである。

だが繰返して引用するが、「何を爲すべきか」は

「プロレタリア階級が事實成熟し、ロシアに於ける全資本主義的發達の二つの違つた傾向の衝突に無關心でゐることが出來なくなり、此の階級の思想家が、これらの違つた傾向に相應した理論的公式を與へずにはゐられなかつたからである」

ことを忘れて、無産階級運動を「自然成長的」の一言で輕蔑し去り、労働階級の覇權を否定して之に

××的知識階級の覇權を置き換へることは、明白に「反動的」理論であり、反無産階級の理論である。

### 地價算定問題

和田氏に據れば「自作農創定は果して北浦氏の解せられる如く、地價釣上策、地主の土地賣逃げ助勢策としてブルジョア政府が考案し實施したものであるか否か。それには幾多の「經濟上」の疑問がある。

第一、三百萬圓は……僅か五百町歩の新たな有効需要を作り出すに過ぎない。

第二に、地價下落の原因は單に小作爭議のみにあるのではない。中小地主の没落、並びに地主の債券所有者その他の資本家への轉化による賣地供給の過多が寧ろ主要な原因である」(圈點は北浦)

と十一月には述べられてゐる。之は即ち自作農創定が「經濟的讓歩」であることの「經濟的」論據である。だが法學士和田氏の如何なる熱辯にも拘はらず、小作爭議の影響で地價が下落することは、農民組合に加盟してゐる本當の「小作人」に訊ねて見給へ。その小作人は斯かる實例を君に話して呉れるだらう。然るに氏の如く賣地供給の過多が、土地價格下落の寧ろ主要な原因であるとするのは、本末顛倒である。小作人が自覺せず舊來の如く、「地主様」の申出通り年貢を收めてゐるとしたならば、小地主の没落は考へ得られないではないか。(勿論茲では小地主没落に就て議論を發展させる必要はない)更に地價下落の寧ろ主要な原因は賣地供給の過多であることを和田氏は何によつて證明せんとするのであるか。土地價格にも、商品の需給關係が絶對的支配者であると想像されるのだらうか。資本論



第三卷第三十七章を読まれた筈の和田氏は、該文章の何處を讀んで斯う云はれるのだらうか。

「土地に對して餘剩價值の一部たる貨幣地代の比率を考へることは、それ自身、馬鹿々々しいことであり、不合理なことである。……實際斯様な比率は……土地所有者をして、馬鈴薯中の豚の如く平方呎の中を轉げ廻るところの資本によつて實現された一定量の不拂労働を掴み取ることを得せしめる、といふ一事以外には、何事をも言ひ現はすものでない」(マルクス「資本論」第三卷土地價格)

と和田氏の擧げられた章の中にあるが、土地の賣地供給過多の比率としての地價下落を考へられる和田氏は「土地に對して貨幣地代の比率を考へ」てゐる人ではないのか。そして夫は「——完全なる矛盾も何等不可思議なる點を有たないのである」(同上)

斯かる不合理な和田氏の理解に對して、僕が『この階級對立の上に立つた地價の算定方法を亂暴な大膽な斷定とされる和田氏は、然らば如何なる算定方法を探られるかといふに、地價下落は賣地供給の過多が主要な原因であるといふ全然ブルジョア的な地價の算定方法を探られてゐる』と非難したことに對して、

『私は、私の論文に於て、決して私の地價算定方法なるものを展開してはをらないのだ』

と辯明されるが、既述した如く、常に自分の言つた言葉に責任を持たれない和田氏の面目が茲にも躍如としてゐる。和田氏が僕の地價算定方法を批判するに當り、氏の算定方法を展開されなかつたことは、そして展開する能力のなかつたことは首肯出来るが、僕の地價算定方法の根據を顛す爲に賣地

供給過多<sup>II</sup>土地價格の下落を力説されたことは、夫自身土地對地價の算定方法を示してゐることではないのか。

そして和田氏は自己の算定方法を展開する能力の無いことを隠蔽する爲に、僕の論文に對する嘘言を展開されてゐる。

『一、現在は資本の自由なる流動が行はれる、資本主義制度である。(何と結構なマンチエスター主義の現在よ和田)』

一、農業は凡て資本主義的に營まれてゐる。

三、小作料は資本の利子である。

四、土地は資本である。

五、にも拘はらず『小作料とは資本階級が地主に對して私有財産尊重の見地から與へた餘剩價值の分配讓渡であるから(何と博仁な資本階級よ!……和田)現在の主要勢力としての資本階級は株主に利子を分配するやうに地主に利子としての小作料を配當してゐる』

だが之は和田氏が勝手に質造した僕の論文である。僕は、僕の定義である

小作料<sup>II</sup>資本利子<sup>II</sup>地價

を説明して、

一、現在は資本主義制度であるが故に、資本が何れの方面にも流動出来る結果、工業に投下する資

本も、商業に投下する資本も、全て同額の利子を要求する。と云つたのを、和田氏は

『一、現在は資本の自由なる流動が行はれる、資本主義制度である二、農業は凡て資本主義的に営まれてゐる三、小作料は資本の利子である四、土地は資本である』といふ風に質造し『小作料とは資本階級が地主に對して私有財産尊重の見地から與へた餘剩價値の分配讓歩であるから、現在の主要勢力たる資本階級は株主に利子を配當するやうに地主に利子としての小作料を配當してゐるのである』を理解せず、何と博仁な資本階級よ！と驚嘆してゐる。實際和田氏等は、農民より遙かに血の循環が悪いに相違ない。和田氏が鬼面人を脅す底に、資本論第三卷を引用されるが、農民より遙かに血の循環の悪い和田氏は、寧ろ資本論を読む資格が無い程に、自分の引用してゐる章を理解してはゐない。『本書ではたゞ、資本に依つて造り出された餘剩價値の一部を土地所有者の手に歸せしめるといふだけの意味での土地所有を研究するに止める』

とマルクスは資本論第三卷第三十七章の緒言の中で述べてゐるではないか。また

『資本制生産方法が農業をも征服したとする假定は、この生産方法が生産及びブルジョアの社會の凡ゆる部面を支配してゐること、隨つて又その條件たる、各資本間の自由競争、一つの生産部面から他の生産部面への資本移轉の可能、平均利潤の均等なる水準等諸種の事情が、十分に成熟してゐることを含む』

『資本制生産方法は總じて、労働者からの労働條件の收奪を前提するものであるが、同様に農業方面

に於ても、農業労働者から土地を收奪して、彼等をば利潤のために農業を営む資本家の下に隷屬せしめることを前提する。それ故、茲に述べる所のものとは異つた土地所有及び農業の形態が従前存在して居り又は今尙存在しつゝあるとの主張を持ち出すものがあるとしても、斯かる主張は、我々の説明にとつては全く關係する所がなす』

『資本制生産方法の要求に適合する土地所有形態は、資本制生産方法それ自ら、農業を資本の下に隷屬せしめることに依つて造り出すものである』

『資本制生産方法は、一方に、社會の最も未發達な部分が單に實驗の上から慣行し機械的に傳へて來た手續としての農業をば、總じて私有に伴ふ社會事情の内部に於て可能なる限り、農經營の意識的な科學的な應用としての農業に轉化せしめ、他方には又、土地所有をば主従關係から全く解放せしめると同時に、労働條件としての土地をば土地所有及び土地所有者（彼れから見れば、その所有地は、獨占に依つて産業資本家たる小作農業者から徵收する一定の貨幣租税以外の何物をも代表するものでない）から全く分離して、スコットランドに土地を所有する人がコンスタンノーブルで一生を送り得るといふやうになつてしまふ』

『この小作資本家は、斯かる特殊生産部面に自己の資本を充用することを許される代償として、契約を以て確定された貨幣額をば（恰も貨幣資本の借受者が一定の利子を支拂ふ如くに）一定の期限（例へば年々）に、彼れ自から利用する土地の所有者たる地主に支拂ふのである。この貨幣額こそ……地代

と稱せられる所のものである』

『一例として、中位的の利子が五パーセントであるとすれば、年二百磅といふ地代は、これを四千磅なる一資本の利子と見做し得る。斯様に資本化された地代こそ、土地の購買價格又は價值たるものである。……が他方にまた、この不合理なる形態の背後には、一つの現實的生產關係が伏在してゐる。若し或る資本家が年二百磅の地代を賣らす土地を四千磅で購買したとすれば、彼れはこの四千磅を以て年五パーセントといふ平均利子を得る譯である。これ、彼が同じ四千磅を利子附證券の購買に放下するか又は五パーセントの利子を以て直接これを他人に貸附ける場合と異なる所はない』

『實際の上では、小作農業者が土地耕作上の許可を得たに對し、小作料といふ形で土地所有者に支拂ふ一切のものが地代として現はれることは云ふ迄もない』

『小作料なるものの中に、平均利潤なり、通例の勞銀なり、又は此等兩者なりからの控除分が含まれることは可能である。小作料の一部は、斯様な控除物から成り得る。また場合によつては、その全部が斯かる控除分から成ることもあり得る。即ち嚴密な意味の地代が毫も存在することなく、隨つて土地が現實的に無價值である場合にも、小作料は存在し得るのである。利潤なり勞銀なりの斯様な部分は、この場合地代の姿を採つて現はれる。なぜならば、それは通例行はれる如く産業資本家又は賃銀勞働者の手に歸せずして、小作料といふ形で土地所有者の手に支拂はれるからである。經濟學上からいへば、それは何づれも地代を構成するものではない。然し實際上には、土地所有者の收入たるもの

であつて、彼の獨占の經濟的利用となることは現實的地代と何等異なる所はない。それは現實的地代と同じく、土地價格の上に決定的の影響を及ぼすものである。

我々はこの場合、資本制生産方法それ自身が存在することなく、小作業者自身が産業資本家であり又は彼れの經營方法が資本制的であることなくして、而も形式的に地代が存在し、資本制生産方法に照應した地代形態が存在するといふ事情に就て語らうとするものではない。斯様な事情は 아일랜드に見られる所である。アイルランド小作農業者は、概して小農民である。彼れが小作料として土地所有者に支拂ふ所のものは屢々、彼れの利潤（換言すれば、彼れが自己の勞働器具の所有者として當然占有すべき權利を有つてゐる彼れ自身の餘剩勞働）の一部を吸収するのみではなく、また異つた事情の下に於ては彼れが同一量の勞働について受けるであらう所の、標準賃銀の一部をも吸収するのである。しかのみならず、この場合土地の改良については何等なす所のない土地所有者が、大抵は小作農業者自身の勞働によつて土地に合體せしめられた小資本をも收奪してしまふことになる』

これら總ての引用は、和田氏の擧げられた資本論第三卷三十七章に展開されてゐるところである。このマルクスの展開された學說と僕の地價算定方法たる

#### 小作料 + 平均利子 = 地價

の何處が相違してゐるのだ。而も得意げに氏の擧げられた個所たる

『由來土地所有なるものは、……地代によつて購買さるべき利子率は、總じて他の長期に亘る投資に

於けるよりも低歩である』

の言葉の前には、

『地代そのものを以て、地代が土地購買者の目に映する所の利子形態と混同することは、地代の性質に關する全くの無知に立脚するものであるが、それは遂には、奇怪極まる誤魔化しの結論に達せしめねばならなくなる』

とあり、和田氏の引用された文句の後には

『この事實から、チエール君は、『所有』を取扱つた全く劣悪極まる述作の中で、地代は低歩であるとの結論を引いた。而も彼れの説く所は畢竟、地代の購買價格が高いことを論證したに過ぎないのである』とある。即ち和田氏はその劣悪極まる論文の中で地代は低歩であるとの結論を引いた。そして氏の説く所は畢竟、自作農創定は『經濟的讓歩』であるといふことを證明する爲に過ぎなかつた。

斯くして和田氏が、僕の論文を質造し、

「かくて氏の地價、地代論は、マルクス主義經濟學とは餘りにも縁遠い、俗學經濟學のものに過ぎない」

と罵倒されたことは、寧ろ僕が氏にノシを付けてお返ししなければならぬことになつた。そして『今いち／＼これを論證することは、恐らく讀者もこの煩にたへないであらう』

と自説の論證を避けられたことは、自己の恐るべき無知を隠蔽するに過ぎない遁辭であつた。

斯かる無學者が、高級な理論闘争の前衛雑誌『マルクス主義』に、時を得顔に蔓つてゐることは日本の運動の一つの弱點でなければならぬ。

そして之が『しかも相争ふ所は、既に左翼(?)の解決し得たる「經濟主義に對する理論的對立」に終始してゐる』のださうだが、和田氏等及氏等の理論が左翼なら、宇宙に左翼は存在しないだらう。たゞ夫は左翼的修辭に隠れた「左翼小兒病裏切者」「反動的唯心論者」「個人主義的共產主義者」以外の何者でもない。

### 舟橋氏の妄言

和田氏の微力を痛感してか、態々第三者の如き顔を装ほふて舟橋氏は、僕の論文を覆へさうとしてゐるが、之また和田氏と大同小異の「反動的唯心論」「左翼小兒病裏切者」の正體を臆面もなく晒け出してゐる。

『それは(北浦)氏が、資本主義没落の過程を、經濟的にしか把握してゐないからである。即ち政治的に把握して居られないからである』

『北浦氏の如く、單純に、地價の下落といふ經濟現象にのみその(自作農創定の)社會的根據を見出すことは、あまりにも狭いそして又片面的な見解である』

『後れて發達しつゝも世界資本主義の没落期に合流しつゝある吾國資本主義は、今や自分自身を國家

資本主義トラストにまで急速に發展せしめつゝある』

『所謂左右兩翼の對立鬭争は、従つて又理論鬭争は「所謂左翼をして、眞實に全無産階級的な政治行動主義の意識にまで成熟せしめつゝある」と共に、「所謂右翼をして組合主義としての到達點」即ち「フアシズムへの躍進」點にまで到達せしめた。

これが吾々の究明し得たる、自作農創定案制定の社會的根據である』

『まづ第一に、六百萬圓は……五百町歩の新たな有効需要を作り出すに過ぎない』

(この點に就ては、論駁することを忘れたが、この算術位幼稚なものはない。そして秋田縣その他で自作農創定によつて地價が昂騰した實踐は、この算術の非現實性を粉碎するものである。而して三百萬圓は、和田、舟橋兩氏が机上で考案した如く、ブルジョア代議士によつて三十億圓に吹聴されるのではなく、小農が此の三百萬圓の餌に釣られて、地主との鬭争を忘却し、二十四年間苦しい經營を續けて二進も三進も行かなくなり、地代が昂騰することを意味するのである——筆者)

『然らば氏は小作料を基礎とした地價以上の地價を何によつて説明しやうとされるのであるか?』

『三百萬圓の自作農創定費を以てしては、充分に地價釣上げの目的を達し得ないことは明かではなからうか』

(何とすばらしい實踐の不可知論者だらう!——北浦)

そして舟橋氏もまた政治鬭争と經濟鬭争の間違つた把握の結果から來る、僕の論文の贋造!

『北浦氏の如く、支配階級の政策は、すべて直接に、搾取を増大するためにのみ打ち立てられてゐると考へるのは、あまりにも「現在の社會の階級對立は搾取の上に立つといふ原則を失念して」居るに過ぎるからではあるまいか』(蓋し僕は搾取を増大するためにのみとは何處でも云つてゐない——筆者)

僕は「然し支配階級が政治的欺瞞を行ふのは經濟的讓歩の爲ではなく、搾取を維持し發展せしめる爲である」と云つたのである。

『「地主を擁護する政府」の正體を曝露することは、農民を全無産階級的任務を遂行する政黨として生れた單一無産政黨へ引き付ける有力な鍵である』と僕が述べたのを何うにかして、經濟主義に見せかけやうと苦心される舟橋氏は

『地主を直接(經濟的)に擁護する政府』と贋造し

『「どうも有難う。政府が若干の經濟的讓歩をして下さるのは結構ですが、私達はそのために、私達の政治的自由を賣り、又いつまでも搾取制度をつゞけさすことは眞平お断りします』といはすやうに、宣傳しなければならぬ』

と云つてゐるが、根本的な相違は茲にも現はれてゐる。即ち和田氏にしろ舟橋氏にしろ、實踐に於て自作農創定が地價を昂騰せしめてゐるにも拘らず、氏等にありては、徹頭徹尾それが『經濟的讓歩』と強調されることは、政府が『農業經營の安固、農村の健全なる發達、小作争議の緩和』の宣傳とし

てゐる所を即ち「經濟的讓歩」と宣傳してゐる所を其儘實在として認識してゐることである。

斯かる歪める認識、唯心論的な認識はそれが如何にマルクス主義的な言葉を使用しやうとも、徹頭徹尾「反動的唯心論」であり、夫が左翼的な修辭で被はれる時は、「左翼小兒病裏切者」となり、理論的な姿を取る時は「個人主義的共產主義」となるのである。そして其の何れも反動的であり、現在の無産階級運動の要求する物と背馳する所のものである。

斯かる反動的理論の横行を排撃することは今日のマルクス主義者の任務でなければならぬ。

## 神は微笑ませ給ふ

### マルクス主義のブルジョアの變革

#### 天も御照覽あれ

「理論闘争」の神、福本和夫氏は「若き學徒」北浦千太郎の「アンチ福本イズム」を「氏一個の意見にあらずして、氏と傾向を同じうする一派の人々を代表するものである」と曲解され、この「若き」騎士は調整器のこはれた自動人形の如くに亂舞された」と嘲笑し給ひ、「吾々をしてその亂舞の有様を見せしめよ！」と宣まへり。

お、神よ、だが一體誰が調整器のこはれた自動人形の如くに亂舞されたのでせう。天もねがはくば御照覽あれ！

#### 漫罵と誣妄の羅列

「氏の論理の根底を貫くところのものは、類推的並列である」と福本氏は僕を攻撃せられる。だが何故類推的並列であるかに就ては何等説明を試みられない。何故なら斯かる説明は氏をして自己の「唯

神は微笑ませ給ふ

心論的辯證法」を曝露せしめるからである。この弱點を自覺せられる氏は、常に他人に對して罵倒を浴せることによつてこの弱點を補なはれんとせられる。見よ氏は僕を罵倒される。

「氏(北浦)はかの所謂折衷主義の理論家とともに、吾々の理論闘争に對して無關心、乃至は無理解に止まられ來つた。

従つて、わが無産階級政黨運動最近の展開に就て、氏はつひに、運動展開の内的必然の經路を追跡しえられずして、極度の混亂に限られた

氏のこの極度の混亂は、必然に、氏自らの意識化の開始であつた。そして、それは所謂左翼大衆の折衷主義よりの、離脱前進と共に、氏自らの後退——没落の開始であつた」

此の御殿女中式の罵倒が常に氏をして「マルクス主義者」らしき、美服を纏はせる。だが、見よ、氏自身が如何に意識的積極的な誣妄——漫罵をされてゐるかを。

### 再びエンゲルスの絶對的眞理と相對的眞理に就て

『バグダノフが絶對眞理と相對眞理との辯證法的連關を理解しえずして、之を排他的分裂的に表象することによつて放ちえたるエンゲルスに對する非難と、エンゲルスが唯物史觀の構成過程に於ける經濟學批判の決定的意義を没却したことに對する私の批判とを全然混同し去られて居る』

と福本氏は悲鳴を擧げられる。だがエンゲルスを譏ることが非難でなく、批判だと辯解される福本

氏よ、然らば僕は諸君等の二つのエンゲルスに對する言葉を並べて見やう。

『エンゲルスは、徹頭徹尾全ての自己の皮肉さをもつて何等かの、貧弱ではあるが、永久的眞理を承認するといふ、その不徹底さに不正確がある』(レーニン全集第十卷一〇五頁)

とバグダノフは云ひ、福本氏は

『エンゲルスは却つて自ら既に、後の俗學的マルキシストの陥るべき道を準備したるの譏りを免れな

51

と述べられる。之を非難と批判に區別される福本氏よ、先づ自分自身の捏造を引込め給へ。

だが貧弱な言葉で論争の根本を誤魔化される前に、僕の言つたところを好く讀み給へ。氏は唯物史觀を建設展開されんとし、バグダノフも同じこと企畫した。そして氏はその目的にエンゲルスが

「マルクスはフランスの社會主義及び經濟學の研究を既に社會主義的世界觀から研究するに至つた」と「哲學の貧困」の中で述べてゐることを默殺して

『これら双方の偉大なる發見——唯物史觀並に、餘剩價値の發見によつての資本家的生産の祕密の闡明——それらを我々はマルクスに負ふ。この双方の發見と共に社會主義は一の科學となつた』とエンゲルスが述べてゐるところを引用して

『エンゲルスが唯物史觀の構成過程に於ける經濟學批判の決定的意義を没却した』

『エンゲルスによれば、唯物史觀は經濟學批判の前に既に出來上つてゐた』

神は微笑ませ給ふ

と譏られるのである。だが福本氏の罵倒にも拘はらず

「彼(マルクス)の學説は哲學、經濟學及び社會主義の偉大なる代表者の學説の直線的且つ直接的の繼承として發生したものである」(レーニン「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」)

だから、此の點に就て福本氏が「そこに見出された思考材料と結び付くことによつて唯物史觀が出來上つた」といふエンゲルスを攻撃して、エンゲルスは唯物史觀の構成過程に於ける經濟學批判の決定的意義を没却したと譏られることは、マルクス主義は、哲學の歴史と社會科學の歴史、世界文化發達の大道から離れて發生した、封鎖的な硬化的な學説と考へられて居るのである。

而してエンゲルスの俗學性を強調される福本氏は、マルクスは唯物史觀を完成すべくして、完成しなかつたと獨斷し、福本氏が唯物史觀を建設展開するのだと強辯されるのである。

だが氏よ。狂者染みた妄言を吐く前に「コムニスト、マニフェスト」を通讀し給へ。さすればエンゲルスが、マルクスは經濟學の研究を既に社會主義的世界觀から研究するに至つたと述べたことを了解されるだらう。

「マルクスは十八世紀の唯物主義に立止まつてはゐなかつた。……哲學を前進させた。……彼はそれを(唯物主義)……ヘーゲルの體系の把握によつて豊富にし、それはまたフォイエルバッハの唯物主義に適用された。これらの把握の主要なものは、辯證法であつた。……哲學的唯物主義を深め、發展させつゝ、マルクスはそれを最後まで押し進め、それを人類社會の認識の上に押し擴めた。科學的思想

の偉大なる勝利はマルクスの史的唯物主義である。……マルクスの哲學は最終的な哲學的唯物主義であり、それは人類に——殊に労働階級に偉大なる認識の武器を與へた」(レーニニ上掲論文)

これでも、マルクスは史的唯物主義を完成しなかつたと福本氏は詭辯と虚構と漫罵を羅列されるや否や。おゝ理論闘争の神よ。「若き學徒」ドンキホーテは壊れた自動人形の如く亂舞はしなかつた。

マルクス主義を建設展開せんとしたバグダノフも福本氏も、それが如何に愚劣な虚構から出發したものであるかは之を見ても判る。而してバグダノフは

『バグダノフにとつては(全てのマツハ主義者の如く)吾々の知識の相對性を承認することは、僅少の絶對的眞理の容認も除外されるのである。エンゲルスにとつては相對的眞理から絶對的眞理が積み重ねられるのである。バグダノフは——レリヤチピスト、エンゲルスは——デアレクチツク。』(レーニニ全集第十卷一〇七頁)

とレーニンが指摘してゐる如く、バグダノフは我々の知識の無條件的眞實性を拒否するものであり「ナポレオンは一八二一年五月五日に死んだ」(アンチ・デュリング)といふ絶對的眞理を拒否するものであるが、エンゲルスは『昨日吾々はコールタールにアリザリンが實在することを知らなかつた。今日吾々はそれを知つてゐる。借問す、昨日コールタールにアリザリンは實在してゐたか?勿論實在してゐた』……吾々の認識を出來上つた不變のものと思ふに、如何なる形で無知識から知識が出現し、如何なる形で不完全な、不的確な知識が一層完全となり、一層的確となるかを研究し……」(レー

神は微笑ませ給ふ



ニン全集第十卷八〇頁)「唯物主義者であれば、吾々の感覺の機關によつて發見される客觀的眞理を承認することであり。客觀的即ち人間と人類から獨立した眞理を承認することは、何れにせよ、絶對的眞理を承認することを意味する」(同上二〇六頁)

ことを承認するデアレクチックである。だからエンゲルスは、十八世紀の唯物主義から前進して、ヘーゲルの體系を把持し、それを人類社會の認識の上に押し擴めた史的唯物主義を指して「そこに見出された思考材料と結び付くことによつて唯物史觀が出来上つた」と述べたのである。このデアレクチックを目して俗學主義者の鼻祖の如く譏ることは、換言すれば認識論の辯證法——相對的眞理から絶對的眞理が積み重ねられること——を拒否したことである。

この故に言葉こそ異なれ、バグダノフと福本氏は、同じ意味でエンゲルスを攻撃してゐるのである。故に彼等を経験批判論者と名づけたとて敢て驚くべきことではない。だから福本氏が

「單に、言葉の上の些細な類似——を以て直ちに兩者の立場の同一を立證されたものゝ如く思ひ込んで居られる」

と泣言と詭辯を弄されることは無益である、更に夫はエンゲルスに對するバグダノフの非難と福本氏の批判を如何やうに氏自身が混同されやうとも、兩者は同じ立場を採つてゐることを實證するものである。

福本氏よ！先づ成功し得たと信ずる反駁を、一應、呑み込み給へ！



### おゝ神よ！主は福本氏に人類以前の人間の意識を與へ給へり！

「氏(北浦)に於ては、ナイーヴにも、事物に於ける辯證法のみが存在するものゝ如くである。

唯物辯證法が自然辯證法、社會辯證法、並に思考辯證法の統一であることは、氏の夢想だにしえざるところである。

思考の辯證法が實在の辯證法の「反映」であることにのみ拘泥して「事實の辯證法的性質に、辯證法的思考の法則の意識を折合はせ」(エンゲルス)なければならぬことを見られない。』

と福本氏は叫ばれる。だがエンゲルスは

「我々はマルクスと共に(ヘーゲル主義者をも含めた唯心論の攪亂から)意識的辯證法を救ひ出し、それを自然の唯物主義的理解へ移し換へることに自己の任務を置いた唯一の人々であつたと云ひ得る」  
「自然は辯證法の反復である。そして恰も新自然科學は、この反復が非常に豊富で、毎日資料の塊を堆積しつゝ、自然に於ける事柄は結局形而上學的ではなく、辯證法的であるといふことを、實證してゐる」(エンゲルス)と述べ、「辯證法的哲學にとつては、永久に固定したもの、無條件のもの、神聖なものは少しもあり得ない。彼女は全ての上にして全ての中に不可避の没落の烙印を見、そしてその前には、發生と消滅、低度から高度への無限の發展の不斷の過程の外には何ものをも抗し得ないことを見る。彼女自身は單に此の過程の思考的頭腦に於ける單純な反映で (npoctam opraehnem) も〜」

神は微笑ませ給ふ

「斯くて、マルクスに於ける、辯證法は「外界の世界に於けるが如く、人間的思考に於ける運動の一般的法則に就ての科學」である」……マルクスが理解した……辯證法は、現在認識論……と呼ばれてゐるものを、それ自身の中に包含してゐた。そして夫は自己の物體を……歴史的に觀察し、認識の發生を研究し一般化し、無知識から有知識に轉換しなければならなかつた」(レーニン「マルクス主義の三つの源泉と構成部分」)

とレーニンも述べてゐるから、辯證法的哲學それ自身は單に此の過程(全ての上にそして全ての中に)の思考的頭腦に於ける單純な反映である。然るに此の事を理解されない福本氏は辯證法的唯物主義を單に思考の法則にのみ局限せんとするが爲に、エンゲルスを拉致し來つて「事實の辯證法的性質に、辯證法的思考の法則の意識を折合はせる」と云はしめてゐる。だがエンゲルスはマルクスと共に唯心論の攪亂から意識的辯證法を救ひ出し、それを自然の唯物主義的理解へ移し換へることを自己の任務とし、辯證的哲學は自然辯證法、社會辯證法の思考的頭腦に於ける單純なる反映であるから、折合はせるといふことは存在しないのである。之は我々が單純なる例を探ることによつて明瞭となる。昨日我々は茜草の根からアリザリンを攝取してゐたが、今日はコルタールから、ヨリ安價にヨリ簡便に攝取する、とする。だが昨日我々はコルタールにアリザリンが實在することを知らなかつた。即ち昨日我々の認識にはコルタール中のアリザリンが存在しなかつたのである。然るに若し福本氏の如く「唯物辯證法」が自然的辯證法と意識辯證法を折合はせるものであつたならば、昨日頭腦的思考

の中に既に實在したコルタール中のアリザリンが、今日發見された許りのコルタールと折合はせられなければならない。斯かる愚劣なことは存在し得ない。

「唯物主義者にとつては、人間的實踐の「成功」は、我々が攝取するところの、我々の表現と客觀的自

然事物との相應を實證するものである」(レーニン全集第十卷一二二頁)  
即ちコルタール中のアリザリンの發見は、コルタール中のアリザリンから攝取したところの我々の表現が、客觀的自然的な事物として、我々の外に獨立する、コルタール中のアリザリンと相應したことを實證するものである。だから、辯證法的哲學(人類の先驅者の意識)は、我々の外に獨立して實在するコルタール中のアリザリンを、思考的頭腦に於て單純に反映したのである。若し此の場合自然的辯證法と意識辯證法が折り合せるものであつたならば、この先驅者の頭腦の中にコルタールのアリザリンが作られ、それがコルタール中のアリザリンと折合はせられねばならない。人類の先驅者たるも亦至難なるかな!何となれば、彼は頭腦をコルタールのアリザリンで充満させ、彼の外に獨立して存在する、コルタールのアリザリンと折合はさなければならぬから、この故にこそ僕は「思考の辯證法が實在の辯證法の「反映」であることのみを拘泥し」(福本氏の言)たのである。何故ならコルタールを頭腦に詰め込みたくないから。

おゝ全知全能の理論鬭争の神よ!あなたは頭腦にコルタールを詰め込ませ給へり!

更に之を一層明瞭にする爲に次の例を探る。若し「唯物辯證法」が福本氏の解される如く、「事實の辯

證法に、意識的辯證法を折合せる」ものであつたならば、人類以前に辯證法は存在しなかつたらうか。「自然科学は、人間もなし、亦全般的には何等かの生物的存在もなかつたといふ状態の時に地球が存在したことを、積極的に斷定する。有機的物質は餘程後の現象であり、繼續的發達の果實である。即ち感覺する物質も存在せず——何等の「感覺の集積」も存在せず——アベナリウスの學說では、恰かも物體と「不可分に」連絡される、何等の「我」も存在しなかつた。物質は第一位である——思考、意識、感覺は大いに高度の發達の産物である。これが唯物主義的認識論であり、自然科学は盲目的に此の上に立つてゐる」(レーニン全集第十卷 六頁)

即ち以上の引例によつても明かなる如く、人類以前にも地球は存在し、従つて地球の辯證法は存在したのである。之が唯物主義的認識論——辯證法的唯物主義の見解だとすれば、「唯物辯證法」は「事實に於ける辯證法と意識的辯證法の折合は」せであるとされる福本氏には、人類以前の地球の説明は出来ないことになる。何故ならそこには何等折合はせるところの思考、意識、感覺が存在しなかつたからである。換言すれば氏にありては、「辯證法」なる冠字を附した自然と意識が折合はせられて、「唯物辯證法」を構成するのである。だが辯證法的唯物主義はそんな偏狭なものではなく、モツと廣汎な全面的な自由なものであるから、人類以前の地球の存在と、その辯證法をも承認する。この承認は觀念は物質の反映——辯證法的哲學は全過程の思考的頭腦に於ける單純な反映であるといふこと的前提なしには成立し得ない。例へば我々は、人類以前の地球の遺跡を反映して、人類以前の地球の表

現をするが、この表現が遺跡に相應することを實證してこそ我々の實驗は成功したと云はれるのであるが、若し福本氏の如く事實と思考を折合はせられるならば、先づ人類以前の人間の意識を拉し來つて、我々の「遺跡」と折合はせなければ、人類以前の地球の表現は出来ないことになる。そして夫が「唯物辯證法」だとされる福本氏は、明かにエンゲルスを歪められたのである。氏は何處から「折合せ」とエンゲルスの言葉を拉し來られたか知らないが、レーニンの何れの著書にもエンゲルスが斯かる言葉を述べたとは言つてゐない。而してレーニン自身「辯證法的哲學は單に此の過程(全ての上)にして全ての中に)の思考的頭腦に於ける單純な反映である」と斷言してゐるから、「折合はせ」などは、エンゲルスは云つたのでなく、何等か他の言葉を使用したのを、氏は故意に斯く歪められたのであらう。先づ問題を簡單にする爲に氏よ、氏が引用されたエンゲルスの言葉のある著書と箇所を指摘せよそして神よ!

おゝ、全知全能の神よ!主は人類以前の人間の意識を福本氏に與へ給へり!

### 史的唯物主義の源泉と構成に對する無理解

『舊唯物論の立場は「市民」社會である。新唯物論の立場は、人類社會または社會化された人類である』とマルクスはフオイエルバッハ論綱十で述べてゐる。福本氏はこの論綱を引用して

「故に、我々が認識主體に就て語るとき、それは「哲學」に於ての所謂「我」ではあり得なす。」

神は微笑ませ給ふ

と述べられ恰かも舊唯物主義は永久に反動的理論であつたが如き表現をされる。だが福本氏よ。十八世紀の唯物主義は中世紀的遺物に對して革命的であつたこと、而してこの唯物主義をマルクス、エングルスが深化させ、發展させたこと、マルクス主義の哲學は唯物主義であることを忘却してはならない。

即ちマルクスは十八世紀の唯物主義を前進させ、獨逸古典哲學の體系を把持して、再びフオイエルの唯物主義にそれを導くことによつて唯物主義的辯證法を把持し、哲學的唯物主義を深め、發展させつゝ、それを人類社會の認識の上に押し擴めて、偉大なる科學的思想の勝利たる史的唯物主義を捷ち得たのである。そして此の史的唯物主義の認識論は次のやうである。

「人間の認識は、彼から獨立して存在する自然即ち發展しつゝある物質の反映であると同様に、人間の社會的認識（即ち哲學的、宗教的、政治的等の各種の見解及び學說）は矢張り、社會の經濟的制度的反映である」（レーニン「マルクス主義の三つの源泉——」）

然るに、福本氏にありては史的唯物主義の源泉は資本と勞働の矛盾の發展である。彼がエングルスのアノチ、チューリングを抜書きした「唯物史觀と中間派史觀」の「唯物史觀はいかにして發生するに至つたか」の項は、之を實證してゐる。更に氏の史的唯物主義の構成過程は、一、近代有産者社會二、經濟學批判、三、政治學批判、意識形態批判である。

この故に、福本氏は、「マルクスの學說は……人類が十九世紀に作り出した獨逸の哲學、英國の經濟

學、フランスの社會主義の燦ける正統的相續人であり、これら三つはマルクス主義の源泉であると同時に構成部分である」（レーニン）ことを理解されない。即ち氏にありては、史的唯物主義發達の辯證法を理解することが出来ない。従つて史的唯物主義は、氏にありては、新たに建設展開しなければならなくなつて来る。然しこの建設展開は完全にマルクス主義でなく、且つ氏の認識の外に實在する正統マルクス主義とは、何等の關係なしに氏独自の頭腦に描き出されたものである。従つて氏は其の独自の頭腦でマルクス主義を觀察するのであるから、換言すれば、氏の思考からマルクス主義へ行く方向を採られるのであるから、夫は明白に唯心論である。何故なら「事物から、感覺と思考に行くか？或ひは思考と感覺から事物に行くのか？第一——即ち唯物主義的方向はエングルスが把握してをり、第二——即ち唯心論的方向はマツハが把握してゐる」（レーニン全集第十卷二七頁）のであると、レーニンが述べてゐるやうに福本氏の史的唯物主義に對する態度は明白に唯心論的である。

マルクス主義の歴史的發達に對する福本氏の斯かる唯心論的傾向は、必然に史的唯物主義的認識を攝取し得ないのは當然である。

即ち氏は、エングルスが、「階級それ自身」から「自己の爲の階級」への轉換變化を論じてゐる言葉を拉し來つて、恰かもそれが氏の

「かくして無産階級はその社會的存在の必然により、事物を全體性に於て觀察せざるを得ない。その

自己認識が同時に全社會の客觀的認識たらざるを得ないのである。

そしてまた、かゝる認識に對して、この階級は認識の主體たると同時に客體たるを得べく、またたらずにはゐられないのである」

を實證し得たかの如き顔をされる。だが氏よ。この二つは全然背馳したものなのだ。

即ち「事物それ自身」としての「階級それ自身」が、「我々の爲の事物」としての「我々の爲の階級」に變化するためには、「階級それ自身」の持つ歴史的任務を自覺したこと、即ち哲學的に云へば「人間（階級）の社會的意識（即ち哲學的、宗教的、政治的等々の各種の見解及び學說）が、社會の經濟的制度を（正確）に反映し」得たことである。

之に反し、福本氏にありては「階級それ自身」は必然に、事物を全體性に於て觀察してゐる。そしてまた、かゝる認識に對して、この階級は認識の主體（自己の爲の階級）たると同時に、客體（階級それ自身）たるを得べく、またたらずにはゐられないのである。斯かる混亂、曲解は蓋しエンゲルスの述べたところとは全然相背馳するところのものである。一例を採つて之を示せば、

『若し我々が、或る自然の現象の我々の認識の正しいことを、我々自身それを生産し、それをその條件から呼び出し、それを此の我々の目的に従はしむべく強制して實證し得ることが出来たとしたら、カントの捕捉し得なかつた「事物それ自身」は終局を告げるのである。生物の肉體と植物から生産される化學的物體は、有機的化學がその一を他に準備しなかつた間は、斯かる「事物それ自身」に止まつて

ゐたのである。例へば、あかね草の染色體としてのアリザリンは我々は現在では野生のあかね草の根からではなく、ヨリ安價に、ヨリ簡便にコルタールから採るとすれば、茲に「事物それ自身」は「我々の爲の事物」に變化するのである』（レーニン全集第十卷七九頁）から、「事物それ自身」が「我々の爲の事物」になつた時は「事物それ自身」は終局を告げるのである。

然るに福本氏にありては、「事物それ自身」と「我々の爲の事物」とは同時に並立してゐるのである。

だが氏はまた自然と社會の相異を強調されるだらうから、序に氏の人類社會への認識をも茲で述べて置く必要があるが、要するに氏にありては、社會變革の過程は必然に階級形成の過程であり、階級闘争の過程であるから、「自己の爲の階級」（社會變革の過程）が「階級それ自身」と同時に發生するのである。だが我々はエー・フ・エルが階級形成を完成しながら、歴史的任務を自覺した「自己の爲の階級」でないことを知り、我が國労働階級が四百數十萬人によつて形成されながら、歴史的任務を自覺した労働者が極く少數であることに見ても、階級形成の過程は必然に社會變革の過程だとすることは、哲學的虚構であることを知る。

而して斯かる見解を人類社會の認識に採らるゝ福本氏にありては

『無産者とは如何なるものであるか、また、無産者は、その存在によつて、歴史的に何をなすべく餘儀なくされてゐるか、といふことが問題だ』（エンゲルス福本氏譯載）

といふことは問題となり得ない。

以上によつて、福本氏が恰かもエンゲルスの味方らしく装ひながら、實は全然非マルクス主義的認識を展開されてゐるのを曝露し得た。

然らば氏の認識論は哲學の分野に於て、何れに屬すべきか？之から吟味しやう。

福本氏は、僕が福本氏の認識論は「認識の主體たると同時に客體たり得る」とあるからバグダノフの「社會的生存と社會的自覺は的確な意味に於て同一である」と同じことになるから、氏の認識論は經驗批判主義従つて反動的唯心論だと定義したことに甚しく狼狽され、自分とバグダノフとの間にカキを廻らして、自分の正統性を表明しやうと試みられた。だがそれは完全なる失敗と、氏の經驗批判主義の再度の實證となつてゐる。氏は云はれる。

「經驗批判論者の決定的誤謬は「社會的生存」と「社會的自覺」とのかゝる關係を抹殺して、兩者の不可分離の結合——否、後者との不可分離の結合に於てのみの前者の存在——兩者の「的確な意味に於ての同一」を主張するところにある」

「第一に、我々が「認識の主體たると同時に客體たり得る」といふとき、……「認識の主體」とは……無産階級を指すものであり、「客體」とは……有産者社會をいふ」

「第三に、従つて、……「認識の主體」は經驗批判論者の「社會的生存」……ではない。況んや「客體」と「社會的自覺」とは根本的にことなる」

だが福本氏よ。バグダノフも「マルクス主義者」であつたことを忘れ給ふな。そしてレーニンがバ

グダノフを反駁してゐるのは、恰もマルクス主義の辯證法的唯物主義、史的唯物主義の基礎の上に於てである。而してレーニンが、バグダノフの「社會的生存と社會的自覺は的確な意味に於て同一である」といふのを反駁して「社會的生存と社會的自覺は同一でない云々」といつてゐるのは、「我がマツハ主義者はマルクス主義を理解しない。何故なら彼等はマルクス主義に、云はゞ、他の側から接近したからである。そして彼等は……マルクスの經濟的、歴史的理論を、その基礎即ち哲學的唯物主義を了解せずに、把握したからである」(同じ項)即ち茲でレーニンは、唯心論とは何で、唯物主義とは何であるかを全然理解しなかつたバグダノフの社會觀を攻撃してゐるのである。

だから福本氏が幾ら抗辯されやうとも「主體は同時に客體たり得る」と主張される以上は史的唯物主義的認識たる「人間の認識は彼から獨立して存在する自然即ち發展しつゝある物質の反映であると同様に、人間の社會的認識(即ち哲學的、宗教的、政治的等々の各種の見解及び學說)は矢張り社會的經濟的制度的反映である」ことを理解し得ないことである。故に福本氏は懸命にバグダノフから離れられやうとするが、それは却つて氏を益々唯心論の泥沼へ陥れて行く。

見よ！氏が如何に狼狽されたるかを！福本氏に據れば、農民が小麥を賣るや、農民は之によつて世界市場に於て世界中の小麥の生産者と「交際」してゐることを世界中の小麥生産者と共に認識してをらなければならぬと僕が指摘したことに對し、福本氏は貧弱な言葉を以て抗辯せられる。

『その自己認識が同時に全社會の客觀的認識たり得』「かゝる認識に對して、認識の主體たると同時

に客體たり得る」ところの階級は無産階級以外にない。しかるに、氏はレーニンの例にとりたる「農民」を拉し來つて無産階級にすりかえてゐる」そして福本氏は凱歌を擧げられる。

『氏(北浦)は、かくして、マルクス主義に對して完全に盲目なることを自ら曝露せられてゐる。』

「かくも血迷へるドン・キホーテのために、ロシナンテとサンチヨの役割を振あてられたるレーニンとプーリンを、神よ、許させ給へ」

だが福本氏よ血迷つたのは、「若き學徒」ドン・キホーテではなかつた。

レーニンは、農民の一例を採つた言葉の前に

『社會的生存と社會的自覺は同一でない、……少しでも複雑な全ての社會形態——殊に資本主義社會形態——に於ては人々は交際を開始するや、この點に如何なる社會的關係が置かれてあるか、それは如何なる法則で發達するか等々を自覺しない。……』

と明白に言つてゐるのである。そして其の一例として農民を掲げてゐるのであるが、茲でレーニンが言はんとしてゐることは、認識の主體たると同時に客體たり得るといふ言葉と同意義の社會的生存と社會的自覺は同一であるといふバグダノフの定義を攻撃してゐるのであり、夫は「階級それ自身」は必然に、(又は同時に)「自己の爲の階級」であるといふ定義を攻撃してゐるのである。この事を理解せずして、無産階級を農民にすりかえたと喚ばれることは、要するに事の根本を理解せずして、言葉の末に拘泥した詭辯に過ぎない。

かゝる無能と無知は反動的唯心論者たる福本氏にありては、まことに當然の歸結ではある。

### 唯心論的辯證法的方法

マルクスの辯證法的方法は、社會をそのあるが儘に觀察し、その物質的具體性を測定することを要求するものである。そして其の爲には、「全ての現象を、第一にその不可分離の連絡に於て、第二にその運動に於て見ることを要求する」(プーリン)ものである。

然るに福本氏は、夫自身反動的唯心論たる「かゝる認識に對して、この階級は、認識の主體たると同時に客體たる得べく、またたらずにはゐられない」無産階級が

第一に、事物を媒介性に於て觀察する

第二に、事物を生成に於て

第三に、全體性に於て

觀察することが辯證法的方法だと主張せられる。此の點に關しては、僕の親切なる解釋を氏は裏切られたことになる。即ち氏は斯く明白に主張せられることによつて、却つて自ら反動的唯心論者たることを證明したのである。之に關して氏は僕が何等積極的に之を示さなかつたと非難されるが、然らば具體的積極的に之を示せば、氏は總同盟第一次分裂に對して斯う云はれる。

「労働團體の分裂！理論闘争の開展！しかも、單一無産政黨へ、の方向轉換の途上に於ける労働團體の

神は微笑ませ給ふ

分裂！理論的闘争の開展！」（同氏「理論闘争」一六四頁）（圈點は筆者）

だが氏よ！總同盟第一次の分裂は單一無産政黨への方向轉換途上に於ける分裂ではなかつたのだ。之は山川氏が明白に主張せらるゝ如く、組合内政の問題に關した分裂であつたのだ。之をしも單一無産政黨への方向轉換途上に於ける分裂と理解せらるゝ氏は、「社會をそのあるが儘に觀察し、その物質的具體性を測定する」ことに對して全然無能であることを示すものである。更に總同盟第二次分裂の結果發生した日本勞農黨をブルジョア的と誤認することによつて、兩黨大衆の合同を妨害し、日本農民組合、労働組合評議會の分裂を來たさしめた福本氏の辯證法的方法是、果してマルクス主義であらうか。然り

「マルクスの辯證法的方法是マルクス主義者から、彼が理論に於けるデアレクチックである許りでなく、實踐に於てのデアレクチックであることを要求する。マルクス主義者は行動、×××、×××實踐を要求する」（レーニン「左翼小兒病」一八七頁）

ものであるから、氏の辯證法的方法是、實踐に於て無産階級運動の勢力の分散、減衰を來さしめたる左翼小兒病的従つて反動的唯心論的辯證法的方法である。何故斯く云ふか。

レーニンは「左翼小兒病」の中で、状態を全體的に測量することの要求を強調し、自己個有の表現を具體性として攝取しないことを強調してゐる。

然るに福本氏は自己個有の願望、自己の思想的政治的態度を客觀的具體性として採用してゐる。即

ち氏によれば、組合の内政問題に關する分裂が、單一政黨樹立の方向轉換途上に於ける分裂と誤認され、反動的な社會民衆黨樹立に叛逆したが、勞農黨には加入しなかつた日本勞農黨の行動——總同盟に關する限りに於て——が、ブルジョアの行動として排撃されるのである。斯かる福本氏の辯證法的方法が、社會をそのあるが儘に觀察し、その物質的具體性を測定することを要求するマルクスの辯證法的方法と根本的に相違するのは當然である。何となれば氏にありては、無産階級それ自身は同時に全階級的歴史的任務を自覺したところの「かゝる認識に對して、この階級は、認識の主體たると同時に客體たり得べく、また、たらずにはゐられない」階級であるからである。だから氏にとりては、無産階級の色々の層の存在は問題となり得ない。之は例へば、社會民衆黨の組織に叛逆して左傾はしたが、左翼にまでは到達しなかつたところの總同盟の第二次除名組、所謂「正義派」の大衆を、左翼大衆と同等と氏が見られることによつても明白である。

斯くの如く、無産階級をそのあるが儘に觀察し、その物質的具體性の測定を要求するマルクスの辯證法的方法と相背馳する福本氏の辯證法的方法是、彼をして實踐の「デアレクチック」となるとき、それは無産階級運動を害するものとならしめてゐるのは、また當然のことである。

斯かる反動的唯心論的方法論を振翳す氏にありては、單に他人に對する漫罵のみが可能となる。氏はいはれる。僕は日本勞農黨の出現によつて、その馬脚を曝露したと。だが馬脚を露出したのは、それこそ一體誰だらう。福本氏等の理論に從つて行動すれば、日本農民組合、労働組合評議會は分裂し



勞農黨と日本勞農黨の合同は不可能となると豫言したのは一體誰だらう。僕自身ではなかつたか。而して氏は、兩黨の合同、日本農民組合、労働組合評議會の分裂を豫見し得ないか又は斯かる現象を肯定したのではなかつた。それこそ福本氏よ、これ以上はいふを要しないであらう。

### 見苦しい『内的』説明

氏の斯かる唯心論的辯證法的方法是、氏が常に無産階級運動の辯證法を、原因的法則に於て把握しないからであることは、拙稿「アンチ福本イズム」に於て詳論したところである。然るに福本氏は、その非を承認することが出来ず、單なる漫罵と虚構を以て之に答へてゐる。

『氏(北浦)にあつては「單なる機械的」な「轉換」「擴大」ではあり得ない』といふことは、直ちに「有機的な轉換、擴大」を意味するものゝ如くである』

だが氏よ聞け！マルクス主義では機械的といへば有機的が對立し、内的といへば外的が對立するのである。そして内的は有機的と同意義であり、外的は機械と同意義である。

何故マルクスが「有機的」説明を要求して「機械的」説明を排撃したかといふに、マルクス時代の自然科学の原子説は、絶對に不可分離の原子を主張し、夫は資本主義的個人主義に相應したからこそ、社會的見解、有機的説明をマルクスが要求したのである。然るに『内的』説明者福本氏は大膽にも叫ばれる

『だが私は未だ嘗て氏の理解されたるが如き「有機的」なる表現を用ひたことはない。否、更に、所謂歴史の「有機的發展」の概念は筆者自らの強く排斥し來つたところである』

氏よ氏が「有機」學派を強く排斥し來つたとは云へ、「内的連絡」「内的説明」を主張されることは「有機的連絡」「有機的説明」を主張されることなのだ。そして夫はマルクス時代には、正當であつただ。だが物質構成に就ての表現の革命は根底的に原子説を放棄し、夫れ自身の對立は辯證法的に變化したと僕は主張したのである。だが氏は、混亂の餘り、この事を理解し得ず、徒らに喧噪と漫罵を繰返される。

『しかるに、北浦氏にあつては「無機的」と「辯證法」とが各々その對立的地位から抹消されて「有機的」と「機械的」とが對立せしめらる。……かゝるテルミノロジーの支離滅裂な混用、マルクス主義文献のでたらめな引用、それによる無稽な牽強附合を、しからば、氏は如何にしてなし得たか、又、何故したか？』

氏の粗雑なる經驗主義の故に、その徹底的俗學主義の故に、しかも氏の急速なる意識化——没落を自ら糊塗し、救済せしとして、手段をえらぶところなく「敵手」を傷け倒さんとする焦慮の故に』

だが、福本氏よ！島清式天才を振廻す前に、僕が掲げた引例を冷靜に判斷せよ。氏の如何なる論文、如何なる場所に、現象の原因的法則の説明が存在するや。「方向轉換論」に於ける氏の説明の何處に、現象の原因的法則の説明がある。「理論闘争」の何の個所にその説明がある。而

も氏は常に「現象の羅列」なる修辭の下に、現象の原因的、法則的の説明を避けてゐるではないか。だが、このことは大正八―九年の方向轉換の意義を誤解せしめ、労働總同盟の第一次第二次の分裂に對して氏をして、階級運動をそのあるが儘に觀察し、その物質的具體性を測定することに全然無能であることを曝露せしめたのである。而も氏は常に氏自身の思想的、政治的態度を客觀的具體性として採用せんと努められる。而してその事自身は反動的唯心論であることは上述した。「揚棄」と「放棄」の言葉の末の議論は現在では大した問題でない。

### マルクスの經濟學說と福本氏の經濟學批判の方法論

以上に於て僕は福本氏が如何に史的唯物主義を曲解、改變してゐるかを見そして氏の辯解が單なる漫罵と哲學的虚構以外の何者でもないことを見たから、次に氏の經濟學說が如何に非マルクス主義的であるかを見やう。

この事は既に拙稿「アンチ福本イズム」に於て論證したところではあるが、氏は漫罵と虚構と詭辯を以て、我々の論争の根本を誤魔化し去らんとされるから、僕は氏の「經濟學批判の方法論」を批判することによつて、氏が非マルクス主義者であることを實證しやう。

### 資本主義社會の生産關係の發生と發達及没落の研究

『本書の終局の目的は現代社會即ち資本主義社會の經濟的運動の法則を發見することにある』とマルクスは「資本論」の序文に述べてゐる。

而して「マルクスの經濟學說の内容はこの、歴史的に一定の社會の生産關係の發生と、發達と及び没落の研究である。」(レーニン)

然るに福本氏によれば

『本書に於て考究せんとするところは、資本家的生産様式及びそれに適應するところの生産關係並に交換關係である』

とマルクスの言葉を引用せられてゐる。而して氏は大膽に叫ばれる。

『……而も「資本論」に於て、彼が實際に取扱はんとした取扱へる所は……私の所謂資本家的生産の純經濟過程の範圍を出でないものであつて、従つてこゝでは資本の内在的運動法則が探求闡明せられたるに止まり、資本の現實的運動法則の統一的具體的な闡明は、はじめより「資本論」の範圍外に意識的におかれてゐた所である。云々』(同氏「經濟學批判の方法論」三二三頁)

然らば福本氏の資本の現實的運動法則の統一的具體的闡明とは何か？

第一段 純經濟過程

第二段 國家過程(政治過程)

第三段 意識過程

神は微笑ませ給ふ

## 第四段 國際過程

である。そして氏は云はれる

「それ故に、また、こゝに「純經濟過程の範圍を出でない」といふのは私の所謂國家過程……並に世界過程……に及んでゐないといふ意味に外ならない」(福本氏「經濟學批判の方法論」三五六頁)

だが斯かる見解は、マルクスの經濟學說の内容が、歴史的に一定の資本主義社會の生産關係の發生と、發達と及び没落の研究であることに對して全然盲目であることを示すものである。然り氏は、マルクスの經濟學說から「資本家的生産様式及びそれに適應するところの生産關係並に交換關係の考究」のみを見たのである。

而して氏は云はれる。

「……社會主義的經濟學の展開の眞の出發點が発見せらるゝ迄には、歴史——資本主義の發展——はなほ二つの段階を経過しなければならなかつた。

その第一は——一九〇〇——一九一二年にいたる時代であつて、此の時代に於ける資本の帝國主義的發展並にその内在的矛盾の表現を説明するため「資本論」第二卷後半の意義……ははじめて發見された。しかもそれは先づロシアの所謂「合法的マルキシスト」に依つて逆用的に、次でポーランド・ドイツのロザ・リュクセンブルグによつて眞實的に發見せられたのである。

その第二段は——世界大戰後の資本主義の發展(殊にその企業形態に於ける)並に世界大恐慌(一九

二一)に於てその表現をみつゝある資本主義矛盾の發展した時代であつて、こゝに始めて本論の主題たる問題——資本論の對象範圍が經濟學批判中に於ける地位の問題——は眞に發見せらるゝにいたつたのである。かくしてマルクスによりてははじめられたる經濟學批判をマルクスの方法によりて更に展開せしめ、資本の現實的運動法則を探求闡明せんとする試みは終にその眞實の出發點を見出すことを得たのである。』(同氏「經濟學批判の方法論」三二八——三二九頁)

以上の引例によつて明かなるが如く、福本氏によればマルクスは資本の現實的運動法則を發見しやうとはしたが、それを發見するには歴史の進行を俟たねばならなかつたといふのである。之を換言すればマルクスは資本主義社會の生産關係の發生と、發達及び没落の具體的運動法則を發見し終らなかつたといふのである。

果してさうだらうか？

「半世紀以前、マルクスが「資本論」を執筆した時自由競争は經濟學者の大多數に「自然の法則」と感じられた。理論的及歴史的解剖によつて、自由競争は生産の集中を生み出し、そしてこの集中はその發達の一定段階に於て獨占到導くといふことを實證したマルクスの著書を、御用的科學は沈黙の共謀によつて亡ぼさうと試みた。現在では獨占は事實となつた」(レーニン全集二四九頁)

即ちマルクスは半世紀以前に今日の獨占を豫言したのである。斯かる豫言はマルクスが資本主義社會の生産關係の發生、發達及び没落の研究によつて爲し得たところである。然るに福本氏は、社會主

神は微笑ませ給ふ

義的經濟の展開の眞の出發點は「資本論」に存在せず、何等か他のものに存在する如く述べられる。而してレーニンの「資本主義新段階としての帝國主義」は遂に氏によりて默殺されてゐる。そして氏は云ふ。「資本論」は抽象であると。

「……ローザは資本論第二卷後半の解釋に當り、……第二卷後半の意義を闡明することを得たのであるが、……マルクスのこの抽象を具體的にひきなほせば即ち足るものなるかの如く誤解して、資本論第三卷が依然なほ一つの抽象的過程の範圍を出づるものでないことを認識し得なかつたのである」(同氏前掲著書三三〇頁)

誠に勇敢なる「マルクス主義者」で福本氏はあることよ!

マルクス、エンゲルスの經濟學に對する斯かる見解は、またアベナリウスの弟子ブレイの見解でもある。ブレイは一八八五年「經濟學に於ける形而上學」の中で斯う述べてゐる。

「この研究の目的は——ブレイは書いてゐる。——現在の全ての經濟學が經濟生活の説明に際して形而上學的前提に依頼してゐることを示す爲である」(レーニン全集第十卷二六六頁)

唯だ兩者の相違は、福本氏はマルクスの用語を借用し、夫を出鱈目に排列することによつて斯かる結論を得、後者は正面から攻撃してゐることである。だがマルクスの經濟學を抽象的だと非難することは兩者とも同一である。之れでも福本氏は尙ほ反動的唯心論者たるの名譽を拒絶せられるや否や。

### 資本論解説

マルクスの經濟學說の内容を「この、歴史的に一定の社會の生産關係の發生、發達及び没落の研究」(レーニン)と理解し得ない福本氏は「資本論」の解説に至つても、マルクス主義を混亂と曲解に導いてゐる。

「近代有産者社會の物質的、社會的、生産

(一)「私達のこゝに取扱はんとする對象は先づ物質的生産である」

(二)「社會に於て生産するところの個々人が——従つて個々人の社會的に決定せられたるところの生産が自ら(本論の)出發點である」(福本氏前掲著書四四—四五頁)

と福本氏は述べられる。だが氏よ現代の資本主義社會は單に物質的社會的生產によつて特徴づけられはしない。

「資本主義社會に於ては商品生産が支配してゐる。だから、マルクスの解剖は商品の解剖から出發する」(レーニン「マルクス主義解説」)

即ち現在の資本主義に於ては商品生産が支配してゐるから、商品の解剖を出發點とすべきである。之に反される福本氏は資本主義社會の歴史的特徴と特質とを解説する能力をも持たれないことを曝露された。

5  
2

この非マルクス主義者は更に續ける。

『凡ての端初は困難である。これは凡ての科學にあてはまる。故に、殊に商品の分析を包含する(第一篇)第一章の理解は最も困難であらう』(同氏前掲著書五九)

なるマルクスの資本論序文を引用しつゝ、福本氏は

『單純な範疇——資本家社會に於て支配的なる單純範疇——(資本)』(同上)

『私達は以上に依て「明白に科學的に正當なる方法」によるときは、經濟學批判は先づ「資本家的社會に於て支配的なる單純範疇から——従つて土地所有權からではなく、正に資本から始めらるべきものなることを知つた。

しかし、更によく考へてみれば、資本は、より單純なる範疇としての商品にまで分析することができ、或るやうに見える……かくして經濟學批判はかゝる「商品の分析」を以て始めらるべきだ。……それらはすべて、まだ「さう見える」といふに止まつてゐる』(同上七〇—七一頁)

以上の如く氏の方法論はマルクス主義の經濟學說の端緒を資本——商品といふ風に解釋せられる。之は資本主義の發生に就ての完全な無知を曝露したものである。資本は商品生産發達の一定段階に於て貨幣が變化したものである。従つて夫は貨幣——貨幣——貨幣——貨幣(金銀)に變化することを要求する。

然るに資本を先づこの社會の支配的範疇と見ることによつて、其の單純化された範疇を商品と見るが如きは、資本の發生を全然理解することを不可能ならしめるものである。

茲で福本氏の「經濟學批判の方法論」を反駁することは、本論の規模に於ては許されないことであるから、此の二三の例を以て筆を擱くが、要するに福本氏の經濟學說は決してマルクスの經濟學說でないことを示せば足りるのである。

斯る非マルクス主義者が『何故生産力が全てを解説する終局的原因となるか』といふ史的唯物主義理論にとつての根本問題を解決し得なかつたのは當然であるし、また僕の反駁に對して「生産を終局的決定要素とする所の交互關係」を強調することによつて、恰かも僕の所論を反駁し得たかの如く威高丈になられるのもまた當然である。だが福本氏よ！聞け！問題は「何故」にあるのだ。此の點に關して答辯の出来ない間は氏の答辯は依然として舊來の「意志は世界を支配する」「生活條件は人間を作り出す」交互關係の説明でしかあり得ない。そして夫は鶏は卵を生み、卵は鶏となる交互關係と少しも相違はないのである。

福本氏よ！何も七面鳥の如く怒られる必要は少しもない。蓋し鶏と卵の關係は立派に交互作用なのですぜ！

更に生産關係の問題に至つても、僕が氏の生産力と生産關係の混同を論じ、生産關係とは空間と時間の中における人間の勞働的編成であると親切にもブハーリンの定義を教へて上げたのに、氏は尙ほも執拗に生産力と生産關係の混同を持続される。氏はいふ。

神は微笑ませ給ふ

「我々が決定要因(生産)に就て語るとき、人はそれに「狭義」と「廣義」の二つがあることを知らなければならぬ」

だが福本氏よ！問題は廣義と狭義にあるのではなく生産關係の物質性を如何に説くべきか？にあつたのだ。氏はこの問題に對する自己の無能を隠蔽せんが爲に、生産の廣義と狭義の解釋、氏の出鱈目な引用符から生じたエンゲルスと福本氏の混同に對する嘲笑によつて此の問題を解決し得たかの如く装はれるが、(そして此の點に就て福本氏が如何様にまた如何程喚かれやうとも自由であるが)「何故生産力が全てを解説する終局的原因であるか？」「生産關係の物質性を如何に説くべきか？」に對して全然無能であることに少しの變化もない。

斯く觀じ來れば、福本氏はマルクス主義の經濟學說を理解した者でもなければ、また發展させたものでもないことが判る。かゝる非マルクス主義者が尙ほ「厚顔」にも自己をマルクス主義者の如く装ふのは笑止である。

### 労働階級の覇權否定としての福本イズム

哲學的唯物主義を「認識の主體たると同時に客體たり得る」と反動的唯心論的に曲歪し、マルクスの經濟學說、史的唯物主義を「完成さるべくして、完成されなかつた」と否定される福本氏は、更にマルクスの社會主義學說をも承認しない氏独自の理論を展開されてゐる。氏は云ふ。

「社會變革の過程は必然に階級形成の過程であり、階級闘争の過程である」と。

だがこの點に關する僕の攻撃に對して氏はマルクスの階級「それ自身」と「自己の爲の」階級を徹頭徹尾理解することが出來ず、依然として非マルクス主義的階級闘争說を固持されてゐる。この點に關して詳細に論じることが同じ言葉を繰返すことであるから、略すとして、直ちに階級闘争に關する氏の見解が非マルクス主義である實證に入らう。

「労働者階級が本來主として許されてゐる所の生活過程には明白な限度がある。

その過程は、即ち物質的生活の過程——經濟過程である」と福本氏は云はれる。そしてこの言葉は「労働者階級はその歴史的存在、社會的地位の必然により、有産者社會の全部的變革を歴史的使命としてゐるのであるが」に連つてゐる。だが問題は、「古いものを掃き出し、新しいものを作る能力のある勢力を形成し得る——自己の社會的地位に於てそれは當然である——ところの勢力を我々を包む社會それ自身の中から探し出し、それを闘争のために教育し、組織することである」

若し福本氏の如く労働階級の本來主として許されたる生活が物質的生產過程(同氏「理論闘争」)だけだとするならば、氏は何を以てデモクラシー運動の先頭隊としての労働階級を説明せんとせられるのであるか。然り氏には夫が不可能である。そして氏はそのことの代りに、云はれる。

「しかるに、かゝる過程、闘争の「地盤の外部」から無産階級運動に來り投ずるかの「新なる要素」——所謂××的知識階級は、主として政治生活の過程、精神的な生活の過程を生活する……所謂方向轉換過

程は、まさに、これらの二要素——大衆の自然生長性とマルクス主義の意識的行爲性——の結び付きによる、労働者運動・組合闘争意識から全無産階級運動、全無産階級政治闘争意識への發展の過程である』

そして其の實證としてレーニンの「何を爲すべきか」を擧げられる。

だが氏よ聞け！レーニンは君をメンシエヴィキと呼ぶだらう。見よ！レーニンは云ふ。

「……我々の前には直ちに三年宛二つ現はれる。……一は一九〇七年夏——他は一九一〇年夏に終る時代に別れるところの。……兩時代の類似點は、ロシアの進化が何れの期間に於ても依然として資本主義的進化であるといふことにある。……斯くして過ぎ去つた三年（前三年のこと——筆者）のエポックは戰術問題と名づけられた問題が、マルクス主義に於ける第一列に押し出されたのである。これら諸問題からの論争と分裂を恰かも「インテリゲンチヤ的」論争であり、「無自覺なプロレタリアートへの影響の爲の闘争」であり、「インテリゲンチヤのプロレタリアートへの適應」の表現であると、全てのウエツヒ主義者（メンシエヴィキを指す——筆者）の如く考へる位誤つた意見はない。それとは反對で、この階級が成熟し、彼がロシアの二つの異なるブルジョアの發達の傾向の衝突に無關心でゐられなくなり、そしてこの階級の思想家達が之等異なる傾向に相應した（直接的又は間接的、直線的又は反射的反映）理論的公式を與えずにはゐられなかつたからである。」（レーニン全集第十一・四〇一頁）斯くして福本氏の方角轉換論はメンシエヴィキの方角轉換でしかあり得ない。即ち氏の方角轉換論

無産階級の勢力に相應した公式ではなく、指の先から生み出された「外部」からの理論であるからである。

氏の斯かるメンシエヴィキの方角轉換論は従つて「闘争を當分理論闘争に局限する」といふ議論を生み出す。だが、斯かることはマルクス主義者は誰も云つたことがない氏獨特のものである。

エンゲルスは獨逸の労働運動に就て斯う書いてゐる。

「……労働運動が存在してから最初のものとして、闘争は三つの闘争の方角（理論的、政治的、實踐的經濟的）を相互に足並を揃はせ連絡し合せて計畫的に遂行された。こゝに、云はゞ、集中的攻撃に獨逸労働運動の力量と力強さがある」（レーニン全集第五卷一三七頁）

而も氏は僕の攻撃に對して辯解される。

「當時、わが無産階級が「始めて、結合——全國的一大政黨樹立の必然に當面してゐる」形勢の下に於て」かくいつたと氏は言はれる。


だが之は恰かも労働黨第二回綱領委員會席上に於ける左翼が「その餘りに左翼的な」修辭の爲に中間派を取逃がし、右翼結合の便を與へたといふ「理論闘争」の失敗後に於てなされた提議である。換言すれば政治的、經濟的闘争と飛び離れ、連絡なしに行はれた「理論闘争」の失敗後になされた提議である。氏の提案が如何に無産階級運動の客觀的勢力と關係なしになされてゐるかの、例を茲にも見る。そして氏は叫ばれる。「外部」から理論を注入するのだと。それが如何にメンシエヴィキ的であるかは既に

神は微笑ませ給ふ

見たところである。

結 語

福本氏は「北浦氏は私の理論的根據をつかまんとして、あらゆる曲論と虚構を試みられた。しかも、以上によつて明かなるが如く、かゝる氏の企圖は、いともあはれなる失敗を遂げてゐる」と述べられ、『氏(北浦)の立場を貫くところのものは、常に「經濟」が「政治」に對して優位にあることを主張する經濟主義である』と漫罵される。だが讀者も知らるゝ通り「アンチ福本イズム」に北浦個有の理論はないのである。唯だ僕はそこで、福本氏がマルクス主義者でないことを正統マルクス主義者と比較して示しただけである。更に「經濟」が「政治」の優位にあると述べ、また、述べんとしたことは何處にもないのである。かゝる漫罵は氏の反動的唯心論を糊塗せんためのお飾りに過ぎない。そして本論に於ても讀者は再び反動的唯心論者、非マルクス主義者としての福本氏を見らるゝであらう。



昭和二年四月十五日印刷  
昭和二年四月廿一日發行

マルキシズムの變革

定價金七十錢

著 者 北 浦 千 太 郎

發 行 者 大 島 秀 雄

東京神田駿河臺西紅梅町十二番地

版

印 刷 者 小 川 三 藏

東京市神田區豊島町四番地

所 行 發

**店 書 社 人 同**

東京市神田區西紅梅町二十番地

振替東京二七〇六五  
電話神田三三四〇

豐盛堂・印刷

5  
2



同人社出版書目

著譯者	書名	定價	送料
森戸辰男著	最近ドイツ社會黨史	二、五〇	一、二五
大内兵衛著	現代イギリスの政治過程	二、〇〇	一、〇〇
嘉治隆一著	近代ロシア社會史研究	二、八〇	一、二〇
伊藤武雄著	現代支那社會研究	一、八〇	一、〇〇
佐野文夫譯	改訂フオイエルバツハ論	一、二〇	一、〇〇
高野岩三郎著	社會統計學史研究	一、五〇	一、〇〇
高野、大内譯	マルサス人口の原理	二、五〇	一、二五
高野岩三郎著	本邦人口の現在及將來	一、〇〇	一、〇〇
久留間鏡造	猶太人問題を論ず	一、〇〇	一、〇〇
細川嘉六譯	英國勞働階級の狀態	三、〇〇	一、二〇
竹内謙二譯	資本蓄積再論	一、六〇	一、〇〇
宗道太譯	俗資本論	三、五〇	一、二〇
水谷長三郎著	科學的社會主義序論	一、六〇	一、〇〇
水谷長三郎譯	科學的社會主義序論	一、六〇	一、〇〇
波多野鼎譯	マルクス化とカント化	一、〇〇	一、〇〇
水谷長三郎譯	史的唯物論略解	一、〇〇	一、〇〇
淡徳三郎譯	史的唯物論か	一、〇〇	一、〇〇
河西太一郎譯	農業の社會化	二、〇〇	一、一〇
瀧川政次郎著	日本農民の生活問題	二、八〇	一、一五
水谷長三郎著	法廷に於ける小作争議	一、八〇	一、〇〇
水谷長三郎譯	階級意識とは何ぞや	一、四〇	一、〇〇
石濱知行著	闘争の跡を訪ねて	一、八〇	一、〇〇
井口孝親譯	ローザルクセンブルグの手紙	一、五〇	一、〇〇
蔵原惟人譯	藝術と社會生活	一、八〇	一、〇〇
山村喬譯	組合運動	一、八〇	一、〇〇
丸岡重堯譯	大英社會主義國の構成	三、五〇	一、二〇
林要譯	社會主義及社會運動	三、五〇	一、二〇
細野三千雄譯	勞働組合運動の理論と歴史	二、〇〇	一、一〇
森戸辰男譯	消費組合發達史論	二、〇〇	一、一〇
久留間鏡造譯	マルクス◇エンゲルス評傳	二、〇〇	一、一〇
大内兵衛譯	勞働辯護論	一、三〇	一、〇〇
細川嘉六譯	佛年誌	一、三〇	一、〇〇

櫛田民藏譯	マルクス◇エンゲルス評傳	二、〇〇	一、一〇
大内兵衛譯	勞働辯護論	一、三〇	一、〇〇
細川嘉六譯	社會に關する新見解	一、八〇	一、一〇
大林宗嗣譯	産業別勞働組合主義	二、五〇	一、二〇
松澤兼人譯	新社會の建設	二、〇〇	一、一〇
北澤新次郎著	セツツルメントの研究	一、八〇	一、一〇
大林宗嗣著	療の社會化	一、五〇	一、〇〇
社會醫學編	産業能率の研究	一、八〇	一、一〇
暉峻義等譯	各國無産政黨發達史	二、〇〇	一、一〇
社會思想人合著	政治の社會的基礎	一、〇〇	一、〇〇
大山郁夫著	英國は何處へ行く?	一、五〇	一、〇〇
萩原久興譯	闘争手段としての學校教育	一、三〇	一、〇〇
越智道順譯	シヨアベン	一、〇〇	一、〇〇
森戸辰男著	宗教問答	一、五〇	一、〇〇
權田保之助譯	ハウアノ	一、〇〇	一、〇〇
櫛田民藏譯	日本勞働年鑑(15)	三、八〇	一、二〇
大原社會問題研究所編	日本社會事業年鑑(15)	二、八〇	一、一〇
倉敷勞働科學研究所編	日本社會衛生年鑑(15)	三、八〇	一、二〇
後藤貞治著	本邦消費組合の現況	一、五〇	一、〇〇
太田敏兄著	農民組合の小作農家調査	一、五〇	一、〇〇
森戸辰男譯	剩餘價值學說史(第一分冊)	三、〇〇	一、一〇
森戸辰男譯	剩餘價值學說史(第二分冊)	三、〇〇	一、一〇
櫛田民藏譯	剩餘價值學說史(第三分冊)	三、〇〇	一、一〇
大内兵衛譯	剩餘價值學說史(第四分冊)	三、〇〇	一、一〇
森戸辰男譯	剩餘價值學說史(第五分冊)	三、〇〇	一、一〇
久留間鏡造譯	マルクスの民族、社會並國家觀	一、〇〇	一、〇〇
森谷克巳譯	マルクスの階級闘争理論	一、〇〇	一、〇〇
島海篤助譯	マルクスの經濟概念	一、〇〇	一、〇〇
利久譯	マルクスの經濟概念	一、〇〇	一、〇〇

5  
2

### 社會問題叢書續刊豫告

○社會の發見は、社會の問題の存在の後であつた。而かも發見せられた社會問題は、直ちに傳統の歪んだスペクタクルを通じて解釋せられた。故に一度發見された問題自體がまた混沌の内へと没しようとしてゐる。

○しかし、問題の存在は、あくまでも問題の正しき把握を要求する。その把握の手段はたゞ大きい力をもつたスペクタクルの外にはない。こゝに吾が社が人類史上に輝く大きいスペクタクルたる名著を移して吾が國の讀書界に提供せんとするのはこの問題の把握に資せんがために外ならぬ。

○原著はいづれも社會問題に關する名著中の名著、譯者はいづれも我新進氣鋭の學士、翻譯の正確暢達に關する責任については弊社亦私に期するところがある。

R	ルケンブルグ	資本蓄積再論	（亞流はマルクス説か）	宗道	價壹圓六拾錢
F	エンゲルス	ドイツ農民戦争		松岡二十世	送料拾五錢
K	マルクス	ルイ・ボナパルト		大山彦一・小田忠夫	
H	エンゲルス	先史時代の結婚と家族		服部之總	
J	S. ミ	住居階級の問		小宮義孝	
J	A. ホブソン	帝國主義の將來		杉野忠夫	
F	エンゲルス	イギリス十時間労働者協会の活動		福間敏男・鈴木武雄	
K	エンゲルス	國際労働者主義者の活動		西村信雄・小澤正元	
F	エンゲルス	バクレーニン		淺野野	
F	エンゲルス			喜多野清	

五六〇七二京東替振 社人同 田神京東 兌發  
 ○四四三田神話電

### 社會主義古典叢書續刊豫告

○偉大なるマルクス主義の體系も亦歴史の集積に外ならない。彼の學説は古典經濟學と彼以前の社會主義との綜括である。

○かくてマルクス以前の社會主義の古典は今新たなる價値を有つものである。故にその最も代表的な著作を撰んで之を嚴密な邦文に移すは我國現下の要求に應ずる所以であると確信するのみでなく、この古典はいづれも古典として定評あるものである。希くば最善な訳として吾國の定譯たらしめんことはなく、我が社の至願である。

オロ	バベ	社會に關する新見解	大林宗嗣	價一圓八十錢
サシ	シモン	新キリシム教	小岩井	送料十五錢
サシ	シモン	産業革命	平島貞	
オロ	バベ	精神上及實行上の革命	星島貞	
カ	カ	四國家經濟的狀態の認識	平出長五	
カ	カ	國家經濟的狀態の認識	舞出長五	
カ	カ	資本労働者綱領、憲法	林出長五	
カ	カ	労働者綱領、憲法	河野	
カ	カ	間接税と労働者階級	大内兵	
カ	カ	労働税と労働者階級	山内兵	
カ	カ	財産組織	新山内兵	

五六〇七二京東替振 社人同 田神京東 兌發  
 ○四四三田神話電

社會思想叢書續刊豫告

同人合著	各國無產政黨發達史	定價二十圓 送料十圓
伊藤武雄著	現代支那社會研究	定價壹圓八拾錢 送料十五錢
友岡久雄譯著	帝國主義と資本の蓄積	(近刊)
波多野鼎譯著	唯物論史	(近刊)
石濱知行譯著	經濟史概論	(近刊)
フオイエルバツハ 阪本勝譯著	基督教の本質	(近刊)
河西太郎譯著	土地問題論	(近刊)
田中九一著	インタナショナル研究	(近刊)
メ村又介譯著	新國家論	(近刊)
河村又介譯著	軍人階級論	(近刊)

東 京 東 替 振 社 人 同 田 神 京 東  
紅 梅 町 三 田 神 話 電 〇 四 四 三 〇 四 四 三 〇 四 四 三 〇 四 四 三

社會思想パンフレット

エンゲルス	無產階級の過去現在及將來 (十一版)	定價二十錢 送料二十錢
レーニン	マルクス傳とマルキシズム梗概	定價二十錢 送料二十錢
丸岡重堯著	世界資本主義の現勢と無產階級運動	(近刊)
河野密著	無產政黨運動の批判	(近刊)
平貞藏共著	我邦勞動運動の數的考察	(近刊)
友岡久雄著	原始人の經濟生活	(近刊)
石濱知行著	帝國主義と農民問題	(近刊)
八木澤善次譯著	帝國主義と農民問題	(近刊)

東 京 東 替 振 社 人 同 田 神 京 東  
紅 梅 町 三 田 神 話 電 〇 四 四 三 〇 四 四 三 〇 四 四 三 〇 四 四 三

56  
21

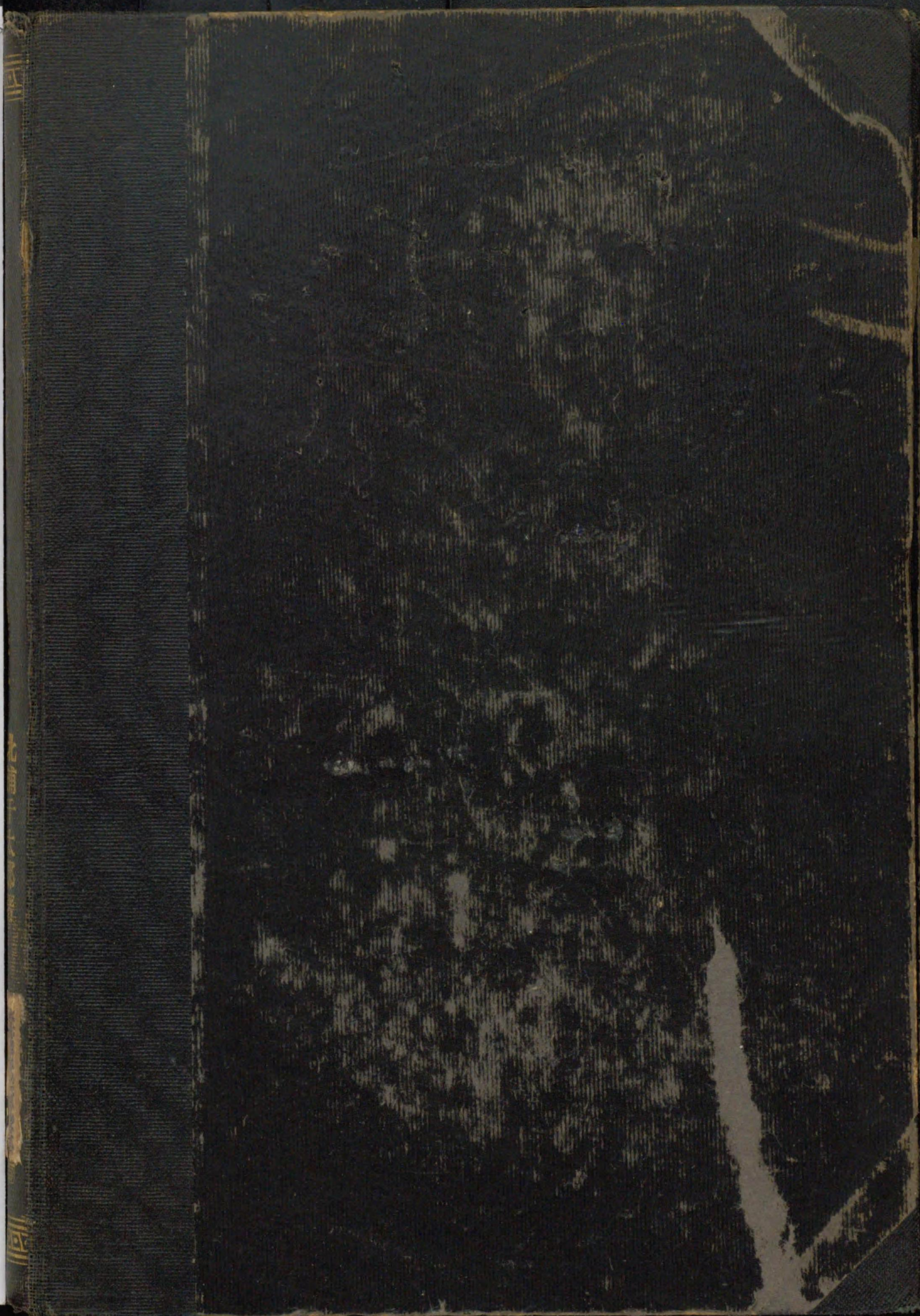
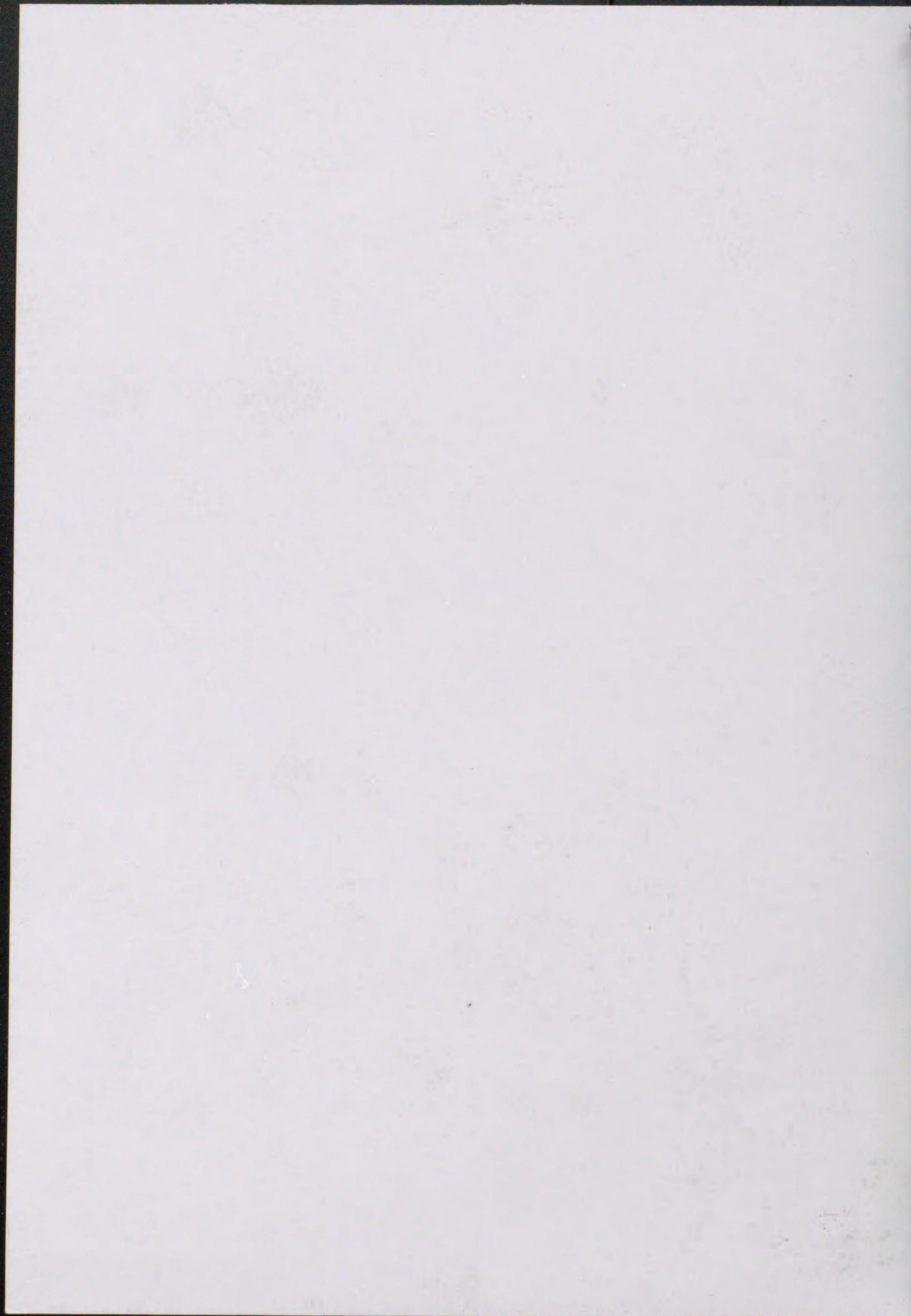
— 書 叢 等 我 —

冊別	(1)	(2)	(3)	冊別	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	冊別	(1)	
(一)	波多野鼎譯	細川嘉六譯	嘉治隆一譯	(一)	河上、大山、新戸譯	嘉治隆一譯	森戸辰男譯	笠信太郎譯	恒藤恭譯	(二)	我等社譯	大内兵衛譯
	オスカール・マルクス	マルクス	エンゲルス		マルクス、エンゲルス	マルクス	トマス・スペンス	カウツキー	ルバツハ		ニアリング	カウツキー
	マルクス化とカント化	獨逸的觀念形態	獨佛年誌		獨逸的觀念形態 第一編	資本と賃労働	土地公有物論	ヘーゲル哲學の批判	ヘーゲル哲學の批判		ソヴエート露西亞の教育論	マルクス
	送價 1.50	送價 1.50	送價 1.50		送價 1.50	送價 1.50	送價 1.50	送價 1.50	送價 1.50		送價 1.50	送價 1.50

發賣 東京 神戶 同人社 振替 東京 二七〇六 電話 三三〇四

565  
210

565  
210

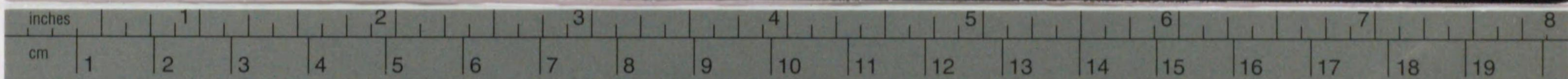
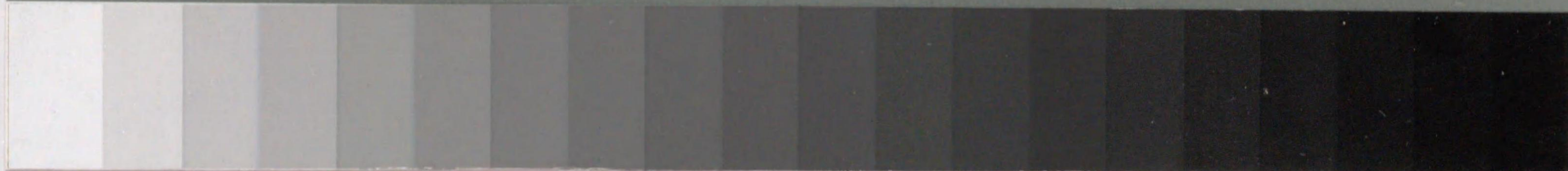


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

